

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 1

— 八千代市島田込ノ内遺跡 —

平成10年 3 月

千 葉 県・土 木 部

財団法人 千葉県文化財センター

ふなばし いんざいせん

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 1

やちよししまだこめのうち
— 八千代市島田込ノ内遺跡 —



序 文

財団法人千葉県文化財センターは、埋蔵文化財の調査研究、文化財保護思想の涵養と普及などを主な目的として昭和49年に設立されて以来、数多くの遺跡の発掘調査を実施し、その成果として多数の発掘調査報告書を刊行してきました。

このたび、千葉県文化財センター調査報告第328集として、千葉県土木部の主要地方道船橋印西線建設事業に伴って実施した八千代市島田込ノ内遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

この調査では、古墳時代前期と奈良・平安時代の二つの時期の集落や多数の墨書土器が見つかるなど、この地域の原始・古代の歴史を知る上で貴重な成果が得られております。

刊行に当たり、この報告書が学術資料として、また郷土の歴史に親しむ資料として広く活用されることを願っております。

終わりに、調査に際し御指導、御協力をいただきました地元の方々を初めとする関係の皆様や関係機関、また、発掘から整理まで御苦勞をおかけした調査補助員の皆様にご心から感謝の意を表します。

平成10年3月31日

財団法人千葉県文化財センター
理事長 中村 好成

凡 例

- 1 本書は、千葉県土木部による主要地方道船橋印西線建設事業に伴う埋蔵文化財調査報告書である。
- 2 本書に収録した遺跡は、千葉県八千代市島田字込ノ内996ほかに所在する島田込ノ内遺跡(遺跡コード 221-020)である。
- 3 発掘調査から報告書作成に至る業務は、千葉県土木部の委託を受け、財団法人千葉県文化財センターが実施した。
- 4 発掘調査及び整理作業の組織、担当者及び期間は本文中に記載した。
- 5 本書の執筆は、萱田調査室長 菟淳一が行った。
- 6 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁生涯学習部文化課、千葉県土木部、八千代市教育委員会の御指導、御協力を得た。
- 7 本書で使用した地形図は、下記のとおりである。
第1図 国土地理院発行 1/25,000地形図「白井」、「小林」、「習志野」、「佐倉」(合成)
第2図 八千代市発行 1/2,500八千代都市計画基本図No.5 (編集して使用)
- 8 本書で使用した図面の方位は、すべて座標北である。
- 9 本書で呼称した遺構番号は、編集の都合上、調査時の番号と異なる。
- 10 挿図に使用したスクリーントーン及び記号の用例は、次のとおりである。

遺 構	遺 物
 炉	 縄文土器
 焼土塊	 赤彩
 炭化物集中	 黒色処理
 炭化材	 須恵器
 粘土	 軸
---	硬くしまった範囲

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査の概要	1
1	調査の経緯と経過	1
2	調査の方法	1
第2節	遺跡の位置と環境	4
第2章	旧石器時代・縄文時代	12
第1節	旧石器時代	12
第2節	縄文時代	12
1	土器	12
2	石器	16
第3章	古墳時代	19
第1節	住居跡	19
第2節	土坑	46
第3節	遺構外出土の遺物	46
第4章	歴史時代	48
第1節	住居跡	48
第2節	掘立柱建物跡	72
第3節	土坑	80
第4節	遺構外出土の遺物	87
第5章	まとめ	89
第1節	遺跡の変遷	89
第2節	文字資料と紡錘車	89
1	文字資料	89
2	紡錘車	92
報告書抄録		129

挿図目次

第1図	下層確認調査状況図	2	第7図	縄文土器(2)	15
第2図	上層遺構位置図	3	第8図	縄文時代石器(1)	17
第3図	遺跡位置図	5	第9図	縄文時代石器(2)	18
第4図	周辺遺跡図	6	第10図	古墳時代1号住居跡遺構・遺物 (1)	20
第5図	旧石器時代石器出土状況・石器	12	第11図	古墳時代1号住居跡遺物(2)	21
第6図	縄文土器(1)	14			

第12圖	古墳時代2号住居跡遺構・遺物	22	第40圖	歴史時代6号住居跡遺物(1)	59
第13圖	古墳時代3号住居跡遺構・遺物	24	第41圖	歴史時代6号住居跡遺物(2)	60
第14圖	古墳時代4号住居跡遺構・遺物	25	第42圖	歴史時代6号住居跡遺物(3)	61
第15圖	古墳時代5号住居跡遺構・遺物 (1)	27	第43圖	歴史時代7号住居跡遺構	64
第16圖	古墳時代5号住居跡遺物(2)	28	第44圖	歴史時代7号住居跡遺物(1)	65
第17圖	古墳時代6号住居跡遺構・遺物	31	第45圖	歴史時代7号住居跡遺物(2)	66
第18圖	古墳時代7号住居跡遺構	33	第46圖	歴史時代8号住居跡遺構	69
第19圖	古墳時代7号住居跡遺物	34	第47圖	歴史時代8号住居跡遺物	70
第20圖	古墳時代8号住居跡遺構・遺物	35	第48圖	歴史時代9号住居跡遺構・遺物	73
第21圖	古墳時代9号住居跡遺構(1)	36	第49圖	歴史時代1号掘立柱建物跡遺構 (1)	74
第22圖	古墳時代9号住居跡遺構 (2)・遺物(1)	37	第50圖	歴史時代1号掘立柱建物跡遺構 (2)・遺物	75
第23圖	古墳時代9号住居跡遺物(2)	38	第51圖	歴史時代2号掘立柱建物跡遺構 (1)	76
第24圖	古墳時代10号住居跡遺構	40	第52圖	歴史時代2号掘立柱建物跡遺構 (2)・遺物	77
第25圖	古墳時代10号住居跡遺物	41	第53圖	歴史時代3号掘立柱建物跡遺構 (1)	79
第26圖	古墳時代11号住居跡遺構(1)	42	第54圖	歴史時代3号掘立柱建物跡遺構 (2)・遺物	80
第27圖	古墳時代11号住居跡遺構 (2)・遺物(1)	43	第55圖	歴史時代4号掘立柱建物跡遺構 (1)	81
第28圖	古墳時代11号住居跡遺物(2)	44	第56圖	歴史時代4号掘立柱建物跡遺構 (2)・遺物	82
第29圖	古墳時代12号住居跡遺構・遺物	45	第57圖	歴史時代土坑(1)	83
第30圖	古墳時代1号土坑遺構	46	第58圖	歴史時代土坑(2)	84
第31圖	遺構外出土古墳時代遺物	47	第59圖	歴史時代土坑(3)	85
第32圖	歴史時代1号住居跡遺構	49	第60圖	歴史時代土坑(4)	86
第33圖	歴史時代1号住居跡遺物	50	第61圖	遺構外出土歴史時代遺物	88
第34圖	歴史時代2号住居跡遺構・遺物	51	第62圖	土製紡錘車集成図	93
第35圖	歴史時代3号住居跡遺構・遺物	53			
第36圖	歴史時代4号住居跡遺構・遺物	54			
第37圖	歴史時代5号住居跡遺構・遺物 (1)	55			
第38圖	歴史時代5号住居跡遺物(2)	56			
第39圖	歴史時代6号住居跡遺構	57			

表目次

第1表	墨書資料一覧	90	第2表	刻書資料一覧	91
-----	--------	----	-----	--------	----

図版目次

- | | |
|------------------------------------|---------------------|
| 図版1 遠景・近景 | 図版17 旧石器時代・縄文時代石器 |
| 図版2 近景、旧石器時代石器出土地点土層断面 | 図版18 縄文土器（1） |
| 図版3 古墳時代1号・2号住居跡 | 図版19 縄文土器（2） |
| 図版4 古墳時代3号・4号・5号住居跡 | 図版20 古墳時代土器（1） |
| 図版5 古墳時代6号・7号・8号住居跡 | 図版21 古墳時代土器（2） |
| 図版6 古墳時代9号・10号住居跡 | 図版22 古墳時代土器（3） |
| 図版7 古墳時代10号・11号住居跡 | 図版23 歴史時代土器（1） |
| 図版8 古墳時代12号住居跡・1号土坑、歴史時代
1号住居跡 | 図版24 歴史時代土器（2） |
| 図版9 歴史時代2号・3号・5号住居跡 | 図版25 歴史時代土器（3） |
| 図版10 歴史時代6号住居跡 | 図版26 歴史時代土器（4） |
| 図版11 歴史時代7号・8号住居跡 | 図版27 歴史時代土器（5） |
| 図版12 歴史時代8号・9号住居跡、歴史時代1号
掘立柱建物跡 | 図版28 歴史時代土器（6） |
| 図版13 歴史時代2号・3号・4号掘立柱建物跡 | 図版29 歴史時代土器（7） |
| 図版14 歴史時代土坑（1） | 図版30 歴史時代土器（8） |
| 図版15 歴史時代土坑（2） | 図版31 歴史時代土器（9）・紡錘車 |
| 図版16 歴史時代土坑（3） | 図版32 歴史時代磁石・土製支脚 |
| | 図版33 歴史時代鉄製品・銅製品・鉄滓 |

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

1 調査の経緯と経過

主要地方道船橋印西線建設事業に伴って、千葉県土木部では、路線内の埋蔵文化財の所在の有無について照会した。これに対して、千葉県教育委員会は、島田込ノ内遺跡ほか2遺跡が所在するとの回答を行った。遺跡が所在することを受けて、千葉県教育委員会と千葉県土木部は、遺跡の取扱いについて協議し、その結果、遺跡は発掘調査を行って記録保存することとなった。

発掘調査及び整理作業は、財団法人千葉県文化財センターが受託して実施することとなり、平成5年度に島田込ノ内遺跡の発掘調査から開始した。続いて、間見穴遺跡、道地遺跡の発掘調査を行っている。

島田込ノ内遺跡の調査面積は、4,000㎡である。調査期間は、平成5年10月1日～平成6年1月20日である。

確認調査は、上層について10%、下層について4%の面積を発掘して行い、上層について3,200㎡が本調査となった。下層は確認調査で終了し、本調査は実施しなかった。

発掘調査担当者は、次のとおりである。役職名は、当時のものである。

調査研究部長 高木博彦、印西調査事務所長 田坂浩、主任技師 鈴木文雄、技師 豊田秀治

整理作業は平成7年度～平成9年度の3年度にわたって行った。

平成7年度は、水洗・注記の一部、図面・写真の整理、復元、実測の一部まで行った。担当者は次のとおりである。

調査研究部長 西山太郎、印西調査事務所長 谷匂、調査係長 香取正彦

平成8年度は、実測の途中からトレースまで行った。担当者は次のとおりである。

調査部長 西山太郎、北部調査事務所長 谷匂、萱田調査室長 舘淳一

平成9年度は、レイアウト、原稿執筆、報告書の印刷刊行まで行った。担当者は次のとおりである。

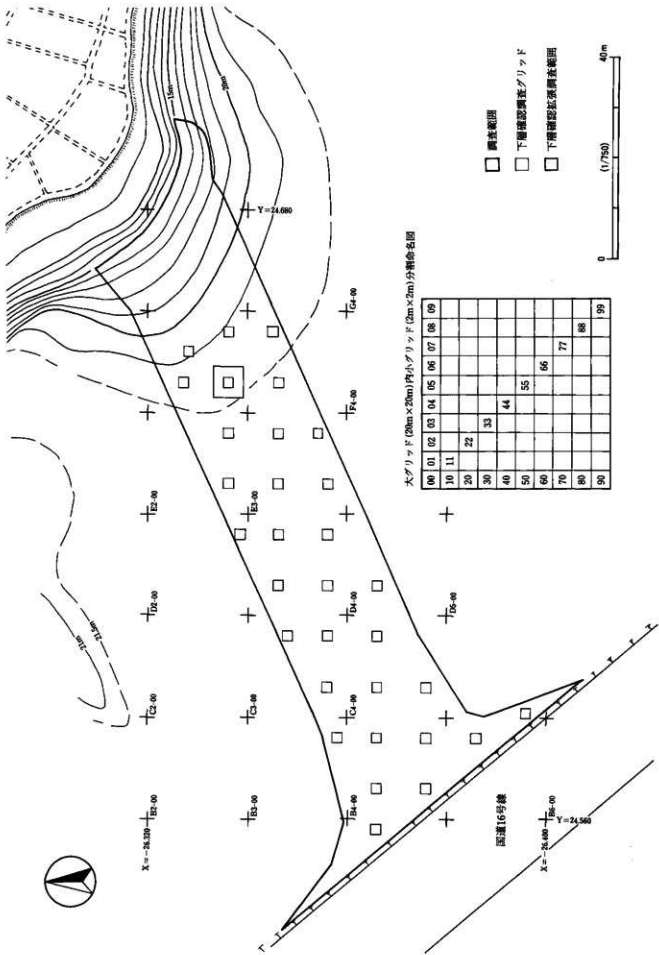
調査部長 西山太郎、北部調査事務所長 折原繁、萱田調査室長 舘淳一

2 調査の方法

発掘区の設定は、公共座標に基づいて20m×20mで大グリッドをつくり、西から東へA・B・C…、北から南へ1・2・3…と名付け、両者を組合わせて名称を付けた。大グリッドの中は、さらに2m×2mの100個の小グリッドに分割して、西から東へ0・1・2…、北から南へ00・10・20…と名付け、両者を組合わせて名称を付けた。

確認調査は、上層は幅2mのトレンチを道路の向きに沿って3本ほど等間隔で入れて行い、下層は斜面部を除いた調査範囲に等間隔で2m×2mのグリッドを入れて行った。

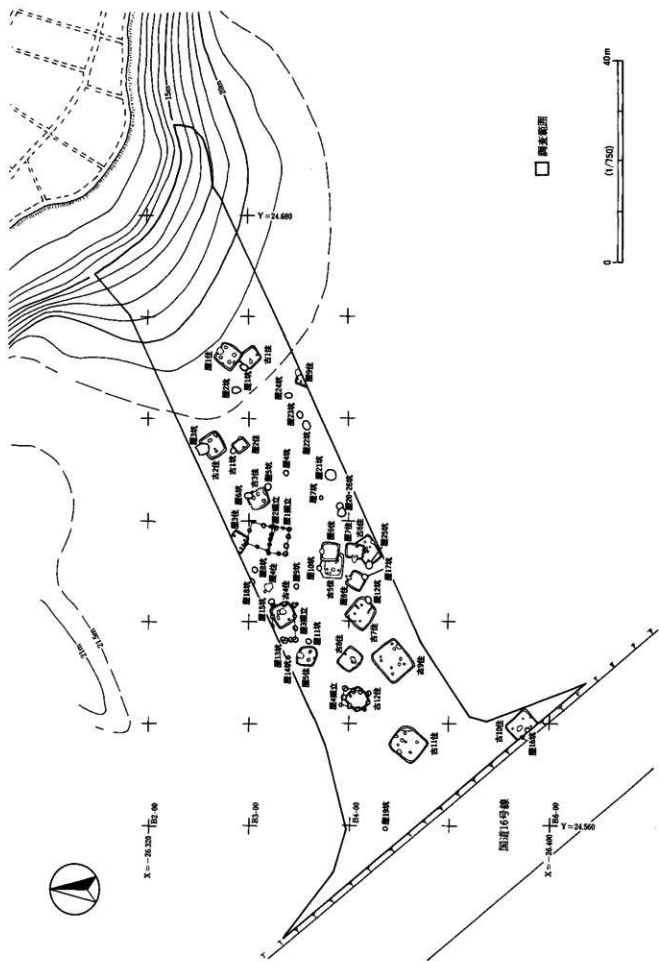
遺構番号は、発掘調査の時点では、掘立柱建物跡を除いて、遺構の種類によらず001から順に付した。掘立柱建物跡はH-001～004と付した。遺物への注記、図面・写真への記録はこれによる。本書では、時代ごと、遺構の種類ごとにまとめて報告したために、新たに遺構番号を付け直した。



大グリッド (20m x 20m) 内小グリッド (2m x 2m) 分類命名図

00	01	02	03	04	05	06	07	08	09
10	11								
20	22								
30			33						
40				44					
50					55				
60						66			
70							77		
80								88	
90									99

第1図 下層確認調査状況図



第2圖 上層遺構位置圖

第2節 遺跡の位置と環境

遺跡は、現在の行政区画では、八千代市島田に属する。八千代市の北部に位置する。国道16号線の島田台交差点から500mほど千葉方面に寄った道路沿いである。大字島田の範囲は、遺跡の東に突き出た形の舌状の小台地全体にほぼ当たる。小字の込ノ内は大字島田の北側の端になり、遺跡の帯だけでなく、国道を挟んだ反対側も含む。遺跡のすぐ北側にある谷津は大字が異なり、神久保（いものくぼ）である。鉄生産とのつながりが推測される地名である。後述するように、遺跡からは、鉄滓がごく少量であるが出土している。

遺跡の立地をみると、新川の水系に属する。印旛沼の西沼から流れ出る新川の本流の西岸にある台地上である。台地の標高は21m前後である。台地の下の現在の水面の標高は、9m前後である。比高差12m前後になる。新川は、今から30年ほど前まで現在と反対に印旛沼に注いでいた。島田込ノ内遺跡は、印旛沼に面して営まれた数多くの遺跡の一つと言える。なお、新川を遺跡の下から北東方向へ1.5kmほど印旛沼に向かって遡ったところに、船橋市、白井町方面から流れて下って来る神崎川との合流点がある。

遺跡の調査は、島田遺跡として、昭和53年に今回の調査範囲の北100mの送電線鉄塔部分が行われて、平安時代の住居跡1軒などが見つかっている。

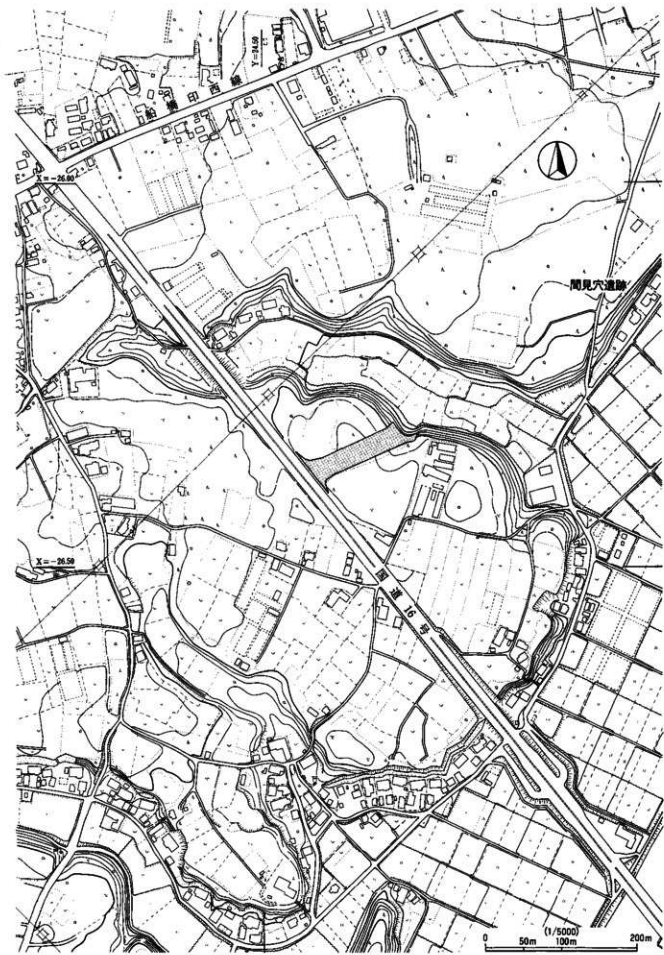
遺跡の周辺には、旧石器時代から近世まで数多くの遺跡がある。ここでは、そのうちで発掘調査されている程度までその様子が明らかにされているものを選び、島田込ノ内遺跡で生活が営まれた時期である旧石器時代、縄文時代早期後半から前期前半、弥生時代後期、古墳時代前期、奈良・平安時代に分けて位置を示すとともに、遺跡の概要を紹介する。併せて各遺跡についての主要な文献を示す。

旧石器時代の遺跡は、まず遺跡と同じ台地上には、間見穴・道地・子の神台（佐山寺の下）の3遺跡がある。間見穴・道地の2遺跡では石器集中が見つかり、子の神台（佐山寺の下）遺跡ではナイフ形石器が表採されている。

遺跡のある台地から見て北側に当たる、神崎川を隔てた印西市の台地上には、北の台・向ノ地・松崎Ⅰ・松崎Ⅱ・松崎Ⅲ・松崎Ⅵの6遺跡がある。このうち北の台・向ノ地の2遺跡で石器が出土し、松崎Ⅰ・松崎Ⅱ・松崎Ⅲ・松崎Ⅵの4遺跡で、石器集中が見つかる。

遺跡のある台地から見て東側に当たる、新川を隔てた台地上の保品には、おおびた遺跡があり、有舌尖頭器が出土している。同じ台地の南側の下高野には下高野新山遺跡があり、ナイフ形石器が出土している。その西側の米本には殿台遺跡があり、石器集中が見つかる。さらにその南側の村上には村上込の内遺跡があり、石器集中が見つかる。その東側の上高野には二重堀遺跡があり、石器集中が見つかる。遺跡のある台地から見て南側に当たる、大きな谷津を隔てた台地上の董田には、菅地ノ台・権現後・ヲサル山・ヲサル山南・北海道・坊山・向山・井戸向・白幡前・川崎山の10遺跡がある。このうち権現後・ヲサル山・北海道・坊山・井戸向・白幡前の6遺跡で石器集中が多数見つかるほか、向山・川崎山の2遺跡でも石器集中が見つかり、菅地ノ台遺跡では剣片が、ヲサル山南遺跡ではナイフ形石器が出土している。

縄文時代早期後半から前期前半の遺跡は、まず、遺跡と同じ台地上には、道地・瓜ヶ作・真木野向山の3遺跡があり、道地遺跡では早期条痕文系土器が出土し、瓜ヶ作遺跡では早期の炉穴が100基近く見つかり、真木野向山遺跡で早期の炉穴と陥穴が見つかる。



第3図 遺跡位置図



第4図 周辺遺跡図 (1/25,000)

遺跡のある台地から見て北側に当たる、神崎川を隔てた印西市の台地上には船尾町田・船尾貝塚・松崎VIの3遺跡があり、船尾町田遺跡では早期の茅山式が出土し、船尾貝塚では発掘はされていないが茅山式が出土し、松崎VI遺跡では早期条痕文土器がまとめて出土している。

遺跡のある台地から見て東側に当たる、新川を隔てた台地の米本には逆水西・大山の2遺跡があり、逆水西遺跡では茅山式が出土し、大山遺跡では早期・前期の土器が出土している。その東側に当たる神野・保品には、おおびた・境堀・向境・役山東・栗谷の5遺跡があり、おおびた遺跡では早期の子母口式・茅山式が出土し、境堀・向境・役山東・栗谷の4遺跡で早期の炉穴が見つっている。その南東側の下高野には作畑・下高野新山の2遺跡があり、作畑遺跡では早期の野島式・茅山式が出土し、下高野新山遺跡では早期の井草式・鶺ヶ島台式・茅山式が出土し、同時期の住居跡・炉穴が見つっている。

遺跡のある台地から見て南側に当たる、大きな谷津を隔てた台地上の萱田には、権現後・ヲサル山・坊山・向山・川崎山の5遺跡があり、権現後遺跡では早期を中心に前期もわずかに出土し、ヲサル山遺跡では早期の炉穴・陥穴があり、条痕文系を中心とする早期の土器と、前期前半の土器が出土し、坊山遺跡では早期から前期前半の土器が出土し、向山遺跡では前期前半の土器が出土し、川崎山遺跡では早期と前期前半の土器が出土している。

後述するように、本遺跡の住居跡は、古墳時代前期のものと奈良・平安時代のものである。しかし、古墳時代前期として報告する住居跡の中に、弥生時代後期のものかと思われるものが含まれる。そこで、弥生時代後期の周辺に遺跡も紹介することにする。

弥生時代後期の遺跡は、まず遺跡と同じ台地上には、間見穴・道地・子の神台（佐山寺の下）・佐山台・東山久保・松原・桑納・桑橋新田（桑橋）の8遺跡があり、それぞれ集落跡が見つっている。このうち桑橋新田（桑橋）遺跡では同時期の方形周溝墓も4基見つっている。

遺跡のある台地から見て北側に当たる、神崎川を隔てた印西市の台地上には、向新田・船尾町田・向ノ地・船尾城の4遺跡があり、それぞれ集落跡が見つっている。

遺跡のある台地から見て東側に当たる、新川を隔てた台地上の米本には逆水西遺跡があり、集落跡が見つっている。その東側の神野・保品には、境堀・向境・役山東・栗谷・上谷・雷・おおびたの7遺跡があり、それぞれ集落跡が見つっている。このうち栗谷遺跡では多数の住居跡と同時期の方形周溝墓群が見つかり、上谷遺跡では住居跡が58軒見つっている。これらの遺跡から見て南側の米本には、平沢・阿蘇中学校東側の2遺跡があり、それぞれ集落跡が見つっている。そのさらに南側の村上には名主山・浅間内の2遺跡があり、それぞれ集落跡が見つっている。

遺跡のある台地から見て南側に当たる、大きな谷津を隔てた台地上の萱田には、菅地ノ台・権現後・ヲサル山・北海道・井戸向・白幡前・川崎山の7遺跡があり、それぞれ集落跡が見つっている。このうち権現後遺跡では住居跡が73軒と方形周溝墓が3基見つかり、川崎山遺跡では住居跡が29軒見つっている。

なお、後期ではなく中期の遺跡であるが、島田込ノ内遺跡から見て同じ台地上に、田原窪遺跡の東西120m、南北100m、住居跡40軒以上から成る大規模な環濠集落跡があること、また、東側に当たる新川を隔てた台地上の米本に逆水遺跡の方形周溝墓群があることは、本遺跡の成立を考えると、留意すべきと思われる。

古墳時代前期の遺跡は、まず遺跡と同じ台地上には、間見穴・道地・子の神台・田原窪・佐山台・真木野向山・東山久保・松原・桑納・桑橋新田（桑橋）の10遺跡があり、それぞれ集落跡が見つっている。

このうち佐山台遺跡では住居跡が229軒見つかり、道地遺跡では住居跡が40軒以上見つかり、桑橋新田(桑橋)遺跡では住居跡が175軒以上見つかった。この台地への住居跡の集中が際立っている。

遺跡のある台地から見て北側に当たる、神崎川を隔てた印西市の台地上には、北の台・向新田・船尾町田・向ノ地・松崎Ⅰ・松崎Ⅱの6遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。このうち船尾町田遺跡では住居跡が20軒見つかった。

遺跡のある台地から見て東側に当たる、新川を隔てた台地上の神野、保品には、境堀・おおびた・南谷の3遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。その南側の村上には西山遺跡があり、集落跡が見つかった。

遺跡のある台地から見て南側に当たる、大きな谷津を隔てた台地上の萱田には、菅地ノ台・権現後・ヲサル山・井戸向・川崎山の5遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。このうち権現後遺跡では住居跡が32軒見つかり、ヲサル山では住居跡が22軒と方形周溝墓が3基見つかり、井戸向遺跡では住居跡が32軒と方形周溝墓が3基見つかり、川崎山遺跡では住居跡が23軒見つかった。

奈良・平安時代の遺跡は、まず遺跡と同じ台地上には、島田・間見穴・子の神台(佐山寺の下)・真木野向山・東山久保・松原・真木野・桑納前畑・桑納・桑橋新田(桑橋)の10遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。

遺跡のある台地から見て北側に当たる、神崎川を隔てた印西市の台地上には、北の台・向ノ地・船尾城・松崎Ⅵの4遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。

遺跡のある台地から見て東側に当たる、新川を隔てた台地上の神野、保品、米本には、境堀・向境・栗谷・役山東・上谷・雷・郷(台畑)・おおびたの8遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。このうち栗谷遺跡では住居跡と掘立柱建物跡が多数見つかり、上谷遺跡では住居跡が190軒以上と掘立柱建物跡が25棟以上見つかった。その南側の米本には平沢遺跡、下高野には作畑遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。さらにその南側の村上には、西山・境作・殿内・名主山・浅間内・村上込の内の6遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。このうち村上込の内遺跡では住居跡が155軒と掘立柱建物跡が24棟見つかった。

遺跡のある台地から見て南側に当たる、大きな谷津を隔てた台地上の萱田には、菅地ノ台・権現後・ヲサル山・ヲサル山南・北海道・井戸向・白幡前(上の台)・池ノ台・川崎山の9遺跡があり、それぞれ集落跡が見つかった。このうち菅地ノ台遺跡では住居跡が80軒と掘立柱建物跡11棟が見つかり、権現後遺跡では住居跡が70軒と掘立柱建物跡が18棟見つかり、北海道遺跡では住居跡が116軒と掘立柱建物跡が10棟見つかり、井戸向遺跡では住居跡が103軒と掘立柱建物跡が44棟見つかり、白幡前(上の台)遺跡では住居跡が294軒と掘立柱建物跡が151棟見つかった。

大規模な集落跡が、保品・村上・萱田の3つの地区で見つかったことは注目される。

なお、以上の奈良・平安時代の遺跡のうちで墨書土器が出土する遺跡を数えると、島田込内遺跡を始め、八千代市では間見穴・境堀・向境・栗谷・上谷・殿内・郷(台畑)・名主山・村上込の内・桑納・菅地ノ台・権現後・北海道・井戸向・白幡前(上の台)・池ノ台・川崎山、印西市では北の台・船尾城の合計20遺跡にのぼる。

遺跡一覧

1 島田込ノ内遺跡	文献33	31 役山東遺跡	文献17・18
2 間見穴遺跡	文献12・22・23・33	32 栗谷遺跡	文献17・18
3 道地遺跡	文献23・25・39	33 上谷遺跡	文献6・17
4 子の神台(佐山寺の下)遺跡	文献7・33	34 雷遺跡	文献17
5 田原窪遺跡	文献9・17・18	35 郷(台畑)遺跡	文献9
6 佐山台遺跡	文献3	36 おおびた遺跡	文献2・19・30
7 真木野向山遺跡	文献17	37 南谷遺跡	文献18
8 瓜ヶ作遺跡	文献3・17	38 作畑遺跡	文献3・8
9 東山久保遺跡	文献3・17	39 下高野新山遺跡	文献3・10・11・18
10 松原遺跡	文献3・17	40 阿蘇中学校東側遺跡	文献3・34・37
11 真木野遺跡	文献17	41 平沢遺跡	文献5・18
12 島田遺跡	文献33	42 殿台遺跡	文献18
13 桑納前畑遺跡	文献31・36	43 西山遺跡	文献4・11
14 桑納遺跡	文献3	44 境作遺跡	文献3
15 桑橋新田(桑橋)遺跡	文献2・3・14・15・17・18	45 殿内遺跡	文献3
16 北の台遺跡	文献49	46 浅間内遺跡	文献18
17 向新田遺跡	文献21・22	47 名主山遺跡	文献3・28
18 船尾町田遺跡	文献50	48 村上込の内遺跡	文献2・3・29
19 向ノ地遺跡	文献26・27	49 二重堀遺跡	文献16・17・18・20
20 船尾城遺跡	文献48	50 菅地ノ台遺跡	文献3・10・11・14・18
21 船尾貝塚	文献1	51 権現後遺跡	文献18・40・46
22 松崎I遺跡	文献22・23	52 フサル山遺跡	文献42
23 松崎II遺跡	文献22・23・24	53 フサル山南遺跡	文献3
24 松崎III遺跡	文献24	54 北海道遺跡	文献41・46
25 松崎VI遺跡	文献22・23	55 坊山遺跡	文献45
26 逆水遺跡	文献20	56 向山遺跡	文献47
27 逆水西遺跡	文献19・20	57 井戸向遺跡	文献43・46
28 大山遺跡	文献8	58 白幡前(上の台)遺跡	文献44・47
29 境堀遺跡	文献17・18	59 池の台遺跡	文献35・38
30 向境遺跡	文献17・18	60 川崎山遺跡	文献3・13・15・18・32

文献(発行所は、著者と同じ場合、省略する。)

- 1 県内埋蔵文化財基礎資料調査(千葉県埋蔵文化財分布地図-改訂版-)委員会 1997 『千葉県埋蔵文化財分布地図(1) 一東葛飾・印旛地区(改訂版)-』 財団法人千葉県文化財センター
- 2 八千代市史編さん委員会 1978 『八千代市の歴史』 八千代市
- 3 八千代市史編さん委員会 1991 『八千代市の歴史 資料編 原始・古代・中世』 八千代市

- 4 千葉県教育庁生涯学習部文化課 1991 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 -平成元年度-』
- 5 千葉県教育庁生涯学習部文化課 1996 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 -平成6年度-』
- 6 千葉県教育庁生涯学習部文化課 1997 『千葉県埋蔵文化財発掘調査抄報 -平成7年度-』
- 7 八千代市教育委員会 1983 『千葉県八千代市北部遺跡群緊急発掘調査報告 -昭和57年度調査の概要-』
- 8 八千代市教育委員会 1987 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告集』
- 9 八千代市教育委員会 1988 『千葉県八千代市埋蔵文化財発掘調査報告 昭和62年度』
- 10 八千代市教育委員会 1989 『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告 昭和63年度』
- 11 八千代市教育委員会 1990 『千葉県八千代市市内遺跡群発掘調査報告 平成元年度』
- 12 八千代市教育委員会 1991 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成2年度』
- 13 八千代市教育委員会 1992 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成3年度』
- 14 八千代市教育委員会 1993 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成4年度』
- 15 八千代市教育委員会 1994 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成5年度』
- 16 八千代市教育委員会 1995 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成6年度』
- 17 八千代市教育委員会 1995 『平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』
- 18 八千代市教育委員会 1996 『八千代市埋蔵文化財調査年報 -平成6年度版-』
- 19 八千代市教育委員会 1996 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成7年度』
- 20 八千代市教育委員会 1997 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告 平成8年度』
- 21 財団法人千葉県文化財センター 1983 『千葉県文化財センター年報No.9』
- 22 財団法人千葉県文化財センター 1994 『千葉県文化財センター年報No.19 -平成5年度-』
- 23 財団法人千葉県文化財センター 1995 『千葉県文化財センター年報No.20 -平成6年度-』
- 24 財団法人千葉県文化財センター 1996 『千葉県文化財センター年報No.21 -平成7年度-』
- 25 財団法人千葉県文化財センター 1998 『千葉県文化財センター年報No.22 -平成8年度-』
- 26 財団法人印旛郡市文化財センター 1993 『財団法人印旛郡市文化財センター年報9 -平成4年度-』
- 27 財団法人印旛郡市文化財センター 1994 『財団法人印旛郡市文化財センター年報10 -平成5年度-』
- 28 平野元三郎 1972 『名主山遺跡 村上団地第1期工事区域内調査 昭和46年7月~8月』 八千代市教育委員会
- 29 財団法人千葉県都市公社 1974 『八千代市村上遺跡群』 日本住宅公団東京支所、財団法人千葉県都市公社
- 30 おおびた遺跡調査団 1975 『おおびた遺跡 -八千代市少年自然の家建設地内遺跡-』 八千代市教育委員会
- 31 睦小学校北方遺跡調査会 1978 『千葉県八千代市桑納前畑遺跡』
- 32 八千代市遺跡調査会 1979 『壹田町川崎山遺跡』
- 33 渋谷貢 1980 『東京電力送電鉄塔建設事業に伴う発掘調査報告書』 八千代市遺跡調査会、船橋市遺跡調査会

- 34 佐藤克己ほか 1980 『阿蘇中学校東側遺跡』 八千代市遺跡調査会
- 35 八千代市遺跡調査会 1980 『池の台遺跡』
- 36 村田一男ほか 1981 『千葉県八千代市睦小学校遺跡』 八千代市遺跡調査会
- 37 八千代市教育委員会 1984 『阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』 八千代市遺跡調査会
なお、『阿蘇中学校東側遺跡Ⅱ』は未刊である。
- 38 八千代市教育委員会 1986 『千葉県八千代市池の台遺跡 一都市計画道路3・3・7号線造成工事に先行する緊急調査一』
- 39 林勝則 1986 『千葉県八千代市平戸道地遺跡 一農業道路敷設に伴う埋蔵文化財調査報告書一』 八千代市教育委員会
- 40 財団法人千葉県文化財センター 1984 『八千代市権現後遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅰ一』
- 41 財団法人千葉県文化財センター 1985 『八千代市北海道遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅱ一』
- 42 財団法人千葉県文化財センター 1986 『八千代市ヲサル山遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅲ一』
- 43 財団法人千葉県文化財センター 1987 『八千代市井戸向遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅳ一』
- 44 財団法人千葉県文化財センター 1991 『八千代市白幡前遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ一』
- 45 財団法人千葉県文化財センター 1993 『八千代市坊山遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅵ一』
- 46 財団法人千葉県文化財センター 1993 『八千代市権現後遺跡・北海道遺跡・井戸向遺跡 一萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅶ一』
- 47 財団法人千葉県文化財センター 1994 『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡他 一東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書一』
- 48 佐藤克己 1978 『船尾城遺跡』 千葉県印旛郡印西町教育委員会
- 49 財団法人千葉県都市公社 1975 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』
- 50 財団法人千葉県文化財センター 1984 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅵ』

注1 上記の各遺跡についての文献及び下記の文献に拠る。

財団法人千葉県史料財団 1996 『出土文字資料集成』（『千葉県の歴史 資料編 古代』別冊）千葉県

八千代市歴史民俗資料館 1997 『村神郷の文化人たち～墨書土器は語る～』（平成9年度第1回企画展解説書）八千代市歴史民俗資料館

第2章 旧石器時代・縄文時代

第1節 旧石器時代

石器集中、炉跡、土坑などの遺構はない。石器が、1点だけ単独で出土する。

遺跡の東側部分になる台地の平坦部の縁に近いF 2-72グリッドのIII層ソフトローム中から、剥片が1点出土した(第4図、図版2・17)。

剥片は、材質は黒曜石で、ほぼ黒色であるが無色のところもあり、白色をした不純物の粒が混ざる。平面は杏仁形で、表面は上下左右から粗く剥離した痕が残り、裏面は1回で剥離している。縁には、使用痕、刃つぶし痕はない。長さ3.1cm、幅2.4cm、厚さ1.1cm、重さ5.1gである。

第2節 縄文時代

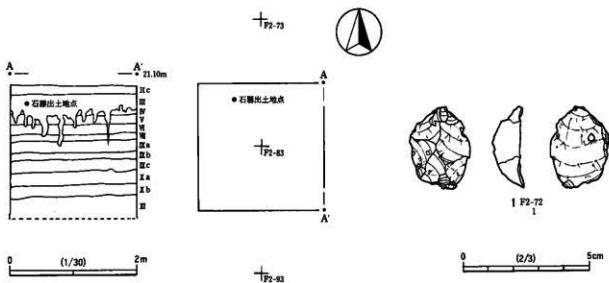
住居跡、炉穴、陥し穴などの遺構はない。早期から晩期の各時期の土器片と、石鏃・石斧・敲石・石皿といった石器類と石核が出土した。焼けた礫も出土した。

1 土器(第6・7図、図版18・19)

土器片は、早期から後期までのものが出土した。その中で数が多いのは、早期後半の条痕文系と前期前半の織維土器である。古い時期のものから順に示す。

まず、早期のものから示す。1・2は、燃糸文系と思われるものである。ともに施文は縄文である。ともに胴部の下の方の破片と思われる。堅く焼き上がるが、厚みが一定ではない。1は、内面をヘラでなでる。2は、外面にススが付着する。

3~16は、同じく早期の条痕文系土器である。3~8が、口縁部の破片である。3は、低い三角形の高まりを連続してつくる波状口縁の破片で、外面、内面とも丁寧にヘラでナデるが、外面には、ハイガイや



第5図 旧石器時代石器出土状況・石器

サルボウなどのフネガイ科の貝の殻の腹縁を押しつけたと思われる痕がいくつかある。子母口式であろうか。4は、口縁を指でつまんで人字形の高まりをつくる。内面には条痕文はない。胎土に繊維が混じる。5は、外面は、口縁に沿って断面方形の突起状の高まりが、割れているところをはきんで2つある。また、縦に半載した竹管を縦横にひいてつけた沈線文がある。口縁の上面と内面に条痕文がある。内面の口縁に近い部分は、ナデで条痕文を消す。6は、口縁に半載竹管による沈線文があり、胎土に繊維が混じる。7は、外面は、斜方向と横方向に粘土紐を貼り付けたところへ、斜方向の粘土紐に沿って半載竹管で沈線をひき、その両側に竹管を押しつけて円い刺突文を並べる。胎土に繊維が混じる。8は、外面は、口縁に点状のくぼみを並べ、その下側に沈線で三角形や菱形の区画をつくり、その沈線の交点に竹管で円い刺突文をつけ、区画内に細かい方形の刺突文をみだす。内面は、口縁から条痕文がつく。胎土に繊維が混じる。鶺鴒島台式である。9・10は、胴部の中ほどで傾きが変わる屈曲部の破片である。9は、外面は条痕文がある。屈曲する部分より上側では、部分的にヘラでナデで条痕文を消す。内面は、ナデで条痕文はない。胎土に繊維が混じる。10は、外面は、屈曲するところより上側は、条痕文の部分と、沈線文で区画して刺突文をみだす部分があり、下側は条痕文である。内面は条痕文である。胎土に繊維が混じる。鶺鴒島台式と思われる。11~16は、胴部の破片である。11は、外面は、横方向に幅の広い粘土紐を貼りつけた隆帯があり、その表面に細かい縄文に似た条痕文がつく。また、隆帯の上側には、半載竹管による沈線文がある。内面は、条痕文をつけた後で部分的にナデる。胎土に繊維が混じる。12は、外面、内面ともに条痕文である。胎土に繊維が混じる。13は、外面は条痕文で、内面はヘラで丁寧なナデる。胎土に繊維が混じる。14は、外面は、竹管の外面を押しつけて縦横にひいたと思われる、断面が半円の沈線文がある。この沈線文は、中央の太い線の両側に細い線が並行して走るようであり、条痕文かとも思われる。内面は条痕文をナデているようであるが、磨耗しているので、断定できない。胎土に繊維が混じる。15は、外面は、ナデている。内面は、条痕文である。胎土に繊維が混じる。16は、外面は条痕文で、内面はナデである。胎土に繊維が混じる。

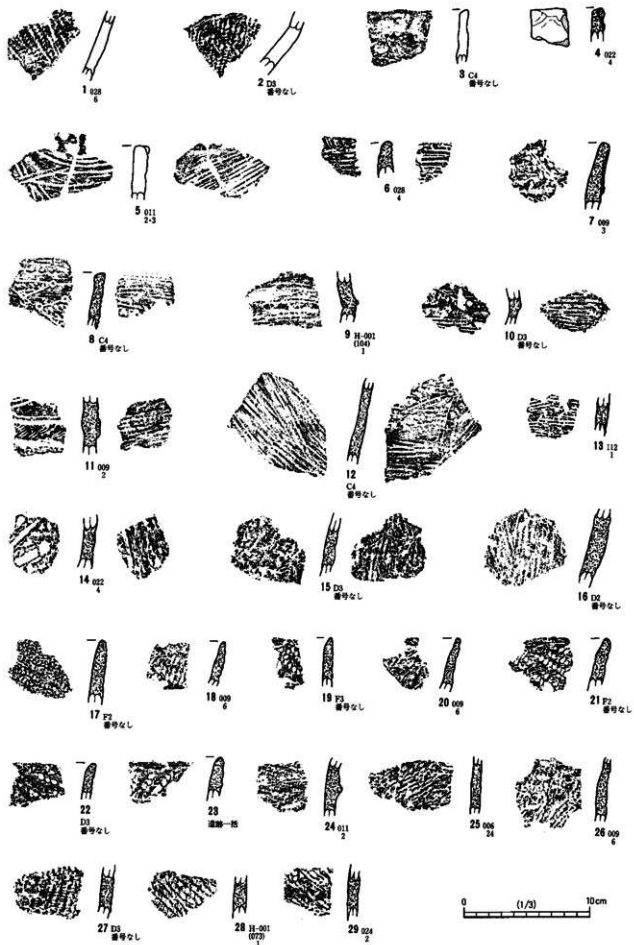
17~41は、前期前半の繊維土器の類である。17~23は、口縁部の破片である。外面は、17・19・21・22が単節の縄文、18・20が無節の縄文である。23はヘラによるナデと思われる。いずれも内面は、ヘラで丁寧にナデる。24~40は、胴部の破片である。24は、貼り付けの隆帯がある。隆帯の稜をはきんで、上側は単節の縄文、下側は複節の縄文である。25は、単節の縄文である。26は、無節の縄文であろう。27は、単節の縄文である。軟らかい焼き上がりで、磨耗が目立つ。28・29・31は、無節の縄文である。30・32~37は、捻糸文である。38・39は、沈線文である。半載竹管を使う。38は、早期の条痕文系かもしれない。40は、文様とは言えないが、幅がせまいヘラのような工具で全面をナデている。41は、平底の底部の縁の破片である。単節の縄文であろう。

42~44は、前期後半の貝殻文の土器である。42は、フネガイ科の貝殻の腹縁を押しつけた波状貝殻文である。43は、ハマグリのような、腹縁が波打たない類の貝の腹縁を押しつけた波状貝殻文と思われる。44は、フネガイ科の貝殻の腹縁を横に少しずつ動かしては続けて押しつけている貝殻文である。

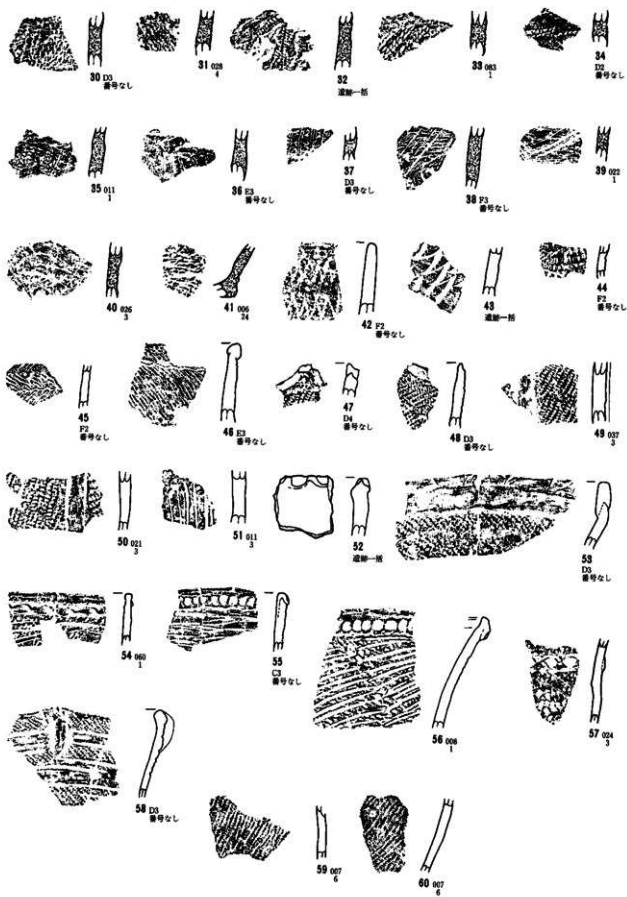
45は、前期末~中期初頭の土器と思われる。結節縄文である。

46は、中期初頭の五領ヶ台式と思われる。口縁が内外とも厚くなっている。単節の縄文で、外面の口縁のふくらみの下にジグザグの細い沈線文がつく。胎土に雲母の混入が目立つ。

47~51は、中期後半の加曾利E式である。47・48が口縁部の破片である。ともに波状口縁である。47は、



第6図 縄文土器 (1)



第7図 縄文土器(2)

口縁が高まっている波頂部である。口縁は外面側から指でナデて尖らせる。波の頂部は、指で押して窪ませる。単節の縄文である。48は、波頂部の下側に当たる。口縁は47と同じように尖らせる。単節の縄文である。49～51は、胴部の破片である。49は、単節の縄文と縦に走る隆帯の組合わせである。50は、単節の縄文と縦に走る沈線で区画した無文帯の組合わせである。51は、半載竹管による縦の沈線文である。

52は、中期の阿玉台式に近い時期の土器と思われる。胎土に雲母が目立たない。口縁には指で押してつくる凹みを連ねる。53は、中期の加曾利E式と思われる土器である。浅鉢形であろう。口縁部が、内外とも厚くなっている。つくりは、あまり丁寧ではなく、外面の口縁部のふくらみと胴部の境は、粘土紐の継ぎ目を隠していない。内面は、丁寧にナデられていない。

54～57は、後期中葉の加曾利B式の土器である。いずれもいわゆる粗製土器である。54は、縄文の上に、口縁の直下には粘土紐を貼りつけて指先を押しつけてつくる凹みを連続させる紐線文があり、その下は、半載竹管で太い沈線を走らせる。55・56は口縁部の破片で、ともに口縁に紐線文をつけ、その下には、細いヘラで縦横に沈線を走らせる。57は、胴部のくびれるところの破片で、くびれのやや上に紐線文をつけ、その上下に縄文をつけ、下側はさらに半載竹管による沈線がある。下側の縄文は単節である。

58は、後期後葉の安行I式の精製土器である。単節の縄文帯と無文帯が沈線で区画されて上下に並ぶ。口縁の直下の外面には突起がつく。

59・60は、時期不明の、おそらく同一個体の破片である。単節の縄文である。胎土中に白色の長石と思われる鉱物の粒が目立つ。

2 石器 (第8・9図、図版17)

礫を除いた石器類について示す。

1は石鏃である。材質は灰色のチャートで、黒色の部分が所々ある。基部にえぐりが入る類で、長さ2.5cm、幅1.6cm、厚さ0.4cm、重さ1.3gである。

2は先端部が欠けた石鏃である。材質は青色がかかった灰色のチャートで、濃い灰色の部分が斑状にある。基部と左右の縁にえぐりが入る類で、残存する部分で長さ2.9cm、幅2.5cm、厚さ1.8cm、重さ5.1gである。

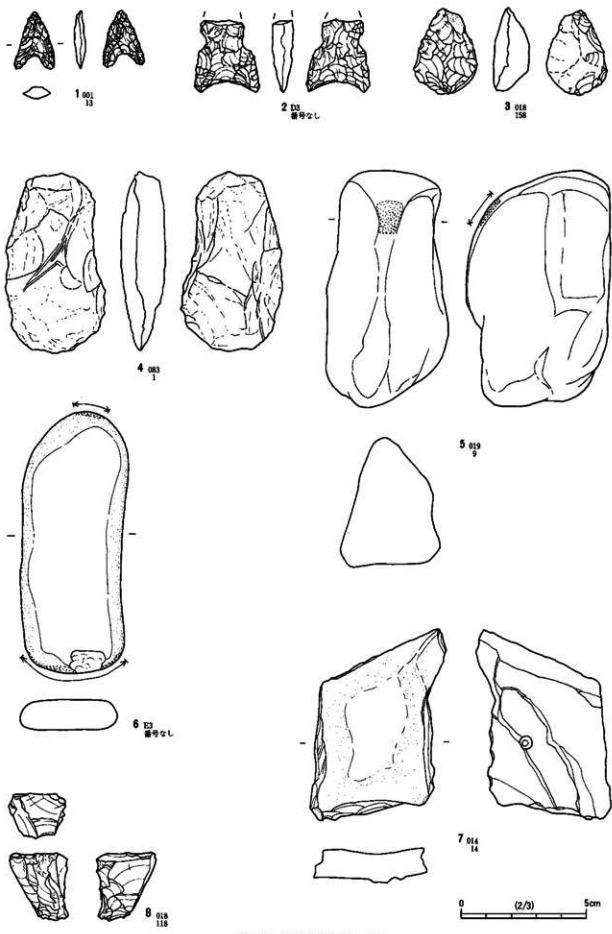
3は石鏃未成品である。材質は灰色のチャートで、一部に、剝離されていない自然の礫面が残る。基部が突き出る類で、厚みもある。長さ3.4cm、幅2.4cm、厚さ1.3cm、重さ10.8gである。

4は打製石斧である。材質は淡黄色の変成岩(ホルンフェルス)である。長さ7.1cm、幅4.0cm、厚さ1.7cm、重さ56.9gである。

5は敲石である。材質は緑色がかかった灰色の凝灰岩で、手のひらに納まる大きさの、角が丸い三角柱形の自然の礫を使い、角に当たる図示した部分で敲く。ほかの部分は、なめらかで、やや光沢がある。長さ9.4cm、幅4.8cm、重さ339.4gである。

6も敲石である。材質は黄灰色の砂岩で、手でつかむのに丁度良い大きさの縦長で薄い自然の礫を使い、その短い2つの辺のふくらんだ部分で敲く。敲打痕は図の上部の方にくらべて下部の方が顕著である。図の下部にある剝離は、使用時にできたものと思われる。長さ10.2cm、幅4.1cm、厚さ1.2cm、重さ103.9gである。

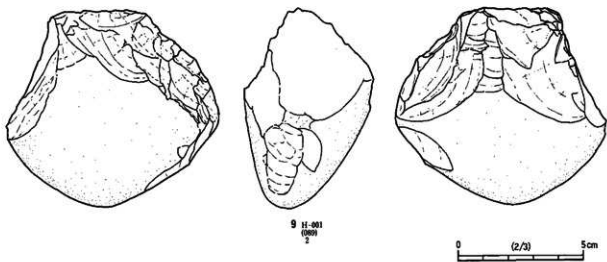
7は石皿の破片と思われる。材質は灰色がかかった緑泥片岩で、使用面は窪んでいて、磨耗してなめらかに変わり、裏面は凹凸があり、孔が1つあけられている。孔の深さは2mmほどである。平面が平行四辺形に近いことから、破片ではなく、この形が本来のものであるかもしれない。



第8図 縄文時代石器(1)

8は石核である。材質は縞の入る黒褐色の頁岩で、一定ではなく上下左右多方向から剥離がなされている。長さ2.6cm、幅2.4cm、高さ2.4cm、重さ10.0gである。

9も石核である。材質は濃い青灰色の凝灰岩で、大形の礫の一方の面を上や斜上から打ち欠いて、剥片を取っている。礫石器のような形をなす。本来の剥離面に重なって、後からと思われる何回かの剥離の痕がある。後からの剥離の面は、色が、古い本来のものよりも青く鮮やかである。本来の剥離面は、表面が風化している。新しい剥離は、後世のものであろうか。長さ7.8cm、幅8.4cm、厚さ5.3cm、重さ384.4gである。



第9図 縄文時代石器(2)

第3章 古墳時代

古墳時代は、住居跡12軒、土坑1基の遺構が発見された。いずれも前期に比定される。住居跡は、おおむね3世紀後半～4世紀のものと思われる。中には、5号住居跡のように弥生時代末に属するかと思われるものもある。ちなみに、5号住居跡を除いた11軒の住居跡は、出入口と炉を結んだ主軸の方向が、互いに直角である北東—南西または北西—南東のどちらかの方向になっている。

第1節 住居跡

1号住居跡 (旧003 第10・11図、図版3・20)

位置・形状

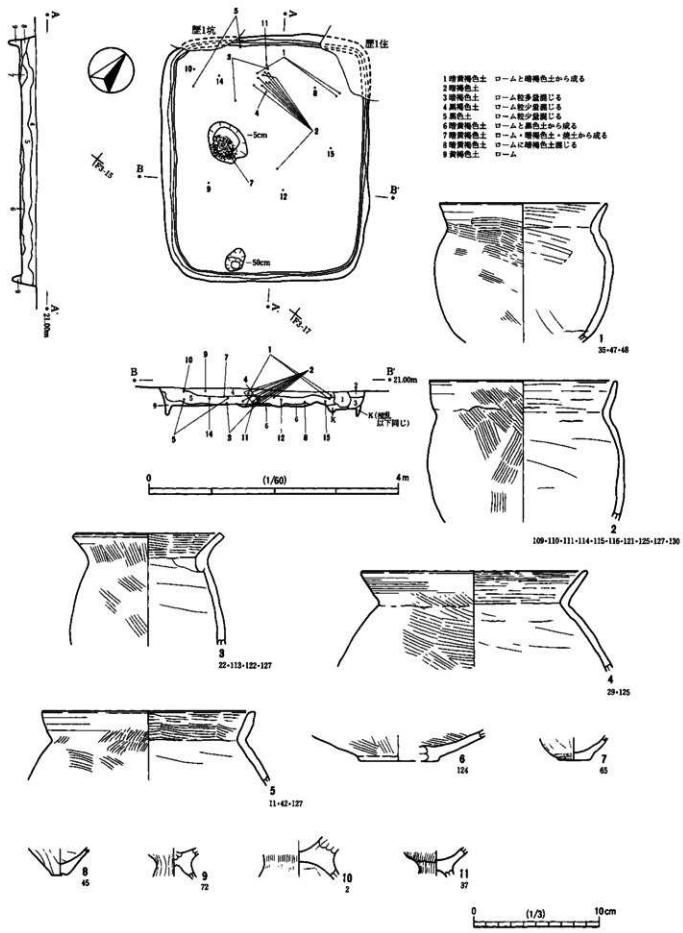
F2グリッドとF3グリッドにまたがる。調査範囲の東端、台地の縁に近い。北側の隅を歴史時代の1号住居跡に壊され、北西側の壁を歴史時代1号土坑に壊されている。

平面は隅丸の方形で、長軸3.9m、短軸3.3m、深さ20cm～30cmである。壁に沿って溝がおそらく一周する。柱穴はない。炉は、中央からやや南西側に寄ったところにある。ほかに南東側の壁の中ほどからやや南西に寄ったところに小穴がある。

出土遺物

土師器の壺・高坏・鉢・埴、ミニチュア土器が出土した。

1～6は、壺である。1は小型で、口縁部から胴部にかけて1/3ほど復元できた。口径13.4cm、胴部最大径14.2cm、高さ推定25cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はハケ目の範囲が剝離がひどいため不明瞭で、内面はヘラナデする。底部付近に粘土紐の接合痕が残る。2も小型で、口縁部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。口径15.0cm、最大径15.7cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はハケ目の範囲が剝離がひどいため不明瞭で、内面はヘラナデする。頸部の上下の外面・内面に接合痕が残る。3も小型で、1・2にくらべて縦長である。口縁部から胴部にかけて1/3ほど復元できた。口径推定12.0cm、最大径推定12.3cmである。口縁部は、外面の上方をヨコナデする。胴部は、外面はハケ目であるが磨耗する。内面はヘラナデする。4は大型で、口縁部から頸部にかけて1/8ほど復元できた。口径推定18.2cmである。口縁部は、外面の上方をヨコナデする。胴部は、内面をヘラナデし、頸部に近いところに接合痕が残る。胎土には長石粒が目立つ。5も大型で、口縁部から胴部にかけて1/6が復元できた。口径推定17.0cmである。口縁部は、外面をヨコナデする。胴部は、内面をヘラナデする。6は、大型の底部である。底径推定6.4cmである。7は、ミニチュアの底部である。底径推定2.5cmである。あるいは壺かもしれない。胴部の外面・内面ともナデる。内面の方は丁寧である。外面の底近くには、ハケ目が残る。外底はハケ目で成形する。堅い焼き上がりである。8も、ミニチュアの底部である。底径1.2cmである。外面はナデに近いヘラケズリを、内面はヘラナデを丁寧にする。外底は、丁寧なヘラケズリで成形するようである。堅い焼き上がりである。9は、台付小型壺の台部の付け根と思われる。内底は、丁寧にナデる。台部は、外面は細いヘラで丁寧にナデて、内面はざっとナデる。10は、台付大型壺の台部の付け根である。壺の底部と台部との接合痕が見える。全体に磨耗する。内底はナデる。台部は、外



第10図 古墳時代1号住居跡遺構・遺物(1)

面はハケ目、内面はナデる。11は、ミニチュアの台付甕の台部の付け根と思われる。底部のふくらみ具合からすると、底部から口縁部まで高さ5cmほどと思われる。台部の付け根から下側は、台付甕の台部ならもっと広がってよいように思われる。内底はナデて、外底から台部の外面はハケ目、台部の内面はナデる。堅い焼き上がりである。

12~14は、高坏である。12は、坏部で、1/10ほど復元できた。口径推定25.6cmである。外面は、口縁はヨコナデし、それより下側は、ハケ目を残してナデる。内面は、細いヘラでミガキのように丁寧に、底の中心から放射状にナデる。13は、脚部である。孔は、3個の位置がわかり、4個あると思われる。坏部の内底は、細いヘラで丁寧にヘラナデすると思われる。脚部の外面は丁寧にヘラナデし、内面はナデる。14も脚部である。孔は3個ある。坏部の内底はナデと思われる。外面は細いヘラで丁寧にヘラケズリし、内面はヘラナデの痕を残してナデる。

15は、鉢である。口縁部から底部にかけて1/10ほどの破片である。口径推定11.2cm、底径推定2.5cmである。外面・内面とも丁寧にナデる。外面・内面とも黒色である。

16は、埴である。底径推定3.6cmである。外面・内面とも丁寧にナデる。堅い焼き上がりである。

2号住居跡 (旧004・064 第12図、図版3)

位置・形状

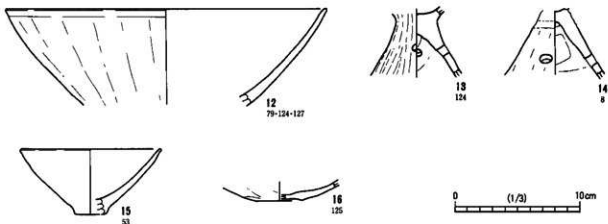
E 2グリッドの南東側、調査範囲の縁に近い。北西側の壁を歴史時代3号土坑に壊されている。

平面は隅丸の方形で、長軸4.7m、短軸3.8m、深さ15cmである。柱穴はない。炉は、長軸方向の住居跡中心線上に3基ある。3基のうち北東側の1基は床面より窪むが、残りの2基は、窪んでいない。床面の中央あたりは、硬くしまる。東側の隅には貯蔵穴と思われる施設がある。

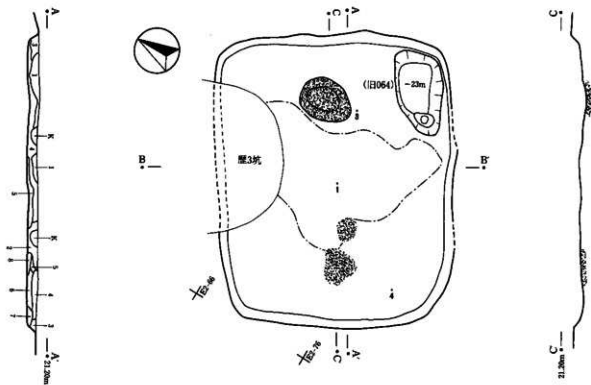
出土遺物

土師器の甕、弥生土器の甕・壺、軽石が出土した。

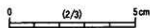
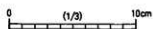
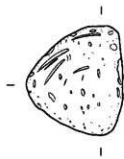
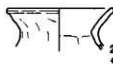
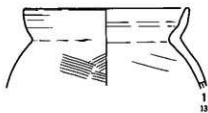
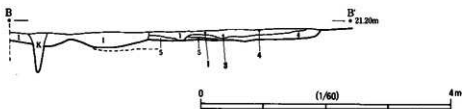
1は、土師器の小型甕である。口縁部から胴部にかけて1/6ほどの破片である。口径推定13.2cmである。外面・内面とも磨耗する。口縁部は外面・内面ともヨコナデする。内面の中ほどには指先を当てて作り出した段がある。胴部は外面はハケ目、内面はハケ目を残してナデる。頸部の外面に接合痕が残る。2も、土師器の小型甕である。口縁部から頸部にかけて1/3ほど復元できた。口径推定8.7cmである。口縁部は外



第11図 古墳時代1号住居跡遺物(2)



- 1 赤褐色土
- 2 暗褐色土 黒褐色土層、雑土散在する
- 3 赤色土
- 4 暗褐色土 ローム散在する
- 5 黒色土
- 6 暗褐色土 褐色土層に接する
- 7 暗褐色土 ロームに暗褐色土層に接する
- 8 赤褐色土 雑土に暗褐色土多量混入する



第12図 古墳時代2号住居跡遺構・遺物

面は丁寧にナデる。内面はヨコナデする。頸部から下側は、外面は丁寧にナデるが、内面はヘラナデする。

3は、弥生土器の小型甕である。底径推定8.6cmである。胴部は外面はヘラナデする。底部近くに燃糸文がある。内面はナデる。底部は外底は木葉痕がつく。内底はナデる。4は、弥生土器の壺である。口縁部の1/6ほどの破片である。口縁上から外面全体にかけては、結び目燃糸文が施される。内面は赤彩して細いヘラで丁寧にミガク。

5は、軽石である。縦4.3cm、横3.9cm、厚さ2.4cm、重さ7.0gである。砥石として使われたと思われる。平面図の横方向に擦痕があり、下面及び右側面が磨耗する。

3号住居跡 (旧010 第13図、図版4・20)

位置・形状

E3グリッドの北西側の隅に近い。南東側と西側の隅を溝に、北東側の隅を歴史時代6号土坑に壊されている。

平面はおそらく隅丸のほぼ正方形で、長軸3.8m、短軸3.4m、深さ15cmである。柱穴はない。炉は、中心から北東側に寄ったところに2基ある。そのうち北側の1基は、歴史時代6号土坑に壊されている。南東側の隅に貯蔵穴がある。このほか南西側の隅近くに穴がある。

出土遺物

土師器の甕・高坏が出土した。

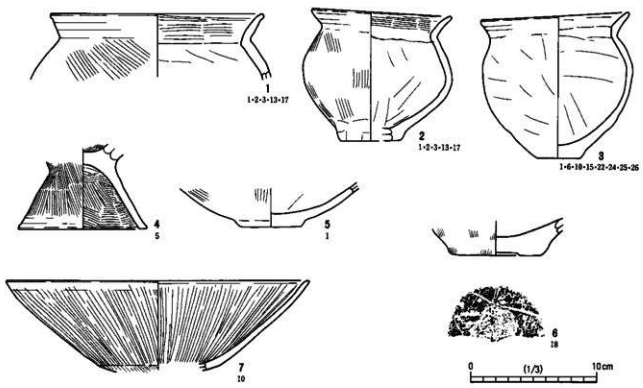
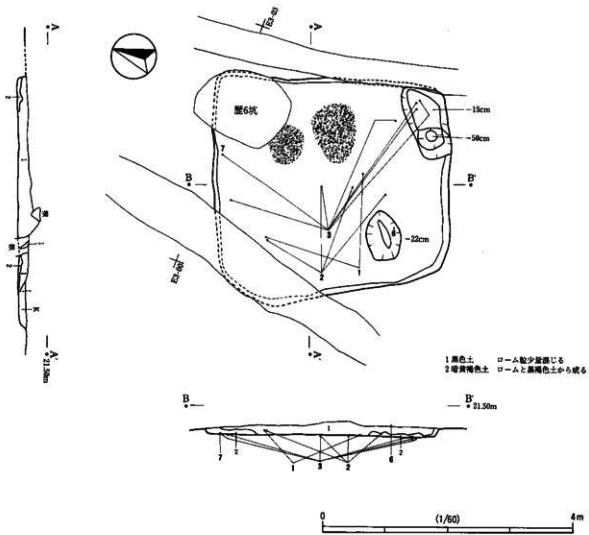
1～6は甕である。1は大型で、口縁部から胴部にかけて2/3ほど復元できた。口径推定17.0cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデするが、内面の方はハケ目が残る。胴部は、外面はハケ目を残してナデるように思われる。頸部の下側3cmまで口縁部と同じヨコナデをする。内面はヘラナデする。2は小型で、口縁部から底部まで4/5ほどが復元できた。口径11.3cm、最大径12.0cm、底径4.8cm、高さ10.4cmである。口縁部は外面・内面ともヨコナデで、内面はハケ目が残る。胴部は、外面はハケ目を残すナデで、内面はヘラナデする。底部の外面はナデて形をつくる。外底はヘラケズリし、内底はヘラナデする。頸部の内面に接合痕のふくらみが残る。3も小型で、口縁部から底部にかけて3/4ほどが復元できた。口径11.9cm、最大径12.1cm、底径3.4cm、高さ11.5cmである。口縁部は外面・内面ともヨコナデする。胴部から底部にかけては、外面はヘラケズリ後にナデる。内面はヘラナデする。頸部の外面に接合痕が残る。4は、台付大型甕の台である。底径10.2cm、高さ5.0cmである。甕の内底にはハケ目が残る。台の外面はハケ目で、裾はヨコナデする。内面はハケ目である。5は大型の底部の1/4ほどの破片である。底径推定4.9cmである。外面はハケ目を残すナデ、内面は丁寧にヘラナデする。外底には木葉痕かと思われるものがある。6も大型の底部で1/2ほどの破片である。底径7.3cmである。外面はハケ目である。内面は剥落がひどくてわからない。外底の縁辺部は幅が広く帯状に高まり、木葉痕がつく。

7は高坏の坏部の1/6ほどの破片である。口径推定24.2cmである。口縁部は、外面は縦方向の細いヘラによる丁寧にヘラナデの後で、横方向に細いヘラでヘラナデする。内面はヨコナデする。胴部は、外面・内面とも細いヘラで丁寧にヘラナデするが、外面には斜方向のヘラケズリがわずかに残る。

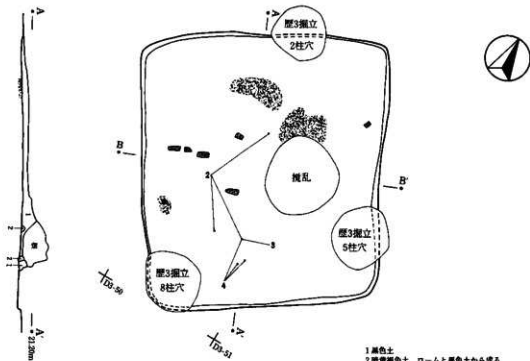
4号住居跡 (旧014 第14図、図版4・20)

位置・形状

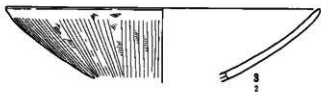
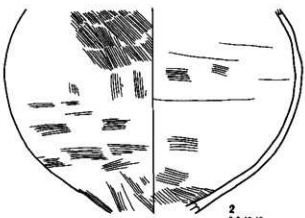
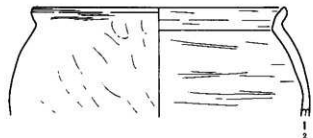
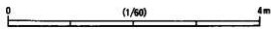
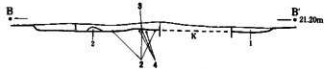
C3グリッドとD3グリッドにまたがる。調査範囲の縁に近い。歴史時代3号掘立柱建物跡が重複し、その柱穴に隅と壁が壊されている。また、中心よりやや東側の床面に攪乱が入り、炉が壊されている。



第13図 古墳時代3号住居跡遺構・遺物



1 黒色土
2 暗黄褐色土 ロームと黒色土から成る



2
3-9-10-12



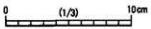
4
5-8-10



6
2



7
4



第14図 古墳時代4号住居跡遺構・遺物

平面はほぼ正方形で、長軸4.3m、短軸3.8m、深さ10cmである。柱穴はない。炉は、中央から北側に2基、南西側に1基ある。炭化材が所々出土した。

出土遺物

土師器の甕・高坏・壺、弥生土器の壺が出土した。

1は大型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/8ほどの破片である。口径推定20.3cm、最大径推定24.3cmである。口縁部は、外面はふくらみから上をヨコナデし、ふくらみから下はハケ目が残る。内面は細いヘラで横方向に丁寧にヘラナデする。胴部は、外面はナデに近いヘラナデをし、内面は口縁部より少し幅の広いヘラで丁寧にナデる。2も大型の甕で、胴部の1/4ほどが復元できた。最大径推定23.7cmである。外面は、最もふくらむ部分から上側はハケ目で、下側はハケ目の後にナデる。内面は、最もふくらむ部分とその上下で剥落がひどい。底部近くはハケ目で、それより上はハケ目の後にヘラナデし、最もふくらむ部分から上はヘラナデである。

3は高坏で、坏部の1/2ほどが復元できた。口径推定25.0cmである。口縁部は、外面はヨコナデし、内面は細いヘラで丁寧にナデる。胴部は、外面はハケ目を残して細いヘラで丁寧にヘラナデする。内面は、剥落がひどいが、口縁部の内面と同じように細いヘラで丁寧にナデると思われる。

4も高坏で、脚部の完存品である。底径12.9cm、高さ5.5cmである。孔は4個である。坏部の内底はナデる。脚部の外面は、付け根から孔の下側までは、ヘラケズリの後にヘラナデし、その下の裾の部分は、ナデる。内面は、付け根のあたりはヘラナデの後にナデて、その下側はナデて、裾の部分はヨコナデする。5も高坏で、脚部の付け根の破片である。坏部の内底は、剥落がひどいため調整方法は不明である。脚部は、外面は細いヘラで丁寧にミガク。内面はナデる。

6は、土師器の壺の頸部の1/3ほどの破片である。頸径推定8.2cmである。外面はハケ目を消すようにヘラナデする。頸部のくびれのすぐ上に隆帯をめぐらし、その上下に浅く細い沈線を引きつけて際立たせ、隆帯には、ハケ目をつけるヘラを押しつけて、縄目のようにみえる刻みをつける。7は、弥生土器の壺の口縁部の破片である。古墳時代2号住居跡の4の壺の破片と同じ個体のものと思われるが、互いに接合はしない。

5号住居跡 (旧018 第15・16図、図版4・20・21)

位置・形状

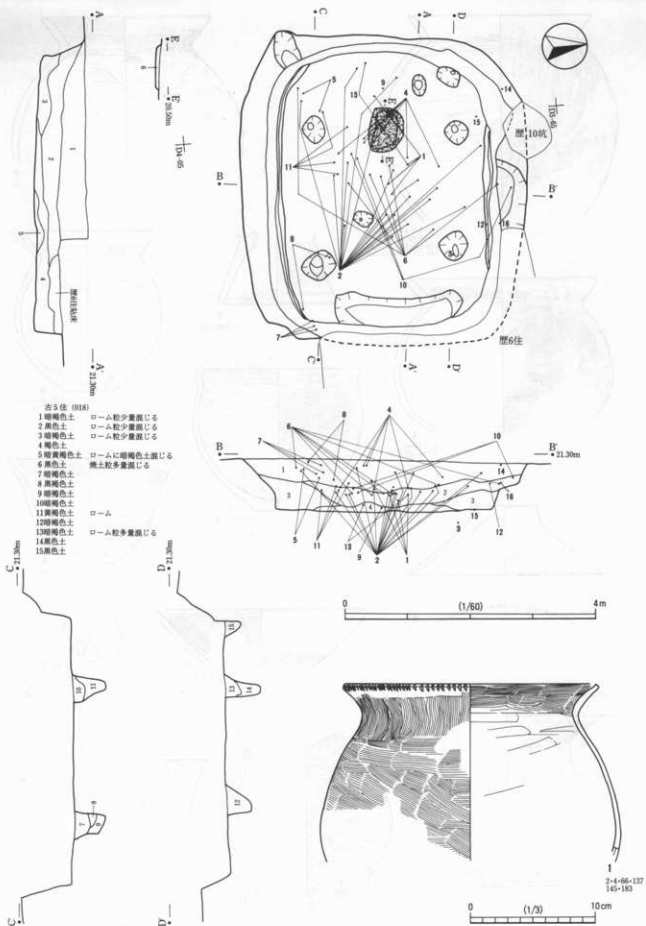
D3グリッドの南側にあり、北側の壁を歴史時代10号土坑に壊され、北東側の隅から東側の壁にかけて歴史時代6号住居跡に壊されている。

平面は隅丸のほぼ正方形で、長軸4.9m、短軸4.6m、深さ80cmである。壁は中段から上で一段と大きく広がる。覆土の土層断面の観察から、本来このようであったと思われる。同様の壁を持つ住居跡は、同じく船橋印西線建設に伴って発掘調査が進んでいる道地遺跡にもある。北側と南側の壁に沿って溝がある。柱穴は4基あるが、そのほかに大小4基の穴がある。炉は、中心からやや西側に寄った長軸方向の住居跡中心線上にあって窪む。このほか北側の壁の中央と南西側の隅の壁に窪みがある。

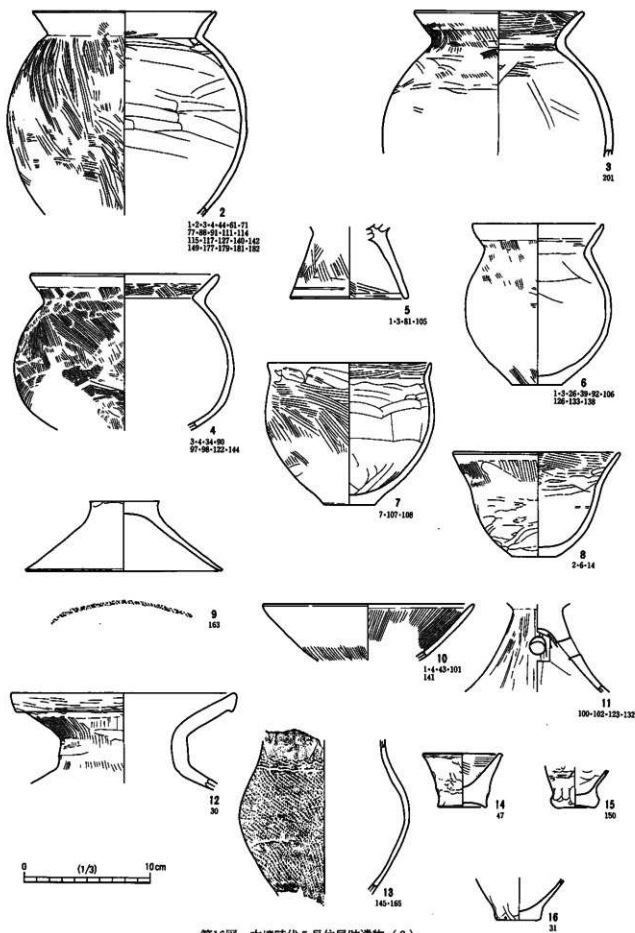
出土遺物

土師器の甕・蓋・高坏・壺・ミニチュア土器、弥生土器の甕が出土した。

1～8は甕である。1は大型で、口縁部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。口径推定20.0cm、最大径推定24.0cmである。口縁の外周には、ハケ目ヘラで刻みをつける。口縁部は、外面はヨコナデし、内面は



第15図 古墳時代5号住居跡遺構・遺物(1)



第16図 古墳時代5号住居跡遺物(2)

ハケ目である。胴部は、外面はハケ目で、内面はヘラケズリの痕を残すヘラナデである。2も大型で、口縁部から胴部にかけて2/3ほど復元できた。口径推定14.4cm、最大径推定19.0cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はハケ目、内面はヘラナデする。3も大型で、口縁部から胴部にかけて1/4ほどの破片である。口径推定13.2cm、最大径推定18.4cmである。口縁部は、外面は上半分はハケ目を残してヨコナデし、頸部側の下半分はハケ目を残し、内面はハケ目である。胴部は、外面・内面ともハケ目を残して細いヘラでミガキのようにヘラナデする。4は小型で、口縁部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。口径推定14.8cm、最大径推定17.5cmである。口縁部は外面・内面とも上半分はヨコナデし、下半分はハケ目である。胴部は、外面はハケ目で、内面はヘラケズリの後にナデる。5は台付大型甕の台部で、1/2ほど復元できた。底径推定9.5cmである。外面は、裾部をヘラでヨコナデした後、ハケ目をつけ、さらに裾から上側をナデる。内面は、ハケ目を残してヘラナデし、裾部はヨコナデする。6は小型で、口縁部から底部まで1/2ほどが復元できた。口径推定10.3cm、最大径推定11.6cm、底径4.0cm、高さ12.7cmである。口縁部は、外面は上部はヨコナデし、下部はハケ目で、内面はハケ目を残してヨコナデする。胴部は、外面はハケ目を消すようにヘラナデする。ハケ目に粗いものと細かいものが見られる。粗いものは、胴部の最もふくらんだ部分にだけ見え、そのほかの部分のものは細かい。細かいハケ目が粗いハケ目を切る。内面は、ヘラナデする。外底はヘラナデする。7は小型の広口のもので、口縁部から底部にかけて1/4ほどが復元できた。口径推定13.0cm、最大径推定13.6cm、底径4.0cm、高さ11.2cmである。口縁部は、外面はヨコナデして下側をさらにヘラケズリし、内面はハケ目である。胴部は、外面は上側2/3ほどはハケ目で、底部側1/3ほどはハケ目を残してヘラナデする。内面は上側2/3ほどはヘラナデし、底部側1/3ほどは、内底の中心から放射状にヘラケズリする。外底はヘラケズリする。8も小型の広口のもので、口縁部から底部にかけて3/5ほど復元できた。口径13.2cm、底径3.6cm、高さ8.3cmである。口縁部は、外面はハケ目を消してヨコナデする。内面はハケ目である。胴部は、外面は細いヘラでミガキのようにヘラナデし、内面はハケ目を消して細いヘラでミガキのようにヘラナデする。外底は、不明瞭であるが、細いヘラでヘラナデするように思われる。

9は大型の甕に使う蓋で、頭部から2/3ほどが遺存し、それより下側は1/4ほど残る破片である。頭径4.0cm、口径15.4cm、高さ5.5cmである。口縁には細かい縄文をつける。頭部外面はナデる。傘の部分の外面は、頭部に向かって口縁の側から溝状にヘラナデした後、ナデる。内面は丁寧なナデる。口縁に沿ってヨコナデするように思われる。普通の焼き上がりである。

10は高坏の坏部で、1/2ほど復元できた。口径推定16.8cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面は、全体に細いヘラでミガキのようにナデるが、上側はナデてミガキを消しているところがある。内面は細いヘラでミガキ。11は高坏の脚部の破片である。孔は3個である。坏部の内底は剝落がひどい。外面は、細いヘラでミガキのようにナデる。内面は、付け根から孔の下あたりまでヘラナデし、それより下側はヨコナデする。

12は甕で、口縁部から頸部にかけて、口縁のかんりの部分が磨耗するが、ほぼ完存する破片である。口径17.6cmと大型である。口縁部の上側は、外面はハケ目を残してヨコナデし、内面はヨコナデする。下側から頸部にかけては、外面は、口縁のふくらみの直下はヘラナデし、その下側はハケ目を残してヘラナデし、内面は丁寧にヘラナデする。やや軟らかい焼き上がりである。

13は北関東系の弥生土器の甕で、頸部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。最大径推定13.7cmである。

頸部から胴部へ変るところへ結節縄文をめぐらし、その下側の胴部には単節の縄文をつける。内面は丁寧にナデる。

14~16は、ミニチュア土器である。14は、台付甕の台かとも思われる。底部から1cmくらい上までが、それより上にくらべて一段つぼまる。しかし反面、その部分は、剝離した痕が不明瞭で、外底部の縁も丸く作ったように見える。古墳時代9号住居跡5の台付甕のような台の転用である可能性を考えた上で、ミニチュア土器としておく。ほぼ完存で、口縁が一部欠ける。口径6.3cm、底径3.8cm、高さ4.2cmである。外面はヘラナデしてナデる。内面はハケ目を残してナデる。外底はナデる。15は坏形で、口縁部は欠ける。底部は完存する。底径3.0cmである。底は厚く、胴部の壁はひどく薄い。胴部の外面は、上部はヘラナデし、底部近くは指先を押しつける。内面はヘラナデする。外底はヘラナデした後、外周をナデる。内底はナデる。堅い焼き上がりである。16は壺と思われる。底部が完存する破片である。底径3.4cmである。胴部は、外面は上側をヘラナデし、底近くをナデる。内面は内底までヘラナデする。外底はナデる。

6号住居跡 (旧019 第17図、図版5・21・27)

位置・形状

D4グリッドの北東隅にある。調査範囲の縁に近い。北側の隅を歴史時代7号住居跡に壊され、西側の隅を歴史時代25号土坑に壊されている。

平面は方形で、長軸5.1m、短軸4.1m、深さ20cmである。柱穴は南西側に2基ある。そのほかに中央と南東側の壁に大小3基の穴がある。炉は、中央と北東側に合せて3基ある。

出土遺物

土師器の壺・壺が出土した。ほかに歴史時代の土師器の墨書土器片も出土した。墨書土器片は、この住居跡を切る歴史時代7号住居跡のものと思われるが、3・4は、出土地点が7号住居跡から2mほど離れる上、墨書のある土器の器種と墨書の内容が7号住居跡のものとは異なるので、7号住居跡のものではない可能性もある。

1は大型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。口径推定13.6cm、最大径推定16.5cmである。口縁部は、外面のみ成形をかねてヨコナデし、あとの外面・内面はともにハケ目である。胴部は、外面はハケ目で、内面は上半分と下半分の下側1/2ほどはナデで、下半分の上側1/2ほどはハケ目を残してナデる。胴部径が最大となる付近の内面に接合痕が残る。

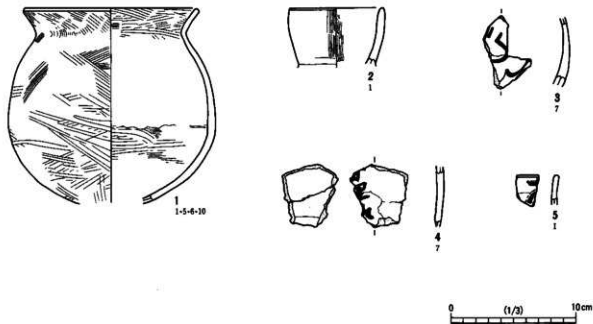
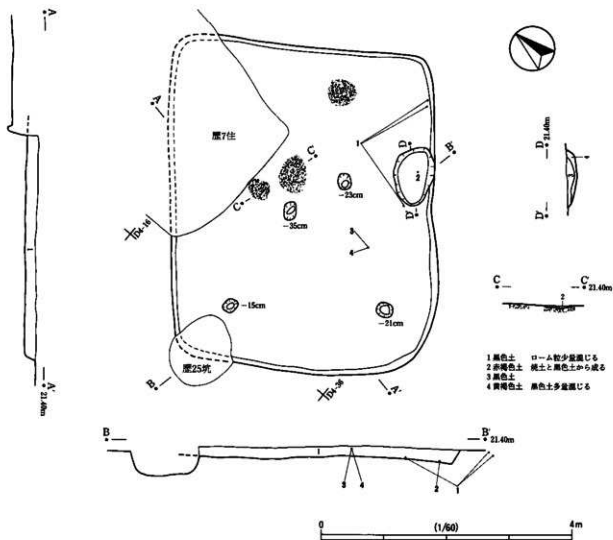
2は小型の壺で、口縁部から頸部にかけて3/4ほど復元できた。口径7.2cmである。外面は口縁をヨコナデし、その下側の頸部までは細いヘラでミガキのようにナデ、頸部のすぐ上を細いヘラで横にナデる。内面は細いヘラでミガキのようにナデる。

3~5は墨書土器片である。3は小型甕の胴部下半の破片と思われる。墨書は、記号が2個と思われるが、あるいは左上のものは人の鼻を描いているかもしれない。4は甕の底部の破片と思われる。内面の下の方に段があり、そこから下に向かって器壁がしだいに薄くなる。墨書は3字で、文章の一部と思われるが、字は、中央の字のつくりが「里」である以外、判読できない。5は坏の口縁部の破片である。墨書は「菌」の左上部分と思われる。筆の乱れも見える。

7号住居跡 (旧022 第18・19図、図版5・33)

位置・形状

D4グリッドの北西隅にある。C4、D3グリッドにもかかる。南東側の壁を歴史時代12号土坑に壊さ



第17図 古墳時代6号住居跡遺構・遺物

れるほか、土坑、溝により四方の壁を壊されている。

平面は隅丸のほぼ正方形で、長軸5.0m、短軸4.7m、深さ50cmである。壁に沿って溝が一周する。その溝から中央の方向に、2本の溝が伸びる。そのうちの1本は、柱穴まで達する。柱穴は4基ある。炉は、中央からやや東側に寄った長軸方向の住居跡中心線上にあり、窪む。焼土と炭化材がかなり出土した。

出土遺物

土師器の甕・器台・壺、歴史時代と思われる鉄器が出土した。

1は小型の甕で、口縁部から頸部にかけて1/3ほど復元できた。口径推定13.4cmである。口縁部は、外面はハケ目を消してヨコナデし、内面はハケ目である。胴部は、外面はハケ目で、内面はヘラナデする。

2は器台の脚部の1/2ほどの破片である。底径推定13.0cm、高さ8.5cmである。孔は3個である。台の内面はナデる。脚部の外面は細いヘラでミガキのようにナデる。内面はナデとハケ目であるが、裾に近いところはヨコナデする。

3は器種が良くわからない土師器の破片で、器台の類かと思われる。口縁とした縁は、ヘラで削って成形したままで、つぶれた形跡がない。側面に大小2個の孔が並ぶ。外面はヘラケズリし、内面はナデる。

4は大型の壺で、頸部から底部まで1/4ほどが復元できた。最大径推定20.4cm、底径推定6.0cmである。胴部は、外面はハケ目を消してヘラナデする。内面は剝落がひどいため不明瞭であるが、ヘラナデと思われる。底部は、外底はヘラナデと思われる。内底は剝落してわからない。胴部の最もふくらんだ付近の外面にススが帯状につく。その部分の破片の中には、割れ口に同じようにスガがつくものがある。5も大型の壺で、頸部から胴部にかけて1/4ほど復元できた。幅広の折返し口縁を持つ。頸部から上は、外面はナデ、内面は細いヘラでミガキ、下の胴部は外面は細いヘラでミガキ、内面は、剝落がひどいが、ヘラナデすると思われる。弥生土器かとも思われる。

6は薄い鉄片である。歴史時代のもと思われる。

8号住居跡（旧023 第20図、図版5）

位置・形状

C3グリッドとC4グリッドにまたがる。中央に攪乱が入る。

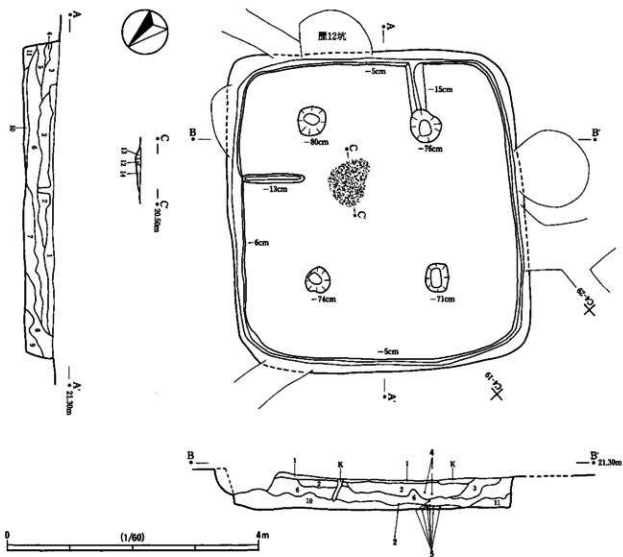
平面は隅丸のほぼ正方形で、長軸4.1m、短軸3.8m、深さ10cmである。柱穴はない。壁に沿って4基の小穴がある。炉は、中央から南西側に寄ったところにあるが、前述の攪乱に壊されている。焼土と炭化材が若干出土した。

出土遺物

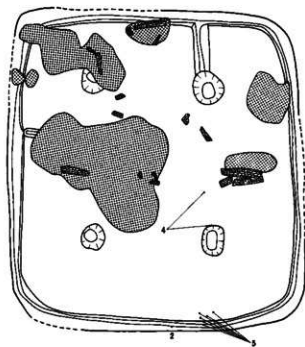
土師器の甕・ミニチュア土器が出土した。

1は大型甕で、口縁部から胴部にかけての1/4ほどの破片である。口径推定13.8cm、最大径推定20.0cmである。口縁部は、外面はハケ目を残してヨコナデし、内面はハケ目である。胴部は、外面はハケ目で、内面はナデる。胴部の内面に接合痕が残る。2は小型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/4ほど復元できた。口径推定10.8cm、最大径推定13.4cmである。口縁部は、外面はハケ目を残してヨコナデし、内面は口縁近くだけヨコナデして、それより下はハケ目である。胴部は、外面は、ミガキのようにヘラナデし、内面はナデる。

3はミニチュア土器で底部1/4ほどの破片である。底径推定3.0cmである。外面は手づくね、内面は細いヘラでナデる。堅い焼き上がりである。



- | | |
|----------|-----------------|
| 1 黒色土 | ローム散乱じる |
| 2 暗赤褐色土 | ローム散少量混じる |
| 3 暗褐色土 | ローム散混じる |
| 4 黒褐色土 | ローム散混じる |
| 5 暗褐色土 | ローム散混じる |
| 6 黒褐色土 | ローム散混じる |
| 7 暗褐色土 | ローム散混じる |
| 8 黒褐色土 | ローム散混じる |
| 9 暗褐色土 | ローム散混じる |
| 10 暗褐色土 | ローム散混じる。しまる。 |
| 11 暗赤褐色土 | 黄土・暗褐色土・黒色土から成る |
| 12 黒色土 | ローム散混じる |
| 13 暗赤褐色土 | 暗褐色土と黄土粒から成る |
| 14 黒褐色土 | ローム散混じる |



第18図 古墳時代7号住居跡遺構

位置・形状

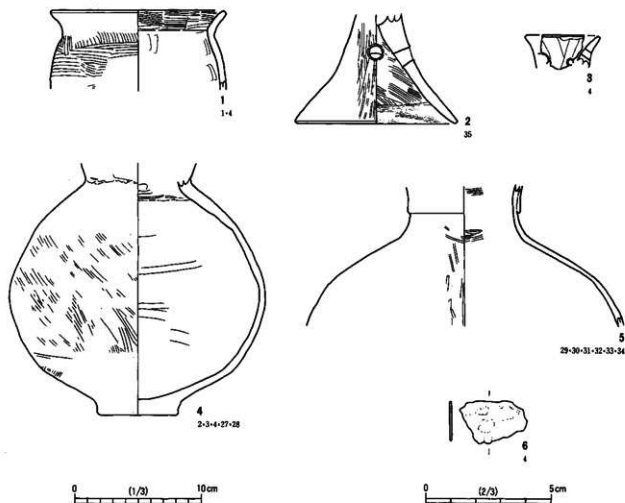
C4グリッドの東側にある。

平面は隅丸の方形で、長軸7.2m、短軸6.0m、深き50cmである。壁に沿って溝が一周する。柱穴は4基ある。南東側の壁に沿って貯蔵穴がある。そのほか中央より西側に小穴がある。炉は、大小合せて5基ある。そのうち中央からやや北東側に寄ったものが最も大きい。床面は、黒色土とロームで貼床される。全体に炭化材と焼土が出土した。

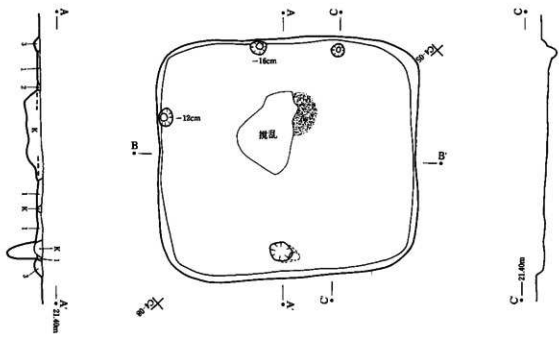
出土遺物

土師器の壺・高坏が出土した。

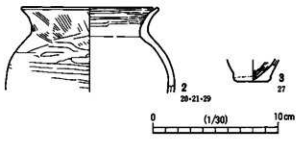
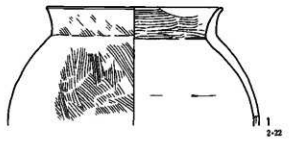
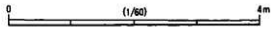
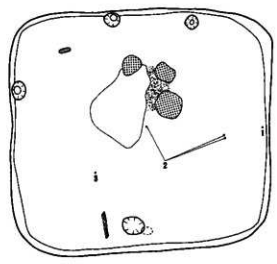
1～7は壺である。1は小型で、口縁部から胴部にかけて1/4ほど復元できた。口径推定11.8cm、最大径推定13.2cmである。口縁部は、外面は細いヘラでのヘラナデを消してヨコナデし、内面はハケ目を消してヨコナデする。胴部は、外面・内面ともヘラナデする。頸のすぐ上の内面とすぐ下の外面に接合痕がある。2も小型で、口縁部を1/6ほど復元できた。口径推定11.8cmである。口縁部は、口縁の外面は、ハケ目のヘラで細い沈線文をめぐらした後ヨコナデし、内面はヨコナデし、その下側は、外面・内面ともハケ目であ



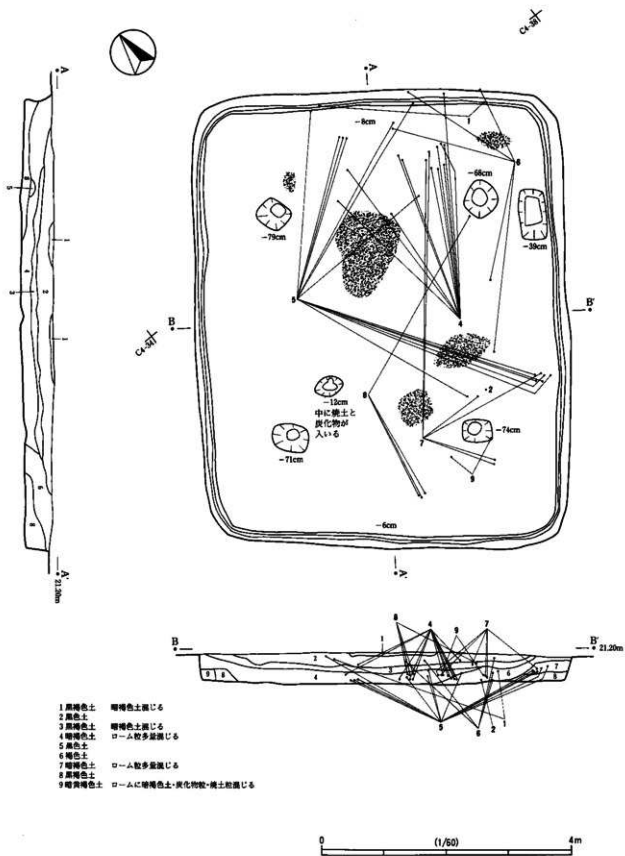
第19図 古墳時代7号住居跡遺物



- 1 暗褐色土
- 2 暗褐色土 粘土粒多量混じる
- 3 褐色土

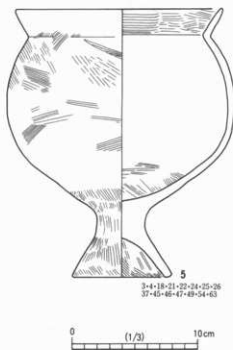
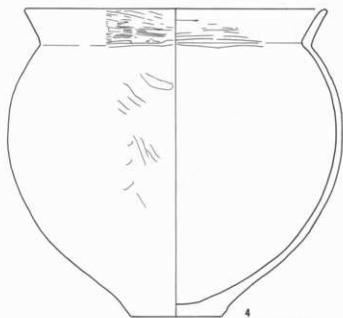
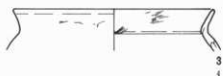
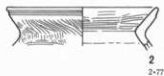
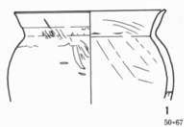
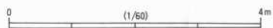
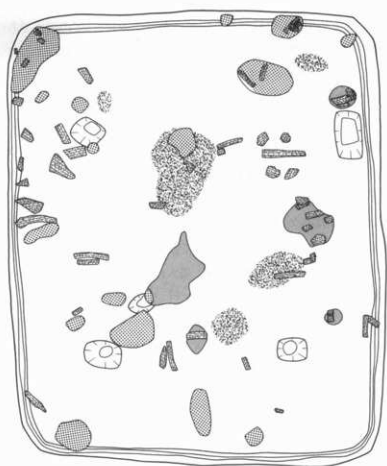


第20図 古墳時代8号住居跡遺構・遺物



- 1 原褐色土 暗褐色土面じる
- 2 黒色土
- 3 原褐色土 暗褐色土面じる
- 4 暗褐色土 ローム状多量混じる
- 5 黒色土
- 6 褐色土
- 7 暗褐色土 ローム状多量混じる
- 8 原褐色土
- 9 暗黄褐色土 ロームに暗褐色土・炭化物粒・焼土粒混じる

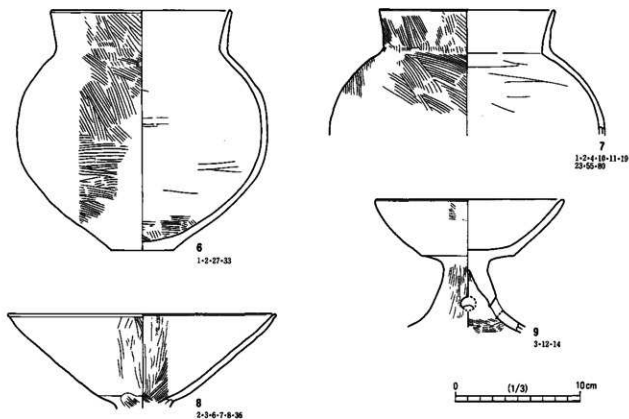
第21図 古墳時代9号住居跡遺構(1)



第22図 古墳時代9号住居跡遺構(2)・遺物(1)

る。胴部は、外面はハケ目で、内面はナデる。3も小型で、口縁部から胴部にかけての1/8ほどの破片である。口径推定15.8cmである。口縁部の粘土紐の下端を、胴部の上端にナデつけずに、そのままに残す。口縁部は、外面はヨコナデし、内面はヨコナデした後ヘラナデもする。胴部は、外面・内面ともヘラナデする。口縁部の外面に接合痕がある。4は大型で、口縁部から底部まで1/2ほど復元できた。口径推定23.8cm、最大径26.6cm、底径7.0cm、高さ24.4cmである。口縁部は、口縁は外面・内面ともヨコナデし、その下側は、外面はハケ目で、内面はヨコナデする。胴部から底部にかけては、外面・内面ともヘラナデする。5は台付の小型で、口縁部から台にかけて1/2ほどが復元できた。口径推定16.3cm、最大径推定18.2cm、台底径7.6cm、高さ21.2cmである。壺の高さは16cmほどと思われる。口縁部は、外面はヨコナデし、内面は口縁はヨコナデし、その下側はハケ目である。胴部は、外面はハケ目を残してナデて、内面はヘラナデし、内底はハケ目である。内底は剝離が目立つ。台部は、外面はハケ目を残してナデて、内面はハケ目である。6は小型で、口縁部から底部にかけて1/2ほどが復元できた。口径推定14.2cm、最大径推定20.0cm、底径5.0cm、高さ19.0cmである。口縁部は、外面は口縁がヨコナデで、それより下はハケ目で、内面はヨコナデする。胴部は、外面はハケ目で、内面はヘラナデし、底部は、外底は胴部の下側からつづいてヘラナデし、内底はハケ目である。7は大型で、口縁部から胴部にかけて1/2ほどが復元できた。口径推定13.8cm、最大径推定22.0cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデするが、外面はハケ目をよく残す。胴部は、外面はハケ目で、内面はヘラナデする。

8は高坏の坏部で、2/3ほど復元できた。口径21.2cm、高さ7.0cmである。口縁の外周は、細い粘土紐を



第23図 古墳時代9号住居跡遺物(2)

ナデつけて、厚くする。口縁は外面・内面ともヨコナデする。胴部は外面・内面とも細いヘラでミガキ、ミガキの間にハケ目が残る。底部は、外底はハケ目を残してヘラミガキし、内底は細いヘラでミガク。9も高坏で、坏部はほぼ完存で、脚部は坏との付け根から裾の途中まで1/2ほど復元できた。口径14.9cm、底径7.4cmである。高さは11cmほどと思われる。坏部分の胴部と底部の境に明瞭な稜がつく。脚部の孔は3個である。坏部は、外面・内面とも剥落が目立つ。口縁はヨコナデする。胴部は、外面はハケ目を残して細いヘラでミガキ、内面は細いヘラでミガクと思われる。脚部は、外面は細いヘラでミガキ、内面は坏との付け根の側はヘラナデし、裾の側はハケ目である。

10号住居跡 (旧026 第24・25図、図版6・7・22)

位置・形状

B5グリッドとC5グリッドにまたがる。南西側3分の1程度は、調査範囲外になり、調査できなかった。

平面はおそらく隅丸のほぼ正方形であろう。北西-南東方向で5.3m、深さ40cmである。柱穴は4基ある。そのほか南東側の壁の中ほど近くにハシゴ穴がある。炉は、中央からやや北西側に寄った位置にあり、窪む。焼土が北西側の壁と南東側の壁に沿って出土した。

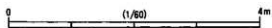
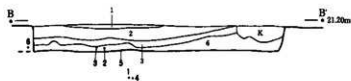
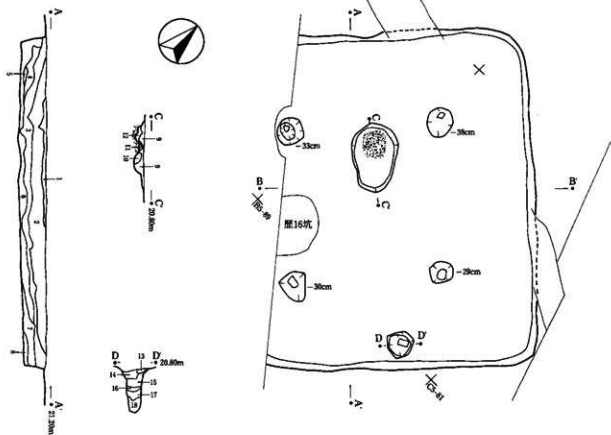
出土遺物

土師器の甕・高坏・壺が出土した。

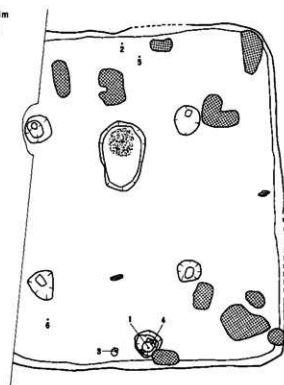
1は台付大型甕で、完形である。口径15.7cm、最大径20.0cm、底径5.5cm、台底径9.0cm、高さ25.3cmである。甕の高さは20cmほどと思われる。ハシゴ穴から出土した。口縁部は、外面はヨコナデし、内面はヘラナデを残してヨコナデする。胴部は、外面はハケ目を残してナデて、内面は、剥落がひどいが、ヘラナデすると思われる。底部は、外底はハケ目を残してナデて、内底はヘラナデする。台部は、外面はハケ目を残してナデるが、裾はヨコナデし、内面は、ハケ目を残してヘラナデするが、こちらも裾はヨコナデする。台部の器部との付け根の外面に接合痕がある。胴部のうち最大径部分より上側にススが多く附着する。2は大型の甕で、口縁部は1/8ほどであるが、頸部から底部にかけて完存である。口径推定15.8cm、最大径21.4cm、底径6.0cm、高さ21.0cmである。外底が平らでなく、安定しない。内底は中央が一段凹む。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面は細いヘラでハケ目をつけ、内面はヘラケズリの後、ヘラナデする。底部は、外底は細いヘラでハケ目をつけ、内底はヘラでミガク。胎土に鉱物粒の混入が目立つ。3は小型の甕で、口縁部が所々欠けるが、ほぼ完形である。口径7.5cm、最大径10.3cm、底径3.6cm、高さ9.9cmである。口縁部は、口縁は外面・内面ともヨコナデする。その下側は、外面はヨコナデし、内面はハケ目である。胴部は、外面はハケ目を残してナデて、内面はヘラナデする。底部は、外底・内底ともヘラナデする。頸部の外面に接合痕がある。

4は高坏の脚部で、ほぼ完存である。底径9.2cm、高さ6.5cmである。1と同じハシゴ穴から出土した。孔は3個である。外面は細いヘラでミガキ、内面は、坏部との付け根から孔の下あたりまではヘラナデし、それより下はハケ目である。

5は壺の口縁部から頸部までの全周する破片である。口縁を下にして台に転用された可能性もあるが、頸部の割れ口には、磨耗した形跡はない。口径8.8cm、頸部内径7.0cmである。頸部の外面に細い粘土紐をハケ目の上にナデツけて、隆帯をめぐる。口縁部は、外面・内面ともハケ目を残してヨコナデする。頸部の内面は、ハケ目である。頸部の内面に接合痕がある。堅い焼き上がりである。6は小型壺で、口縁部



- 1 黒褐色土
 - 2 黒色土
 - 3 黒褐色土
 - 4 赤色土
 - 5 赤褐色土
 - 6 暗赤褐色土
 - 7 黒色土
 - 8 暗褐色土
 - 9 黒色土
 - 10 暗赤褐色土
 - 11 赤色土
 - 12 暗赤褐色土
 - 13 暗赤褐色土
 - 14 黒色土
 - 15 黒色土
 - 16 黒色土
 - 17 黒色土
 - 18 暗赤褐色土
- ローム粒少量混じる
 - ローム粒少量混じる
 - 粘土に赤色土が混じる
 - ローム粒多量混じる
 - 焼土散在
 - 焼土粒少量混じる
 - ロームと黒色土から成る
 - 焼土
 - 焼土と暗褐色土から成る
 - 焼土と暗褐色土から成る
 - ローム粒が混じる
 - ローム粒少量混じる
 - ローム粒混じる
 - ローム



第24図 古墳時代10号住居跡遺構

から胴部にかけて、口縁部は全周を、胴部は4/5ほど復元できた。口径6.1cmである。頸の外面には細い沈線をめぐるせる。口縁部は、外面・内面とも丁寧にヨコナデする。外面はハケ目が所々残る。胴部は、外面は丁寧にナデ、内面はナデる。頸の内面には、口縁部を胴部につけたナデの痕がめぐる。

11号住居跡 (旧027 第26・27・28図、図版7・22・30)

位置・形状

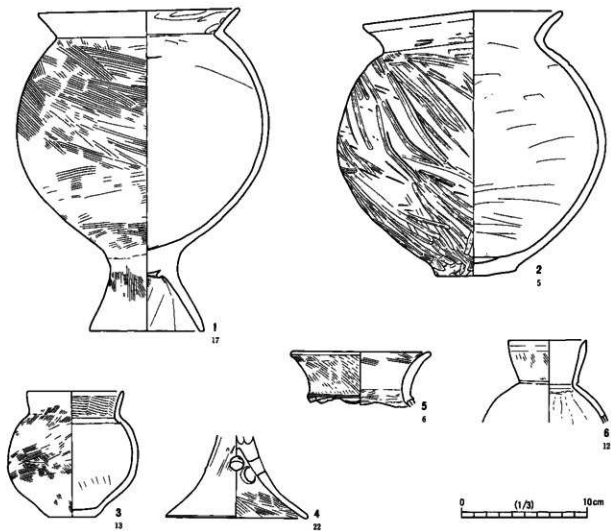
B 4グリッドの東側にある。溝に北東側の壁と南側の隅を壊されている。

平面は隅丸の方形で、長軸6.5m、短軸5.7m、深さ30cmである。壁に沿って溝が一周する。柱穴は4基ある。ほかに東側の隅、北東側の壁、北西側の壁に大小3基の穴がある。炉は、中央から北東側に寄ったところに2基あり、共に窪む。焼土が北東側を除く三方の壁に沿って出土した。

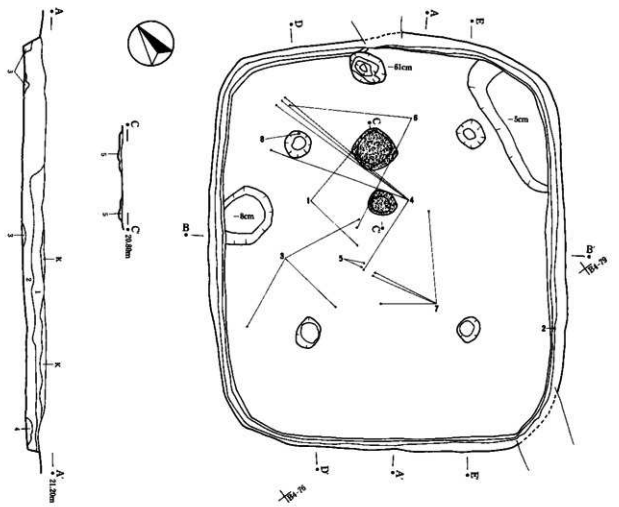
出土遺物

土師器の甕・高坏・器台・壺、歴史時代の須恵器片・刻書土器が出土した。

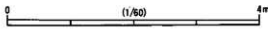
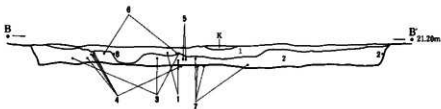
1は大型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/4ほど復元できた。口径推定21.6cmである。口縁部は、外面



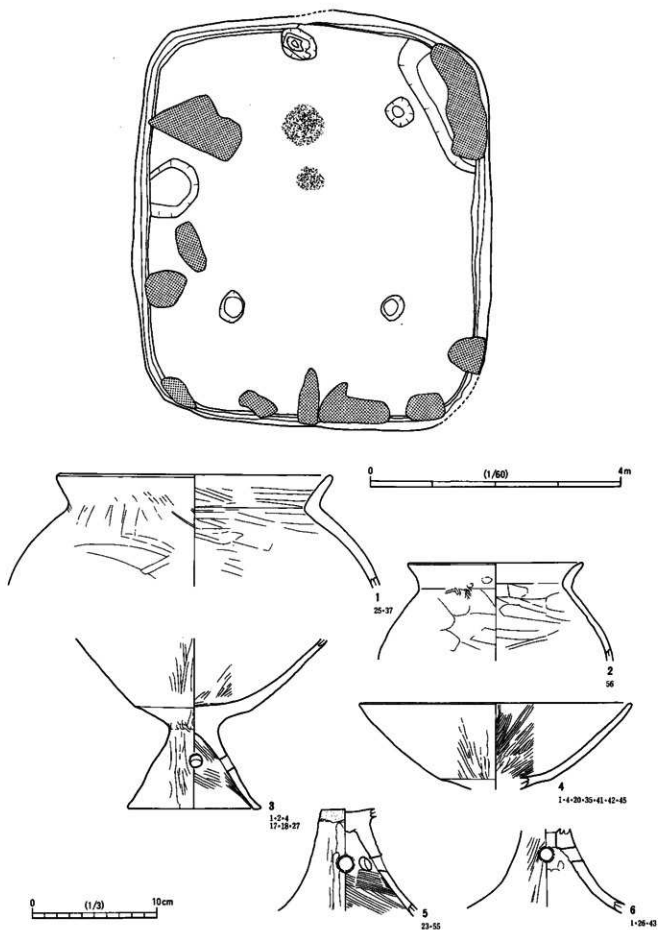
第25図 古墳時代10号住居跡遺物



- 1 黒色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土
- 4 赤褐色土
- 5 暗褐色土



第26図 古墳時代11号住居跡遺構 (1)



第27図 古墳時代11号住居跡遺構(2)・遺物(1)

は口縁はヨコナデし、下側はハケ目を消してヨコナデし、内面は口縁はヨコナデし、下側はハケ目である。胴部は、外面・内面ともヘラナデする。外面のヘラナデは、ヘラが細いのでハケ目のように見える。2は小型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/4ほどの破片である。口径推定13.8cmである。口縁部は外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。

3～5は高坏である。3は坏部の下半分から脚部まで3/4ほど復元できた。脚部の底径10.5cmで、高さは15cmほどと思われる。坏部は底部まで、外面・内面とも細いヘラでミガク。脚部は、外面は細いヘラでナデて、内面はハケ目で裾をヨコナデする。4は坏部で、3/4ほど復元できた。口径推定21.0cm、坏部高さ6.5cmほどである。口縁部は、外面はヨコナデし、内面は底部まで細いヘラでミガク。胴部の外面は細いヘラでミガキのようにナデる。底部の外面はミガキのようにナデる。外面の下側の方に、黒色に塗られていた痕跡らしきものがある。5は脚部で、裾を除いて、ほぼ全周復元できた。孔は3個である。坏部の内底は、剥落が目立つが、丁寧にナデると思われる。脚部は、外面は細いヘラでミガキのようにナデて、内面は孔から上はヘラナデし、孔から下はハケ目を残してナデる。

6は器台の脚部で、裾を除いて、ほぼ全周復元できた。孔は3個である。外面は細いヘラでミガキのようにナデる。内面は、孔から上はヘラナデで、孔から下はハケ目を消してナデる。

7は壺で、口縁部から頸部にかけてほぼ全周が復元できた。口径18.7cmである。口縁は、外周に幅広の粘土紐を貼りつける。内面の磨耗が目立つ。口縁は外面はヘラナデし、内面は細いヘラでミガク。それより下は、外面は細いヘラでミガキ、内面はナデる。軟らかい焼き上がりである。

8は、歴史時代と思われる須恵器の破片である。磁石に転用しようとした可能性がある。

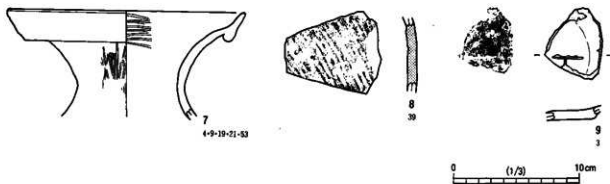
9は、歴史時代の土師器の皿の底部の破片である。外底には回転糸切り痕が残る。内底に焼成後の刻書がある。「丁」や「王」などの文字の可能性はある。

12号住居跡 (旧028 第29図、図版8・30)

位置・形状

C4グリッドの北西隅にあり、C3グリッドにもかかる。歴史時代4号掘立柱建物跡と溝によって壁が壊されている。

平面は隅丸の方形で、長軸4.4m、短軸3.8m、深さ20cmである。炉は、北東側の壁近くに2基並んである。そのうち南側の炉は、攪乱により壊されている。

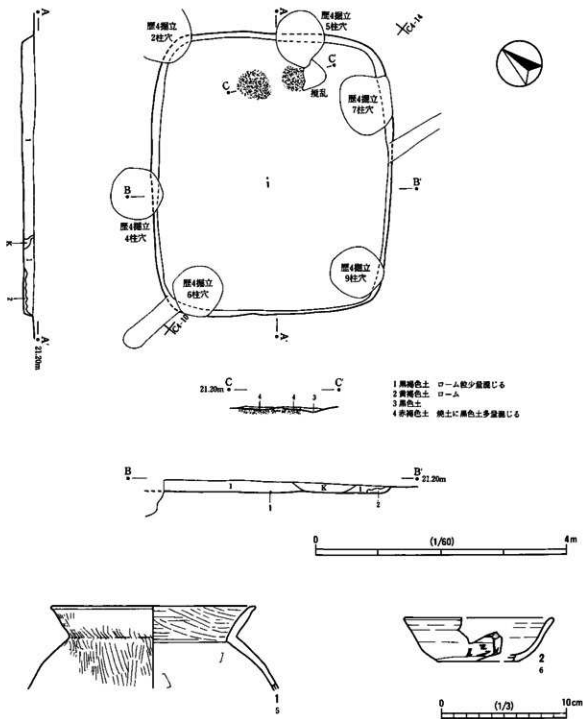


第28図 古墳時代11号住居跡遺物(2)

※ 出土遺物

土師器の甕、歴史時代の墨書土器が出土した。

1は大型の甕で、口径推定16.0cmである。口縁部は、口縁は外面・内面ともヨコナデし、その下は外面はハケ目を残してヨコナデし、内面はハケ目である。胴部は、外面はハケ目で、内面はヘラナデする。



第29図 古墳時代12号住居跡遺構・遺物

2は歴史時代の土師器の坏で、口縁部から底部にかけて1/5ほど復元できた。口径推定11.8cm、底径推定6.4cm、高さ推定3.5cmである。胴部の外面下縁と底部の外底の外周を回転ヘラケズリする。胴部外面に墨書がある。「圃」と思われる。墨痕は薄い。

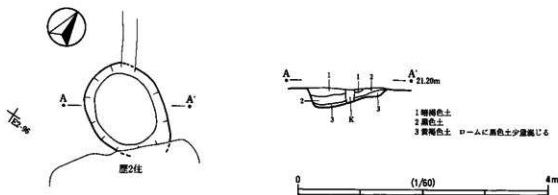
第2節 土坑

第1号土坑 (旧033 第30図、図版8)

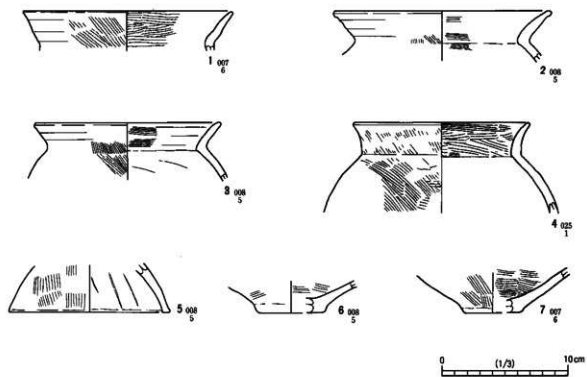
E2グリッドの南東側にある。南東側の壁を歴史時代2号住居跡に壊されている。平面は楕円形で、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ30cmである。出土遺物は古墳時代前期の土師器小片が若干である。図示できるほどのものはない。

第3節 遺構外出土の遺物 (第31図)

いずれも土師器の壺の破片である。1は大型の口縁部の1/8ほどの破片で、口径推定16.8cmである。外面はハケ目を残してヨコナデし、内面はハケ目である。外面にスガがつく。2も大型の口縁部から頸部にかけて1/8ほどの破片で、口径推定17.4cmである。口縁部は、外面は下の方にハケ目を残してヨコナデし、内面はハケ目を残してヨコナデする。3も大型の口縁部から胴部にかけて1/8ほどの破片で、口径推定14.8cmである。口縁部は、外面は下の方にハケ目を残してヨコナデし、内面は全体にハケ目を残してヨコナデする。胴部は、外面はハケ目で、内面はヘラナデする。4も大型の口縁部から胴部にかけて1/8ほどの破片で、口径推定13.8cmである。口縁部は、口縁は外面・内面ともヨコナデし、その下は外面はハケ目を残してヨコナデし、内面はハケ目である。胴部は、外面はハケ目で、内面はナデる。口縁部の外面にスガが付着する。5は、台付大型の台の下側1/6ほどの破片で、底径推定12.8cmである。外面はハケ目を残してナデて、内面はヘラナデする。6は大型の底部の1/4ほどの破片で、底径推定5.0cmである。外面はハケ目を消してナデて、内面はハケ目を残してヘラナデする。7も大型の底部の1/6ほどの破片で、底径推定4.4cmである。外面・内面ともハケ目である。



第30図 古墳時代1号土坑遺構



第31圖 遠構外出土古墳時代遺物

第4章 歴史時代

古墳時代前期を過ぎてしばらくの間、住居や土坑はつくられていない。しかし、やがて奈良時代の後半から平安時代にかけて、住居、掘立柱建物、土坑がつけられた。この時期の遺構をまとめて歴史時代のものとして報告する。合せて住居跡9軒、掘立柱建物跡4棟、土坑26基である。住居跡と掘立柱建物跡の主軸の方向を見ると、住居跡は、ほぼ南北にとるものと、約45°振れたものがある。掘立柱建物跡も、南北にとるものと約30°振れたものがある。

第1節 住居跡

1号住居跡 (旧001 第32・33図、図版8・23)

位置・形状

F2グリッドの南東側にある。南側の隅が、古墳時代1号住居跡を壊している。また、南東側の壁を土坑に壊されている。

平面はほぼ方形で、長軸4.6m、短軸4.3m、深さ60cmである。南東側の壁から南西側、北西側の壁へと溝がめぐる。柱穴は4基ある。そのほかにハシゴ穴が、南西側の壁の中ほどにある。カマドは、北東側の壁の中ほどにある。ローム粒が混じる暗褐色土で基盤をつくった上に黄白色砂質粘土でつくられている。左右の袖のみが残る。

出土遺物

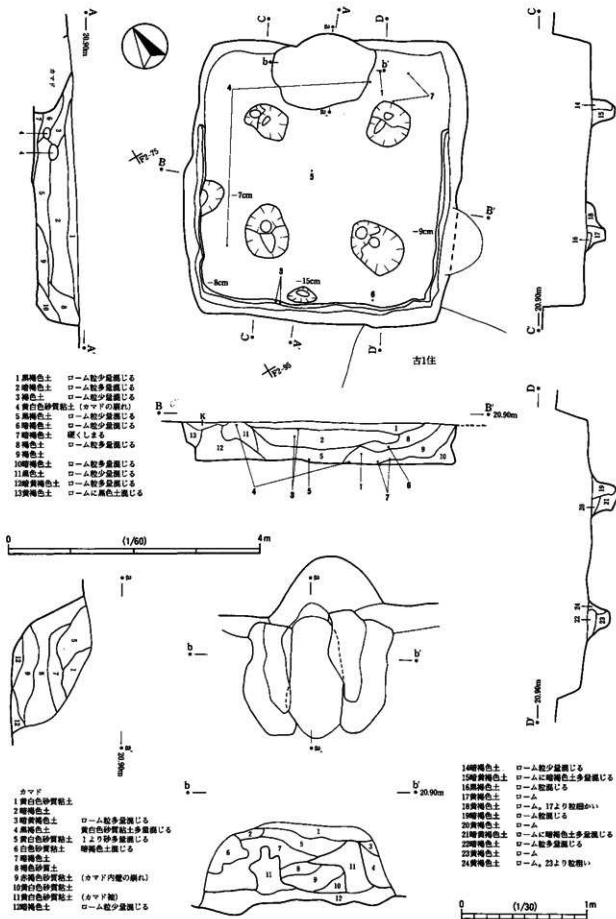
土師器の甕・坏と須恵器の坏蓋・坏が出土した。

1～4は甕である。1は大型で、口縁部から胴部にかけて1/3ほど復元できた。口径推定22.4cm、最大径推定26.8cmである。口縁部は、頸の下まで外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面は頸から最大径のところまでナデて、それより下は細いヘラでヘラナデし、内面はヘラナデする。頸部の内面には接合痕が残る。2も大型で、口縁部から底部まで1/8ほど復元できた。口径推定20.2cm、最大径推定19.6cm、底径4.0cm、高さ推定25.0cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部と底部は、外面はヘラケズリで、内面はヘラナデする。内底は剝落が顕著である。3も大型で、口縁部から胴部にかけて1/8ほど復元できた。口径推定20.8cmである。口縁部から頸部まで、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。4も大型で、口縁部から頸部にかけて1/8ほど復元できた。口径推定19.2cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。頸部は、外面はヘラケズリし、内面はヨコナデする。2～4は、いずれも頸のくびれの外面にヘラを横方向に動かして削り出した段がつく。

5は須恵器の坏蓋で、3/4ほどの破片である。つまみは欠損しているが、欠損部を磨っている。口径14.2cm、残存高さ2.8cmである。胎土は長石粒の混入が目立つ。

6は土師器の坏で、口縁部から胴部にかけては1/2ほど復元でき、底部は完存する。口径推定14.2cm、底径7.8cm、高さ4.0cmである。外底は、単一方向に手持ちヘラケズリする。胎土に雲母の混入が目立つ。

7は須恵器の坏で、口縁部から底部にかけて1/2ほど復元できた。口径推定13.8cm、底径8.1cm、高さ3.4cmである。胴部外面下縁は回転ヘラケズリし、外底は単一方向に手持ちヘラケズリする。その外底の中心



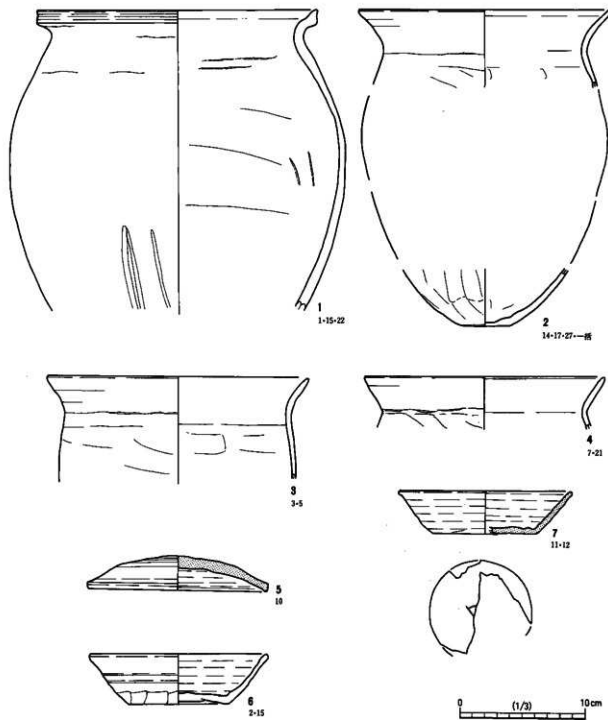
第32図 歴史時代1号住居跡遺構

に焼成前にヘラでつけられたV字状の刻書がある。胎土は長石粒の混入が目立つ。

2号住居跡 (旧005 第34図、図版9)

位置・形状

E 2グリッドの南東側にある。北西側の壁は古墳時代1号土坑を壊し、南側の隅を溝に壊されている。平面はほぼ方形で、長軸2.6m、短軸2.4m、深さ60cmである。柱穴はない。ほかに穴が、南西側の壁の中



第33図 歴史時代1号住居跡遺物

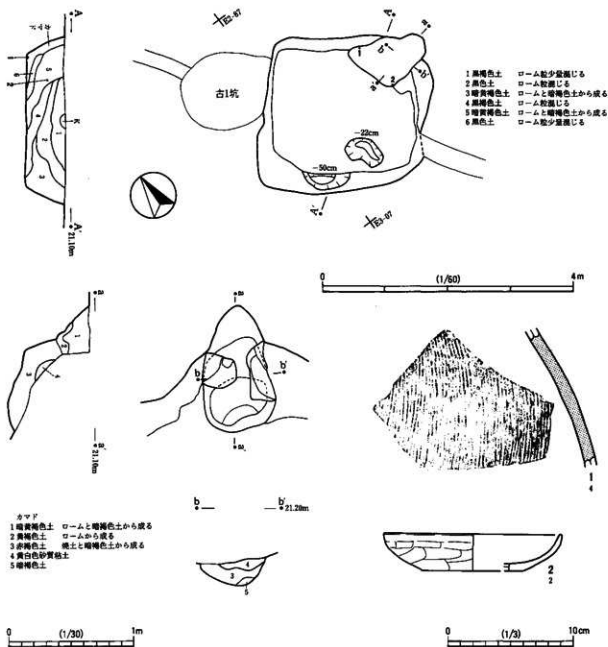
ほどとその近くにある。カマドは東側の隅にある。黄白色砂質粘土で作られている。左右の袖の一部が残る。

出土遺物

須恵器の壺と土師器の坏が出土した。

1は須恵器の大型壺の胴部の破片である。外面はタタキ目で、内面はナデる。胎土は霰母と茶色鉱物粒の混入が目立ち、軟らかい焼き上がりである。割れ口は少し磨耗する。

2は土師器の坏で、口縁から底部にかけて1/6ほどの破片である。口径推定17.2cm、底径推定8.0cm、高



第34図 歴史時代2号住居跡遺構・遺物

き2.9cmである。成形にロクロをつかっていない。口縁部は、外面はヨコナデし、内面は底部にかけて丁寧
にナデる。胴部の外面はヘラケズリする。外底はヘラケズリ痕を残してナデて、少し光沢がある。

3号住居跡 (旧011 第35図、図版9・23・32)

位置・形状

D2グリッドの南東隅にある。住居跡の北西側の1/2ほどは、調査範囲外にある。南西側の壁を歴史時代
2号掘立柱建物跡の1柱穴に壊されている。

平面はほぼ方形で、長軸は推定3.8m、短軸は推定3.5m、深さ50cmである。壁は、ほぼ垂直である。壁に
沿って溝が一周している。柱穴は、3基だけの検出である。そのほかにハシゴ穴が、南西側の壁の中ほど
にある。カマドは、北東側の壁の中ほどにあると思われる。

出土遺物

土師器の甕・坏・皿、須恵器の甗・坏、刻書土器、磁石が出土した。

1は大型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/6ほどの破片である。口径推定19.5cmである。口縁部から頸
部にかけて外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はナデて、内面はヘラナデする。頸部の外面に接
合痕が残る。2は小型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/8ほどの破片である。口径推定17.4cm、口縁部は、
外面・内面ともヨコナデし、胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。

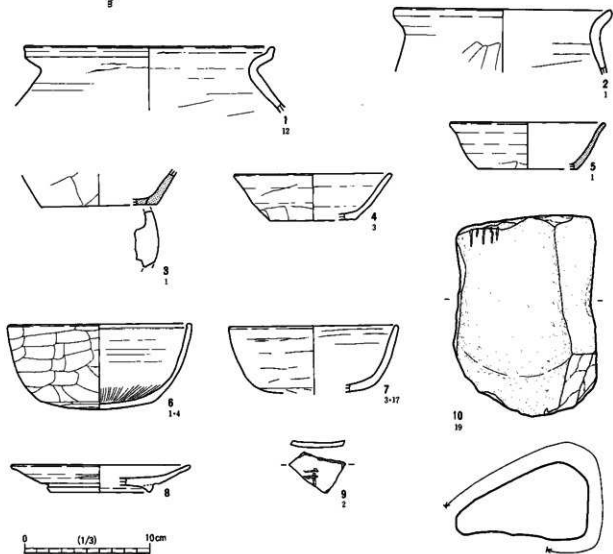
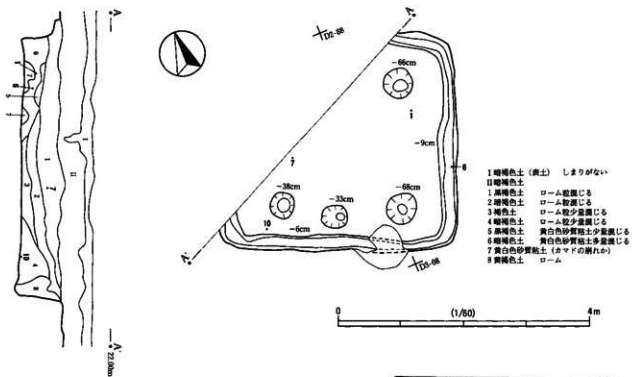
3は須恵器の甗で、底部の小片である。底径推定9.2cmである。胴部の外面はヘラケズリし、内面はナデ
る。底部も外底はヘラケズリし、内底はナデる。

4～7は坏である。4は口縁部から底部にかけて1/6ほど復元できた。口径推定12.6cm、底径推定6.8cm、
高さ3.7cmである。胴部の外面下縁は手持ちヘラケズリする。外底は回転ヘラケズリする。胴部の外面に接
合痕が残る。5は須恵器で、口縁部から底部にかけて1/10ほどの破片である。口径推定12.4cm、底径推定
8.0cm、高さ3.7cmである。胴部外面下縁と外底は手持ちヘラケズリする。6は口縁部から底部まで2/3ほど
復元できた。口径14.7cm、底径9.0cm、高さ6.7cmである。口縁の内面に細い沈線をめぐらせる。口縁部は、
口縁とその下の内面をヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面は丁寧なナデる。底部は、外底
はヘラケズリ痕を残してナデて、内底は細いヘラでナデる。7は口縁部から底部にかけて1/6ほど復元でき
た。口径推定13.6cm、底径推定9.0cm、高さ推定5.3cmである。口縁部は、外面はヨコナデし、内面は細い
ヘラでミガク。このミガキは胴部内面から内底までつづく。胴部外面はヘラケズリし、外底はヘラケズリ
を残してナデる。

8は土師器の皿で、口縁部から底部にかけて1/6ほどの破片である。口径推定14.3cm、底径推定7.8cm、
高さ2.2cmである。皿部の内面はナデる。高台の付け根の外面・内面とも回転ナデツケする。外底は回転ヘ
ラケズリする。皿部の外面に接合痕が残る。

9は刻書のある土師器片で、ロクロ成形でない碗のような形の坏の胴部の破片と思われる。外面は少し
光沢があるほどにナデて、内面はナデる。刻書は外面にあり、焼成前にヘラでつける。ヘラの運びが毛筆
で書くのと同じとして、上下を決めた。「子」の字かとも思われるが、縦の線が右に片寄る。

10は砂岩の磁石である。図の上部に縦に数本の擦痕があり、断面図に両端を矢印で示した範囲が磨耗す
る。



第35図 歴史時代3号住居跡遺構・遺物

4号住居跡 (旧013 第36図)

位置・形状

D3グリッドの北西側にあり、調査範囲の縁に近い。

検出した面がほぼ床面で、壁は残らない。したがって、平面形、規模は不明である。柱穴等はなく、カマドの跡だけが残る。硬くなった床面に黄白色砂質粘土の塊があり、そのわきに焼土が堆積していた。

出土遺物

土師器の甕・坏が出土した。

1は小型の甕で、胴部下半1/3ほどの破片である。外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。

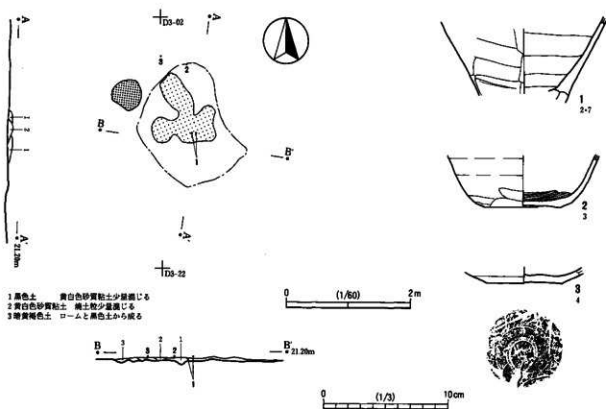
2は坏で、胴部下半から底部にかけて1/2ほど復元できた。ロクロ成形する。胴部は、外面下縁は手持ちヘラケズリし、内面は少し光沢があるようにナデる。底部の外底は回転糸切り痕を残して手持ちヘラケズリし、内底は細いヘラでミガク。3も坏で、底部が完全に復元できた。胴部は、外面下縁は回転ヘラケズリし、内面は内底まで方向を1つに揃えて細いヘラでミガク。底部は、外底は回転ヘラ切りと思われる。拓本の直線の沈線は、ヘラの痕である。内面の底部から胴部が立ち上がる境目に接合痕が残る。

5号住居跡 (旧016 第37・38図、図版4・23・33)

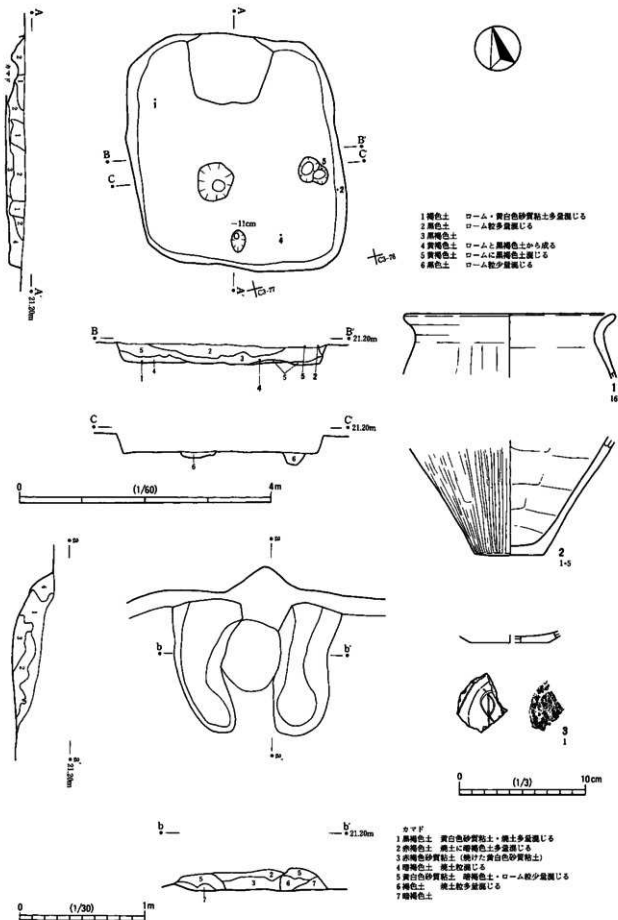
位置・形状

C3グリッドの東側にあり、調査範囲の縁に近い。

平面はほぼ隅丸方形であるが、やや菱形に歪んでいて、長軸3.8m、短軸3.4m、深さ30cmである。柱穴はない。ハシゴ穴が、南側の壁の中ほどにある。そのほか中央からやや西側に1基、東側の壁に沿って1基の穴がある。カマドは、北側の壁の中ほどにある。黄白色砂質粘土でつくられている。左右の袖が残る。



第36図 歴史時代4号住居跡遺構・遺物



第37図 歴史時代5号住居跡遺構・遺物(1)

出土遺物

土師器の甕・坏、須恵器の壺が出土した。

1は大型の甕で、口縁部から胴部にかけて1/6ほどの破片である。口径推定16.4cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデし、胴部は、外面はヘラケズリの後にナデて、内面は口縁部からの続きでヨコナデする。2も大型の甕で、胴部から底部にかけて1/3ほど復元できた。底径5.6cmである。胴部は、外面はヘラケズリの後にヘラナデし、内面は、ヘラナデする。底部は、外底は胴部と同じくヘラケズリの後にヘラナデする。内底は剝離が顕著であるが、ナデと思われる。

3は坏で、胴部の下縁から底部にかけての破片である。推定底径6.0cmである。外底は少し光沢があるほどナデて、内底はナデる。外底に焼成前にヘラでつけた刻書がある。かすかであるが、図の右端にも刻書の一部と思われる沈線が残る。記号と思われる。胴部下端付近にある沈線は、底部の刻書の沈線と同じような刻まれ方であるが、ヘラによる傷と思われる。4も坏で、口縁部から胴部にかけて1/6ほど復元できた。口径推定15.8cmである。口縁部から胴部にかけて、外面はヘラケズリの後に、少し光沢があるほどナデる。内面はこれも少し光沢があるほどナデる。

5は須恵器の壺で、胴部から底部にかけて1/3ほどの破片である。最大径推定9.8cm、底径5.4cmである。胴部の外面は回転ヘラケズリする。高台は貼り付けで、台の内側の器部外底を回転ナデツケする。器の外底は回転糸切りする。全体に茶褐色であるが、所々赤味を帯びている。内底には暗緑色の自然の釉が付着する。堅い焼き上がりである。

このほかに図版33に示す鉄滓が出土した。長さ8.0cm、幅4.3cm、厚さ4.3cm、重さ258.6gである。

6号住居跡 (旧017 第39～42図、図版10・24～27・32・33)

位置・形状

D3グリッドの南東側にあり、古墳時代5号住居跡の東側を壊している。また、南東側の隅を後世の溝に壊されている。

平面はほぼ方形で、長軸3.6m、短軸3.5m、深さ40cmである。壁に沿って溝がカマドを除いて一周する。柱穴等ない。カマドは、暗褐色土で基盤をつくった上に黄白色砂質粘土などでつくられている。左右の袖が残る。

炭化物が、かなり出土している。土器の出土も多く、カマドからもまとまって出土した。

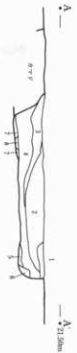
出土遺物

土師器の甕・坏・皿・鉢、須恵器の壺、土製支脚、鉄製品が出土した。

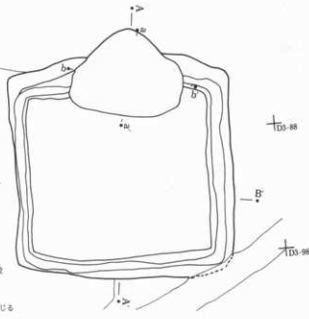
1～6は甕である。いずれも大型である。1は口縁部から胴部にかけて2/3ほどが復元できた。口径19.0cm、最大径21.2cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面は上半は縦方向に下半



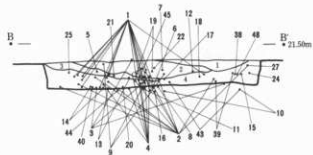
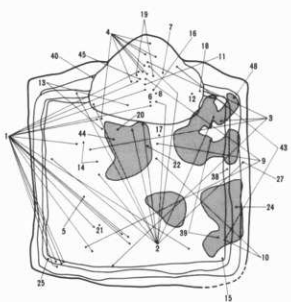
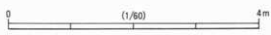
第38図 歴史時代5号住居跡遺物(2)



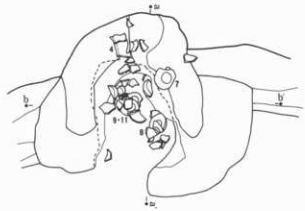
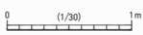
古5住



- 1 濃褐色土 焼土粒混じる
- 2 黒褐色土 焼土粒・炭化物粒多量混じる
- 3 赤褐色土 焼土粒多量混じる
- 4 黒色土 焼土粒・炭化物粒多量混じる
- 5 暗黄褐色土 ロームと黒色土から成る。焼土粒・炭化物粒少量混じる
- 6 黄褐色土 ロームに黒色土混じる
- 7 黄白色砂質粘土 (カマフの崩れ)
- 8 黄白色砂質粘土 (カマフの崩れ) 黒色土・焼土粒少量混じる



- カマフ
- 1 黒褐色土 黄白色砂質粘土・焼土粒少量混じる
 - 2 赤褐色砂質粘土 (焼けた黄白色砂質粘土)
 - 3 赤褐色土 焼土と暗褐色土から成る
 - 4 暗褐色砂質粘土 黄白色砂質粘土・焼土粒少量混じる
 - 5 黒褐色土 黄白色砂質粘土少量混じる
 - 6 暗黄褐色土 ロームと黒褐色土から成る
 - 7 暗褐色土
 - 8 黄白色砂質粘土
 - 9 赤褐色砂質粘土 (焼けた黄白色砂質粘土)
 - 10 暗褐色砂質粘土
 - 11 暗褐色土 焼土粒混じる

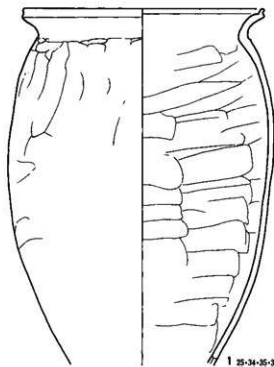


第39図 歴史時代6号住居跡遺構

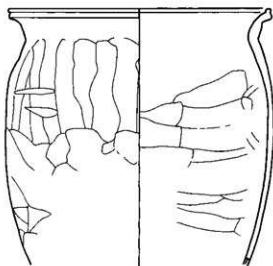
は横方向にヘラケズリし、内面はヘラナデする。胴部外面に所々土が焼き付く。2は口縁部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。口径21.0cm、最大径21.4cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面は上半は縦方向に下半は斜方向にヘラケズリし、内面はヘラナデする。3は口縁部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。口径18.5cm、最大径21.9cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリの後にヘラナデし、内面はヘラナデする。胴部外面の一部に土が付着する。4は口縁部から胴部にかけて3/4ほどが復元できた。口径16.7cm、最大径17.6cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面は上半は丁寧にナデて、下半はヘラケズリし、内面は丁寧にヘラナデする。5は胴部から底部にかけての破片である。底径推定16.0cmである。胴部は、外面はヘラケズリし、内面は底部に胴部をヘラナデツケする。底部は、外底は外周をヘラケズリしてナデる。内底はナデる。外底の中心付近に、焼成前にヘラでつけた刻書がある。「本」と読める。刻書のまわりの圧痕は、粗い布と思われる。なお、内面は、ススが付着したせいで黒くなっている。6は底部の破片である。破片の内底側の縁にヘラナデの痕がある。縁より内側の内底はナデる。外底はヘラケズリもする。外底に焼成前にヘラでつけた刻書がある。「本」と読める。5の刻書と書き手は同じと思われる。

7～37は坏である。7は口縁部から底部にかけて2/3ほどが復元できた。口径18.6cm、底径9.6cm、高さ5.7cmである。胴部下半の外面は回転ヘラケズリする。外底は回転ヘラケズリの後に中心を手持ちヘラケズリする。口縁部から底部まで内面は、細いヘラでミガク。胴部の外面に墨書がある。「田」と思われる。口縁に対して横向きに書かれる。墨痕が薄くて、肉眼でははっきり見えない。8は完形で、口径16.7cm、底径8.8cm、高さ5.8cmである。胴部外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。内底は細いヘラでミガク。胴部内面にも細いヘラを粗雑に当てる。胴部外面に「万」の墨書がある。胴部外面には接合痕がある。9は口縁部から底部にかけて2/3ほどが復元できた。口径推定18.0cm、底径9.6cm、高さ5.9cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は磨耗するが、回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリすると思われる。口縁部から底部にかけての内面は細いヘラでミガク。胴部外面に墨書がある。記号と思われる。墨痕は薄い。

10は口縁部から底部にかけて1/3ほど復元できた。口径推定15.4cm、底径推定8.0cm、高さ4.1cmである。胴部の外面下縁から外底にかけて回転ヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面は、細いヘラでミガクが、ヘラの動きは、口縁部から胴部は口縁に平行にし、底部は単一方向である。11は口縁部から底部にかけて4/5ほど復元できた。口径12.9cm、底径6.9cm、高さ4.2cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面は、細いヘラでミガクが、ヘラの動きは、口縁部から胴部は口縁に平行にし、底部は単一方向である。12は口縁部から底部にかけて2/3ほど復元できた。口径推定12.2cm、底径7.0cm、高さ3.4cmである。胴部下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。内底はナデると思われる。胴部外面に「萬」の墨書がある。墨痕は薄い。胴部外面には接合痕もある。13は口縁部から底部にかけてほぼ完形で復元できた。口径12.0cm、底径7.0cm、高さ3.4cmである。外面・内面とも磨耗して調整が不明瞭である。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りの後、回転ヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面の調整はわからない。口縁部から胴部にかけて外面と内面にわたって、スが付いたような部分がある。14は口縁部から底部にかけて3/4ほど復元できた。口径12.2cm、底径6.5cm、高さ3.3cmである。胴部の外面下縁から外底にかけて回転ヘラケズリする。胴部の外面に接合痕がある。15は口縁部から底部

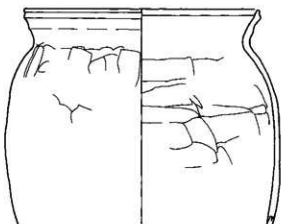


1 25-34-35-37-39-40
43-46-48-74-84-96
117-119-120-128-131
149-150-161-162



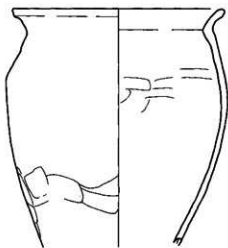
2

7-15-49-53-62-68-76-79-117-119-120
127-130-161-162



3

36-87-101-117
120-140-161-162



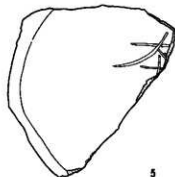
4

73-118-120-136-139-141-142
156-157-162



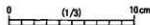
6

147

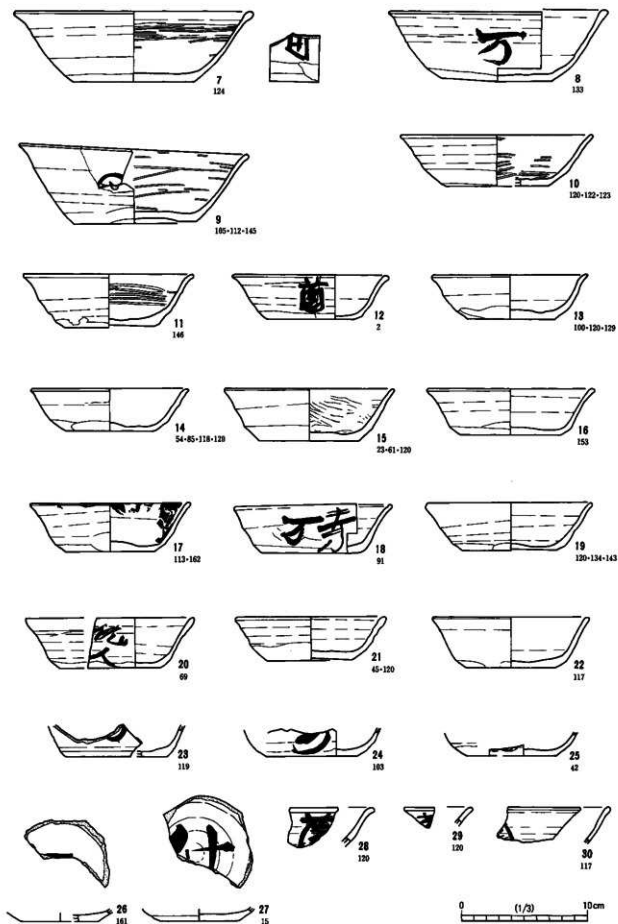


5

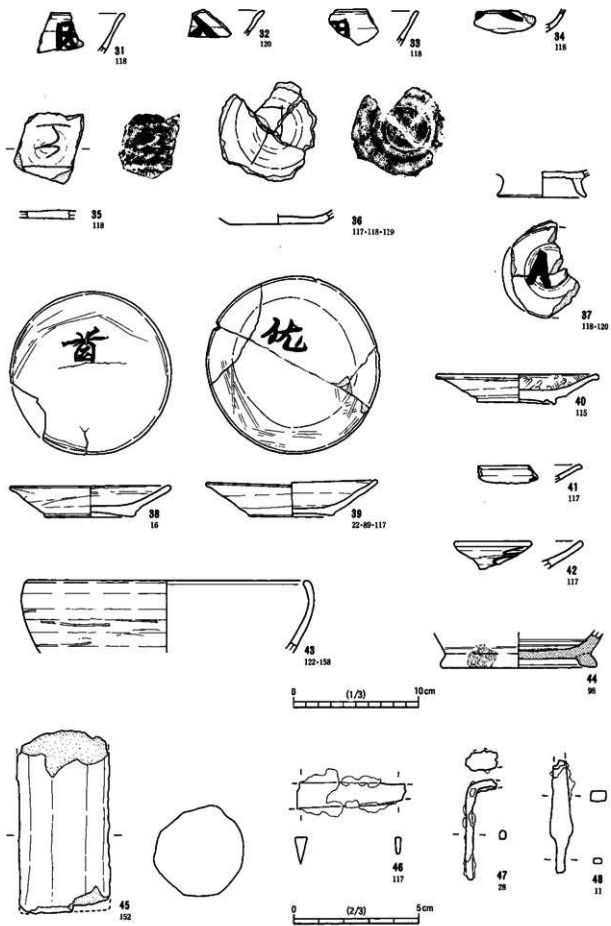
107



第40図 歴史時代6号住居跡遺物(1)



第41図 歴史時代6号住居跡遺物(2)



第42圖 歴史時代6号住居跡遺物(3)

にかけて1/2ほど復元できた。口径推定13.6cm、底径推定8.1cm、高さ4.1cmである。胴部の外面下縁から外底にかけて回転ヘラケズりする。口縁部から底部にかけての内面は、口縁部から胴部は口縁に平行に、底部は円を描くように、細いヘラでミガク。16は口縁部から底部にかけて1/2ほどの破片で、口径推定13.0cm、底径8.0cm、高さ4.6cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズりする。17は口縁部から底部にかけて1/2ほど復元できた。口径推定12.5cm、底径6.5~7.0cm、高さ3.8cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切り後、外周を回転ヘラケズりする。胴部の外面から内面にかけて油煙のススの痕が残る。18は完形で、口径12.4cm、底径7.4~7.8cm、高さ3.8cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。底部は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズりする。胴部の外面に墨書がある。左は「万」、右は「寺」または「土」と「万」が上下に重なるように見える。「万」は墨痕がはっきりするが、「寺」は、はっきりしない。19はほぼ完形で復元できた。口径12.7cm、底径7.4cm、高さ3.8cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切りの後、回転ヘラケズりする。20は口縁部から底部にかけて1/2ほどの破片で、口径推定13.2cm、底径推定7.8cm、高さ4.0cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切りの後、回転ヘラケズりする。胴部の外面に墨書がある。口縁に対して垂直でなく右に傾く。2字で、「佐人」と思われる。上の字は、崩した書き方で、「佐」とすると、右側のつくりの形の「左」の「工」が「ヒ」に近い。胴部外面には接合痕もある。21は、ほぼ完形で復元できた。口径11.6cm、底径7.0cm、高さ3.5cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズりする。胴部の外面の上半1/4ほどと、口縁部から底部にかけての内面の3/4ほどに、黒色の塗料をつけたと思われる痕跡がある。光沢がある。22は口縁部から底部にかけて1/2ほど復元できた。口径推定12.4cm、底径推定7.0cm、高さ4.0cmである。胴部の外面下縁は手持ちヘラケズりする。外底は、回転糸切りの後、手持ちヘラケズりする。

23は胴部から底部にかけての破片で、底径推定8.0cmである。胴部の外面下縁はヘラケズりするが、回転か手持ちか不明である。外底も同じである。胴部に墨書がある。「万」の下部と思われる。24は胴部から底部にかけて1/2ほどの破片で、底径推定7.4cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズりする。胴部の外面に墨書がある。「万」の下部と思われる。25は胴部から底部にかけて1/2ほどの破片で、底径推定7.0cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズりする。胴部の外面に墨書がある。字形は推定しづらいが、20の「佐」の右下部に近い。26は胴部から底部にかけての破片で、胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転ヘラケズリと思われる。内底の中心に墨書がある。「万」の一部かと思われる。27は胴部から底部にかけての破片で、底径推定6.2cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズりする。外底は回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズりする。内底の中心に墨書がある。「什」の字と思われる。墨痕は薄くて、肉眼では見づらい。28は口縁部から胴部にかけての破片で、内面は細いヘラでミガク。胴部の外面に「薑」の墨書がある。29は口縁部の破片で、外面に墨書がある。「薑」の上部と思われる。内面をミガクかは不明である。30は口縁部から胴部にかけての破片である。胴部に墨書がある。「薑」の字の右端と思われる。口縁に対して左に傾けて書いていると思われる。31は口縁部から胴部にかけての破片で、胴部の外面に墨書がある。「因」の字と思われる。32も口縁部から胴部にかけての破片で、胴部の外面に墨書がある。「入」の字と思われる。33も口縁部から胴部にかけての破片で、胴部の外面に墨書がある。「田」の字と思われる。34は胴部下半の破片と思われる。外面に墨書がある。字形は不明である。「佐」か「仁」の下部かとも思われる。

35は底部の中心の破片である。外底は、回転糸切りの後、回転ヘラケズリする。内底は細いヘラで方向を1つに揃えてミガク。内底の中心に刻書がある。歴史時代2号掘立建物跡の3の墨書と同じ字と思われる。「王」であろうか。焼成前にヘラでつけたと思われる。36も底部の破片である。3/4ほど復元できた。底径推定7.6cmである。外底は、回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。内底の中心に刻書がある。記号と思われる。焼成前にヘラでつけたと思われる。

37は高台付の類で、底部から高台にかけて1/2ほど復元できた。高台の底径推定7.0cm、高さ1.5cmである。高台は回転ナデツケする。内底は細いヘラでミガク。外底に墨書がある。字と思われるが、同定できない。

38～42は皿である。38はほぼ完形で、口径12.4cm、底径7.3cm、高さ2.5cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りしたままでヘラケズリしない。口縁部から底部にかけての内面は、細いヘラでミガク。内底の中心から少し外側に「菌」の墨書がある。墨痕は薄くて、肉眼では見づらい。口縁部から胴部にかけての外面に接合痕が残る。39もほぼ完形で、口径12.5cm、底径6.4cm、高さ2.7cmである。胴部の外面下縁は、回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りのままである。口縁部から底部までの内面は、細いヘラでミガク。内底の中心から少し外側に「佐」の墨書がある。墨痕が薄く、器が黒いので、大変見づらい。40は台付の完形で、口径12.5cm、底径5.8cm、高さ2.3cmである。台は付け根の外面・内面を回転ヘラナデする。外底は回転糸切りのままである。口縁部から底部にかけての内面は、細いヘラでミガク。41は口縁部の破片で、内面は細いヘラでミガク。外面に墨書がある。42も口縁部の破片で、内面は細いヘラでミガク。外面に墨書がある。記号と思われる。墨痕は薄い。

43は鉢である。口縁部から胴部にかけて1/6ほど復元できた。口径推定22.0cm、最大径推定23.2cmである。外面は、細いヘラでミガク。内面も、細いヘラでミガクと思われるが、磨耗がひどいため不明瞭である。

44は須恵器の甗で、底部から台にかけての1/2ほどの破片である。台の底径推定12.4cmである。台は器部との付け根の内側だけナデツケする。全体に淡い灰色で、暗緑色の自然釉がかかる。

45は土製の支脚である。残存長さ14.3cm、径7.0cmである。

46～48は鉄製品である。46は刀子の身から柄にかけての部分で、残存長さ4.3cmである。47は釘の頭部と思われる。残存長さ3.9cmである。48は鎌の先端の下半から茎にかけての部分と思われる。残存長さ4.4cmである。7号住居跡（旧020 第43～45図、図版11・28～30・33）

位置・形状

D4グリッドの北東側にあり、D3グリッドにわずかにかかる。古墳時代6号住居跡の北側を壊している。北西側の隅を溝に壊されている。

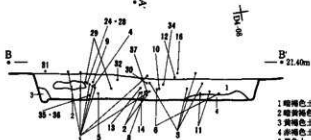
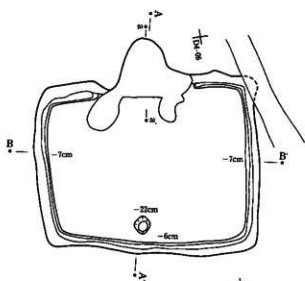
平面は長方形で、北側の方が南側に比べてやや広がる。長軸3.6m、短軸2.8m、深さ40cmである。壁に沿って、溝が、カマドの部分を除いて一周する。柱穴はない。ハシゴ穴が東側の壁の中ほどにある。カマドは黄白色砂質粘土でつくられている。左右の袖の基部の跡である黄白色砂質粘土の盛られたわずかな高まりが残る。

焼土、炭化物がかなり出土する。土器の出土量は多く、カマドからもまとまって出土した。

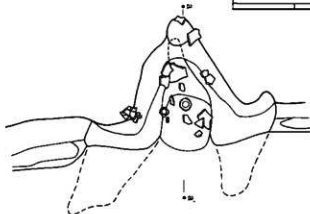
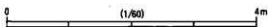
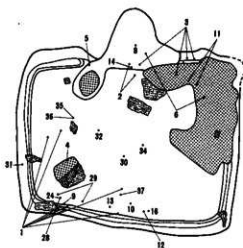
出土遺物

土師器の甕・甔・坏・皿・鉢、鉄製品、軽石が出土した。

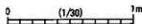
1～5は甕である。1は小型で、口縁部から底部にかけて1/2ほどが復元できた。口径推定12.2cm、最大径推定13.3cm、底径7.0～7.5cm、高さ12.6cmである。口縁部から頸部にかけて、外面・内面ともヨコナデ



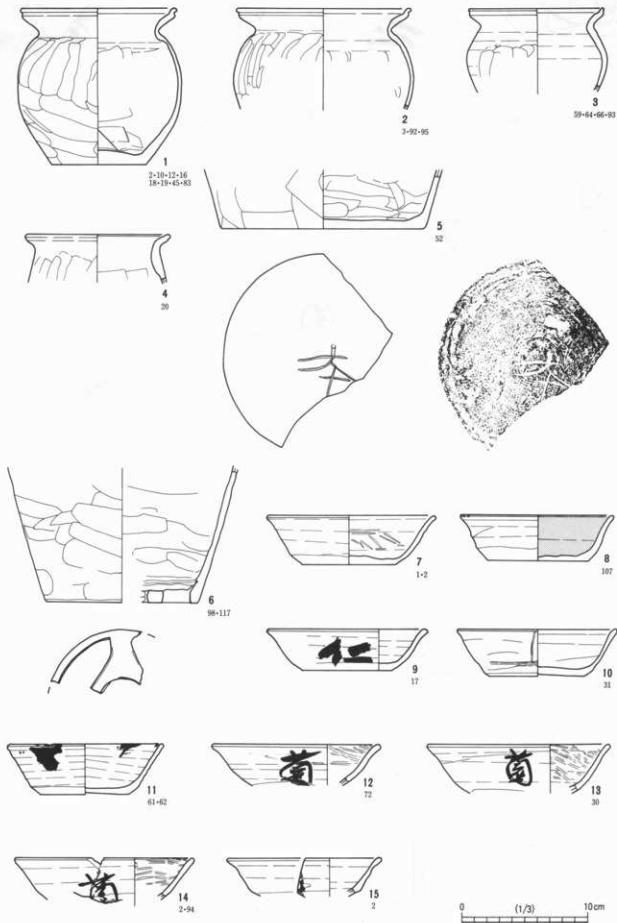
- 1 暗褐色土 ローム状・炭化物粒少量混じる
- 2 暗黄褐色土 ローム粒少量混じる
- 3 黄褐色土 ロームに暗褐色土少量混じる
- 4 赤褐色土 (黄土) 炭化物粒少量混じる
- 5 黒色土



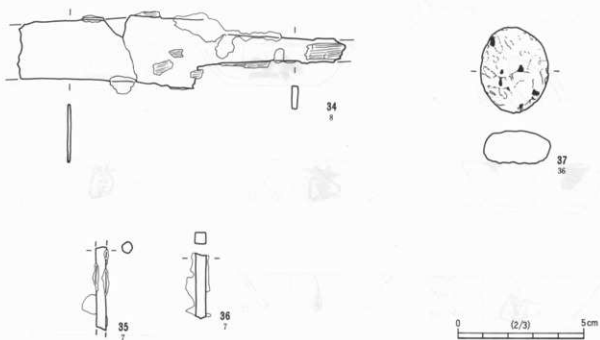
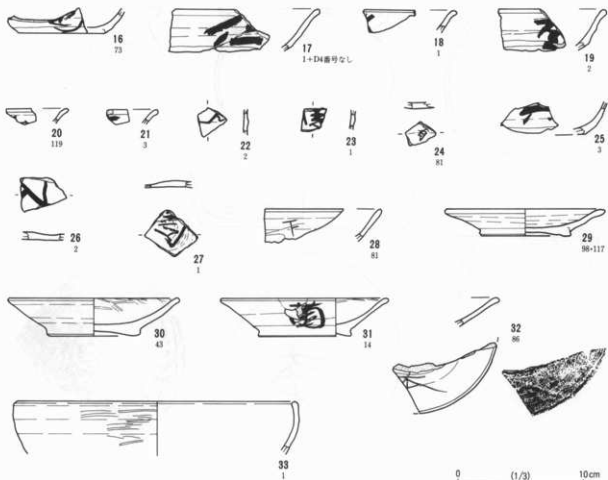
- コヤマ
- 1 黄白色砂質粘土
 - 2 赤褐色砂質土 黄土粒少量混じる
 - 3 黄白色砂質粘土
 - 4 暗褐色土 黄土粒少量混じる
 - 5 赤褐色土 黄土に暗褐色土少量混じる
 - 6 赤褐色土 (黄土)
 - 7 暗褐色土



第43図 歴史時代7号住居跡遺構



第44图 歴史時代7号住居跡遺物(1)



第45図 歴史時代7号住居跡遺物(2)

する。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。底部は、外底はヘラケズリし、内底はナデる。2も小型で、口縁部から胴部にかけて1/5ほど復元できた。口径推定13.6cm、最大径推定14.4cmである。口縁部から頸部にかけて、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。3も小型で、口縁部から胴部にかけて1/2ほど復元できた。口径10.6cm、最大径推定11.2cmである。口縁部から胴部上半にかけて外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はナデる。胴部上半の外面に接合痕が残る。1～3の頸部から胴部にかけてのヨコナデは、ロクロ成形のできるロクロ目に似る。4も小型で、口縁部から胴部にかけて1/4ほどの破片である。口径推定11.2cmである。口縁部から頸部にかけて、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。5は大型で、胴部から底部にかけて1/2ほどの破片である。胴部は、外面はヘラケズリし、内面は指でナデる。底部は、外底は外周をナデるように思われ、内底はナデる。外底の中心からわずかにずれて焼成前にヘラでつけた刻書がある。「本」と読める。歴史時代6号住居跡の5・6と書き手は同じと思われる。

6は幅で、胴部から底部にかけて1/4ほど復元できた。底径推定12.0cmである。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。底部は、外底はヘラケズリし、内底はナデる。胴部下縁の内面に接合痕が残る。

7～28は坏である。7は口縁部から底部にかけて1/2ほど復元できた。口径推定13.2cm、底径7.5cm、高さ3.9cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りの後、外周を手持ちヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面は細いヘラでミガク。8は完形で、口径12.0cm、底径8.0cm、高さ3.6cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転糸切りの後、ほぼ全面に回転ヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面に赤彩の痕が残る。内面はロクロで成形したままである。胴部の外面に接合痕が残る。9は口縁部から底部にかけて1/3ほどの破片で、口径推定12.4cm、底径7.2cm、高さ3.3cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は、回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。胴部の外面に「仁」の墨書がある。胴部の外面には接合痕も残る。10は口縁部から底部にかけて1/2ほどの破片で、口径推定12.5cm、底径7.5cm、高さ3.7cmである。胴部の外面下縁は、磨耗するが、回転ヘラケズリと思われる。外底は、これも磨耗するが、回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリすると思われる。胴部の外面には、接合痕と焼成前にヘラでつけられた傷痕が残る。11は、口縁部から底部まで完形に復元できた。口径12.3cm、底径7.0cm、高さ3.9cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は、回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。口縁部の外面と内面に、灯明に使ったためにススが付着した痕がある。

12は口縁部から胴部にかけて1/4ほどの破片である。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。内面は細いヘラでミガク。胴部の外面に「蘭」の墨書がある。胴部外面には接合痕も残る。13は口縁部から胴部にかけての1/3ほどの破片で、口径推定14.2cmである。胴部の外面下縁は、回転ヘラケズリする。内面は、細いヘラでミガク。胴部の外面に「蘭」の墨書がある。胴部の外面には接合痕も残る。14は口縁部から胴部にかけて1/5ほどの破片で、口径推定14.0cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。内面は、細いヘラでミガク。胴部の外面に「蘭」の墨書がある。15は口縁部から胴部にかけて1/6ほどの破片で、口径推定12.0cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。胴部の外面に墨書がある。「蘭」の右端の四構えの一部かと思われる。16は胴部から底部にかけての底部は完形の破片で、底径6.8cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は、回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。胴部の外面に墨書がある。

「菌」の下部と思われる。口縁に対して垂直ではなく右に傾けて書く。墨痕は薄い。

17は口縁部から胴部にかけての破片で、胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。内面は細いヘラでミガク。胴部の外面に「仁」の墨書がある。9と書き手は同じと思われる。胎土と色調がよく似るので、7と同一個体かと思われる。18は口縁部の破片で、外面に墨書がある。「菌」の右端の草冠と国構えの部分と思われる。19は口縁部から胴部にかけての破片で、胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。胴部の外面に墨書がある。「菌」の左半分と思われる。墨痕は薄い。20は口縁部の破片で、外面に墨書がある。字と思われるが、同定できない。21も口縁部の破片で、外面に墨書がある。同定できない。22は胴部の破片で、外面に墨書がある。歴史時代6号住居跡の20・39の「佐」の左側のつくりの下部かと思われる。墨痕は薄く、見づらい。23も胴部の破片で、外面に墨書がある。「菌」の国構えの部分と思われる。24も胴部の破片で、外面に「有」の墨書がある。口縁に対して垂直ではなく、右に傾けて書いたと思われる。この墨書は、ほかにくらべて筆が細く、違筆である。

25は胴部下半から底部にかけての破片で、胴部の外面下縁と外底は回転ヘラケズリしたと思われる。胴部の外面に墨書がある。字と思われるが同定できない。墨痕は、薄くて見づらい。胎土と色調が5と似る。26は底部の破片で、外底はヘラケズリする。内底に墨書がある。字か記号か不明である。27も底部の破片で、外底の中心に当たる回転糸切り痕が残る部分に墨書がある。「菌」の国構えの右下の部分と思われる。

28は、口縁部から胴部にかけての破片で、内面は細いヘラでミガク。外面に、焼成後につけた刻書がある。アルファベットのFに似ており、ごく浅い沈線で描かれている。

29～32は皿である。29は、口縁部から底部にかけて2/3ほど復元できた。口径13.4cm、底径7.2cm、高さ2.1cmである。胴部の外面下縁は、回転ヘラケズリする。外底は、回転糸切りのままである。内面はミガかない。30は口縁部から底部にかけて1/4ほどの破片で、口径推定13.3cm、底径推定7.5cm、高さ3.0cmである。胴部の外面下縁は、回転ヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面は、細いヘラでミガク。31は、口縁部から底部にかけて1/3ほど復元できた。底部は完存する。口径推定13.2cm、底径7.4cm、高さ3.0cmである。胴部の外面下縁は、回転ヘラケズリする。外底は、回転糸切りの後、外周を回転ヘラナデする。口縁部から底部にかけての内面は細いヘラでミガク。胴部の外面に「菌」の墨書がある。

32は口縁部から胴部にかけての破片である。口径推定13.6cmである。内面は、細いヘラでミガク。胴部の外面に焼成後につけた「本」の刻書がある。底を上交口縁を下にする。「本」の刻書は、前述のように、大型の土師器の甕の底に焼成前にヘラでつけたものが、歴史時代6号住居跡で2点、この同じ7号住居跡で1点出土している。

33は鉢で、口縁部から胴部にかけて1/16ほどの破片である。口径推定22.0cm、最大径推定22.8cmである。歴史時代6号住居跡の43よりは薄手である。外面は、細いヘラでミガク。内面は丁寧にナデと思われる。

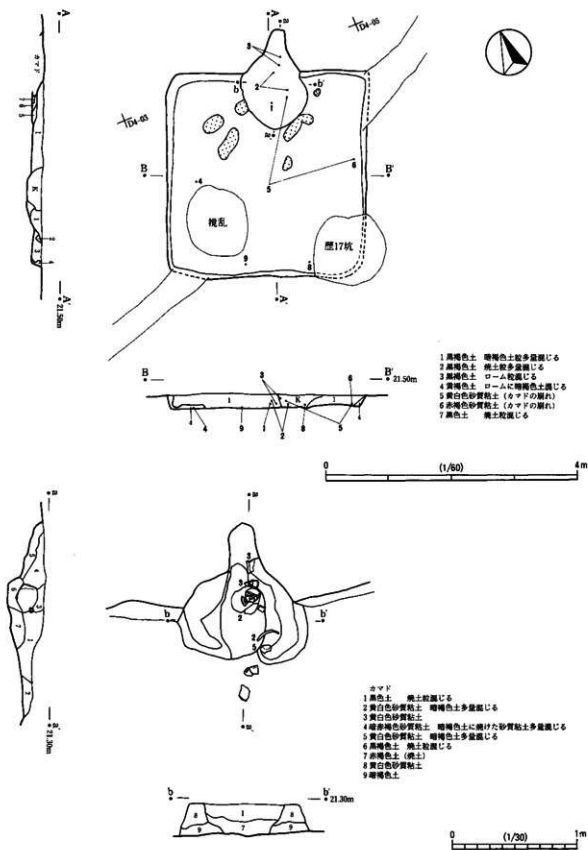
34～36は鉄製品である。34は刀子の身から柄にかけてで、現存長13.0cmである。所々木質の痕跡が残る。35は棒状の破片で、現存長3.3cmである。36も同様のもので、現存長2.6cmである。35と36は同一個体かとも思われるが、35の断面が円形に近く、36の断面が方形と思われるので、別個体として扱った。

37は、軽石である。茶色がかった白色である。長さ3.4cm、幅2.7cm、厚さ1.3cm、重さ4.1gである。

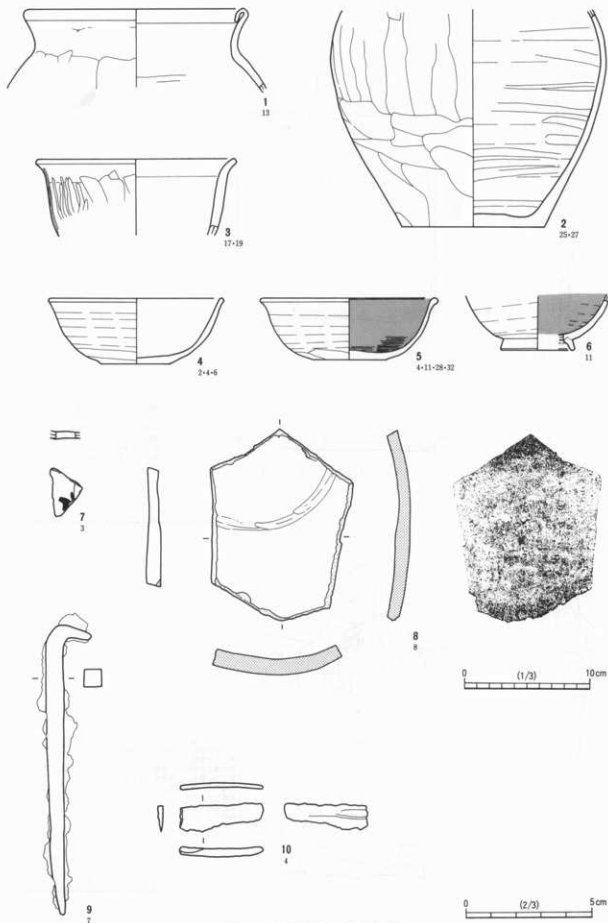
8号住居跡(旧021 第46・47図、図版11・12・30・33)

位置・形状

D4グリッドの北側にあり、D3グリッドにわずかにかかる。南側の隅を歴史時代17号土坑に壊されて



第46図 歴史時代8号住居跡遺構



第47図 歴史時代8号住居跡遺物

いる。北東側の隅と南西側の隅を溝に壊されている。南西側に攪乱がある。

平面は方形で、一辺3.2m、深さ20cmである。柱穴等ない。カマドは北東側の壁の中ほどにある。暗褐色土で基盤をつくった上に黄白色砂質粘土でつくられている。左右の袖が残る。

カマドの周辺で粘土塊が5か所から発見された。カマドからまともな土器片が出土した。

出土遺物

土師器の甕・甔・坏、須恵器片を転用した磁石、鉄製品、銅製品が出土した。

1は大型の甕の口縁部から胴部にかけて1/4ほどの破片である。口径推定17.2cmである。口縁は、外側から内側へ折り返す。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。口縁部の外面に接合痕が残る。2も大型の甕で、胴部から底部にかけて3/4ほど復元できた。底部は完存である。最大径推定22.0cm、底径11.4cmである。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はロクロの回転を使って、指とヘラで横方向にナデて成形する。底部は、外底は回転糸切りの後、外周を手持ちヘラケズリする。内底はナデる。

3は甔で、口縁部から胴部にかけて1/4ほど復元できた。口径推定15.6cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面は火熱によると思われる剥落のために調整方法が不明である。

4～6は坏である。4は口縁部から底部にかけて1/3ほど復元できた。底部は完存する。口径推定13.7cm、底径5.4cm、高さ5.2cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は、回転糸切りの後、回転ヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面は、細いヘラでミガク。5は口縁部から底部にかけて1/4ほど復元できた。底部は完存する。口径推定13.8cm、底径5.9cm、高さ4.9cmである。胴部外面の下縁は手持ちヘラケズリする。外底も手持ちヘラケズリする。口縁部から底部にかけての内面は、黒色処理した後に細いヘラでミガク。6は高台付で、胴部から台にかけて1/4ほどの破片である。台の底径は推定6.0cmである。底部の外面の下縁は回転ヘラケズリする。高台の付け根は、外面は回転ヘラナデし、内面は回転ヘラナデツケする。胴部から底部にかけての内面は、黒色処理する。

7は、坏の底部の破片で、外底は回転糸切り痕が残る。その外底に墨書がある。字と思われるが、同定できない。

8は、須恵器の大型の甕の破片を転用したと思われる磁石である。図の左側の割れ口が磨耗する。長さ14.9cm、幅11.3cm、厚さ1.0cm、重さ287.0gである。外面は灰色がかった赤褐色で、内面は灰色である。長石の混入が目立つ。堅い焼き上がりである。

9は、鉄製の釘である。長さ11.4cmである。

10は、銅製の容器の口縁部の破片と思われる。図の左右方向がゆるく湾曲している。長さ3.3cm、幅1.0cm、厚さ0.2cmである。

このほか図版33に示した鉄滓が出土した。長さ8.0cm、幅5.9cm、厚さ2.2cm、重さ117.0gである。

9号住居跡 (旧115 第48図、図版12・30・31)

位置・形状

F3グリッドの中央からやや西側にある。住居跡の南東側2/3ほどは調査範囲外にある。

平面は、まわりの住居跡がいずれもそうであることから、方形に近いと思われる。規模は、これもまわりの住居跡から推定して、一辺3m～4mと思われる。深さは50cmである。壁に沿って溝がある。柱穴はな

い。西側の壁際に貯蔵穴がある。また、北側の壁に沿って小穴がある。カマドは、北側の壁の中ほどにある。黄白色砂質粘土でつくられている。左右の袖が残る。

出土遺物

土師器の甕・坏、石製紡錘車が出土した。

1は大型の甕で、口縁部から底部にかけて1/2ほど復元できた。口径19.4cm、最大径推定23.4cm、底径推定4.6cm、高さ27.9cmである。底部は、小さい上に外側に少しふくらむため、器は不安定である。口縁部は外面・内面ともヨコナデする。胴部から底部にかけては、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。胴部の外面に土の付着が目立つ。

2は坏の口縁部から底部にかけて1/4ほどの破片で、口径推定13.8cm、底径推定9.2cm、高さ4.3cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部から底部にかけては、外面は手持ちヘラケズリし、内面はナデる。胴部と底部の内面側の境には、ヘラで境目をつける。

3は滑石製の紡錘車である。濃い青色である。上面径4.1cm、下面径3.1cm、厚さ1.8cm、重さ55.8gである。上面・下面・側面のいずれの面も細かな擦痕が多数ある。

第2節 掘立柱建物跡

1号掘立柱建物跡 (旧H-001 第49・50図、図版12・31・33)

位置・形状

D3グリッドの北東側にあり、2号掘立柱建物跡と重複する。両方の間の新旧関係は、柱穴が切り合わないため、わからない。東側の3基の柱穴は、後世の溝に壊されている。

平面は、長方形の2間×3間で、棟の方向は、ほぼ東西である。梁方向3.5m、棟方向5.5mである。

4柱穴は、2基の穴が切り合うが、その新旧関係は不明である。10柱穴の覆土は、上半分は黒色土で、下半分は西側がロームが多量に混じる黄褐色土、東側がロームが少量混じる暗褐色土である。

出土遺物

1は土師器の坏で、口縁部から胴部にかけて1/4ほど復元できた。口径推定11.6cmである。胴部の外面下縁はヘラケズリする。手持ちか回転かは不明である。2柱穴から出土する。

2も土師器の坏で、口縁部の破片である。内面はミガク。外面に墨書がある。「蘭」の上部と思われる。墨痕は薄い。割れ口が少し磨耗する。5柱穴から出土した。3も土師器の坏の破片と思われる。外面に墨書がある。同定はできない。これも5柱穴から出土した。

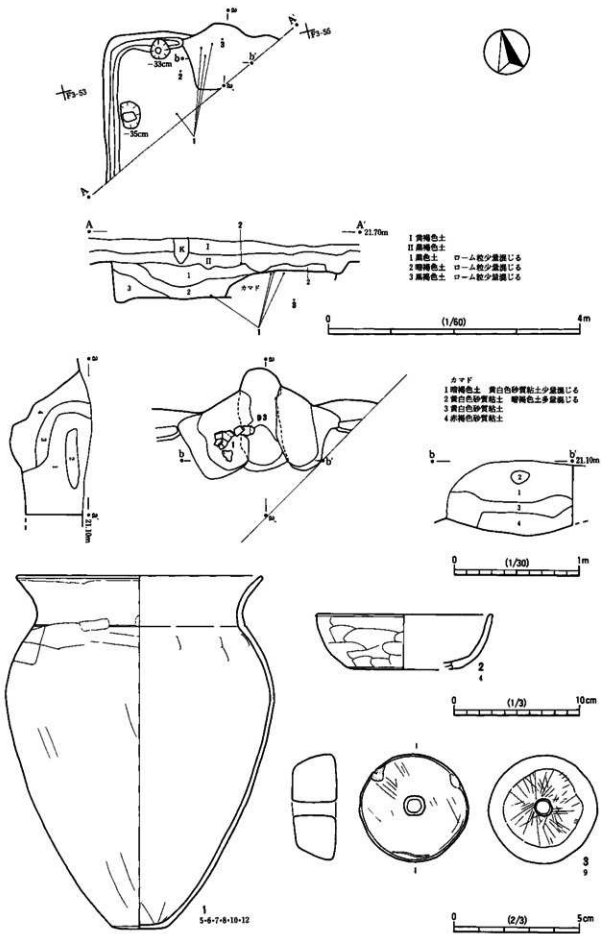
4は、銅製の巡方である。縦3.4cm、横3.6cm、厚さ0.6cm、重さ15.2gである。背面の四隅に付されることの多い突起は、3か所しかない。全体に錆が浮く。図の上方の背面の縁には、切られた痕がある。3柱穴から出土した。

2号掘立柱建物跡 (旧H-002 第51・52図、図版13・31)

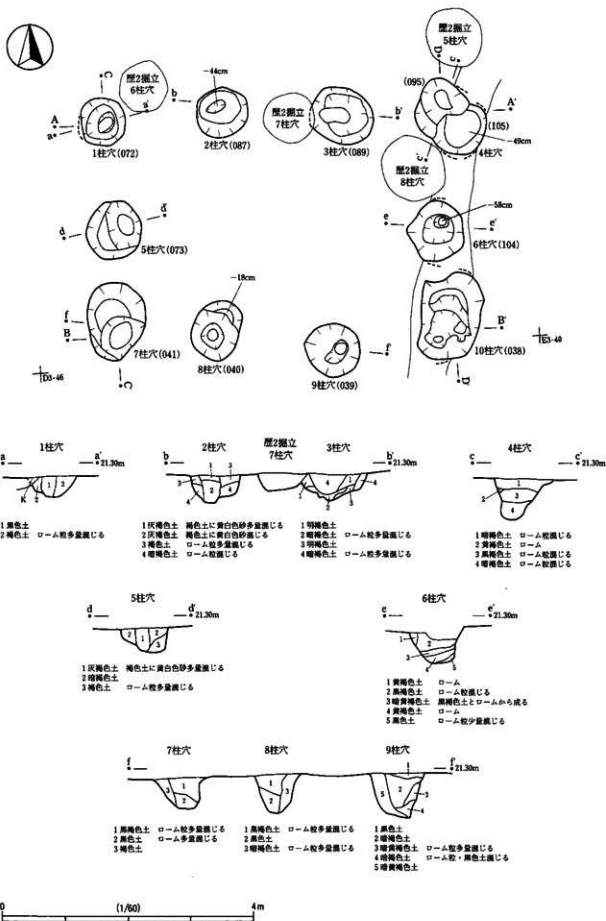
位置・形状

D3グリッドの北東側の隅にあり、D2グリッドにわずかにかかる。1号掘立柱建物跡と重複する。歴史時代3号住居跡の南西側の壁を壊す。

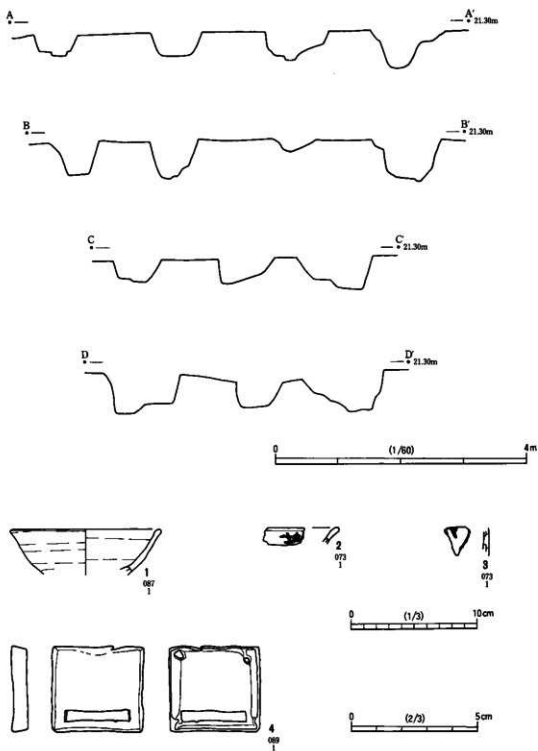
平面は、方形の2間×2間で、一辺4.2mである。梁または棟の方向は、東西南北の向きから30°前後振れる。



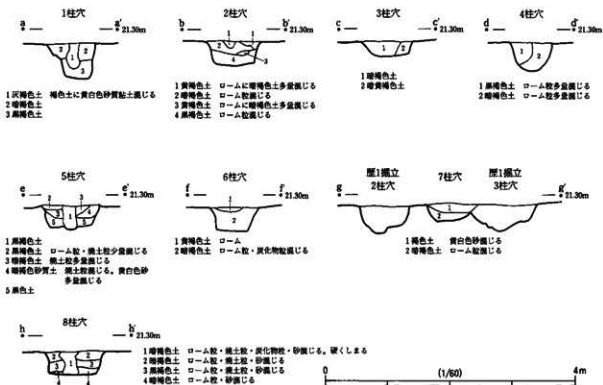
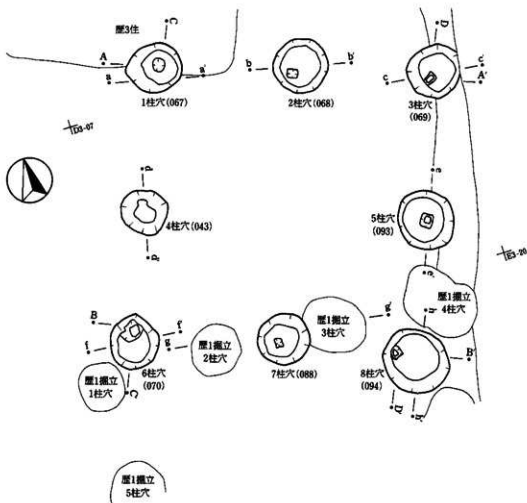
第48図 歴史時代9号住居跡遺構・遺物



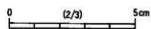
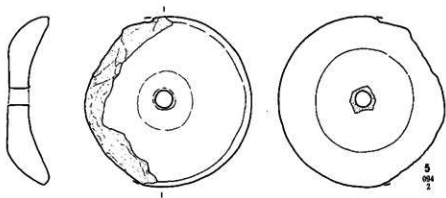
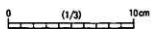
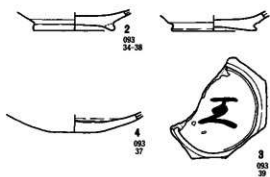
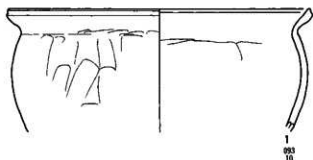
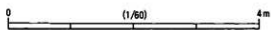
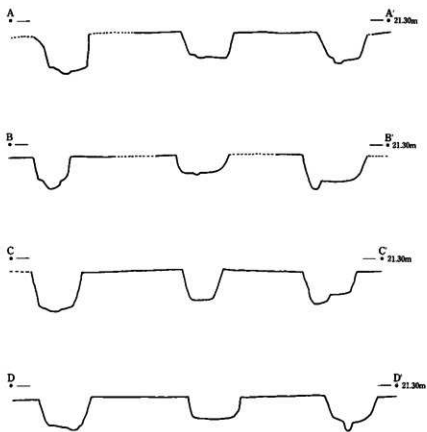
第49図 歴史時代1号掘立柱建物跡遺構 (1)



第50图 历史时代1号掘立柱建物迹遺構(2)・遺物



第51図 歴史時代2号掘立柱建物跡遺構(1)



第52図 歴史時代2号掘立柱建物跡遺構(2)・遺物

出土遺物

1は土師器の大型甕の口縁部から胴部にかけての1/8ほどの破片である。口径推定23.8cmである。口縁部は、外面・内面ともヨコナデする。胴部は、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。5柱穴から出土した。

2は高台付の皿で、底部の3/4ほど復元できた。底径6.4cmである。高台の付け根の外面・内面とも回転ヘラナデツケする。外底は回転糸切り痕が残る。内底はミガク。5柱穴から出土した。3は皿の胴部から底部にかけての1/2ほどの破片である。底径6.7cmである。胴部の外面下縁を回転ヘラケズリして、高台のように削り出す。外底は、回転糸切りの後、外周を回転ヘラナデする。胴部の内面から内底にかけては、細かいヘラでミガク。外底の中心から少しはずれたところに墨書がある。「王」かと思われる。墨痕は薄く、見づらい。5柱穴から出土した。4も皿で、胴部から底部にかけて1/3ほどの破片である。底部は完存する。底径4.0cmである。ロクロで成形する。胴部から底部にかけて、外面はヘラナデし、内面は細かいヘラでミガク。5柱穴から出土した。

5は土製の紡錘車である。外周の1/2ほどが欠ける。上面径6.7cm、下面径4.0cm、厚さ1.7cmである。上面は凹む。上面は、ヨコナデする。下面と側面は、ヘラケズリした後ナデる。孔は上面側から開ける。8柱穴から出土した。紡錘車でこれほど上面を凹ませて作る例は珍しい。

3号掘立柱建物跡 (旧H-003 第53・54図、図版13・31)

位置・形状

C3グリッドの北東側の隅からD3グリッドの北西側の隅にかかる。北西側の隅の柱穴は調査範囲外にあり、調査できていない。古墳時代4号住居跡を壊している。

平面は、長方形の2間×3間で、棟の方向は東西である。梁方向4.5m、棟方向6.8mである。

3柱穴は、歴史時代15号土坑と切り合うが、両者の新旧関係は不明である。4柱穴は2基の柱穴が切り合う。向い合う5柱穴との並び具合からすると、南側の柱穴がこの遺構のものであろう。北側の柱穴は、この遺構に重複している別の掘立柱建物跡のものになろう。9柱穴も2基の柱穴が切り合うが、その南側の柱穴の覆土は、ロームに暗褐色土が混じる黄褐色土である。

出土遺物

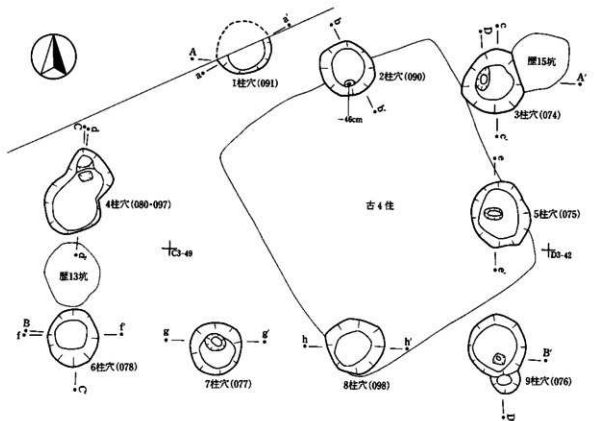
1は土師器の坏で、口縁部から底部にかけて1/3ほどの破片である。口径推定12.6cm、底径推定6.8cm、高さ3.8cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は、回転糸切りの後、外周を回転ヘラケズリする。胴部の外面に接合痕が残る。外底に焼成後につけたと思われる刻書がある。外底の中心で直線が直交するように思われる。4柱穴から出土した。

4号掘立柱建物跡 (旧H-004 第55・56図、図版13)

位置・形状

C3グリッドの南西側の隅からC4グリッドの北西側の隅にかかる。古墳時代12号住居跡と重複している。

平面は、長方形の2間×3間で、棟の方向は南北方向よりも30°前後東へ振れる。梁方向3.7m、棟方向4.8mである。

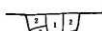


a — 1柱穴 — a' 21.30m



- 1 黒褐色土 暗褐色土混じる
- 2 黒色土 暗褐色土多量混じる
- 3 暗褐色土
- 4 黒色土 暗褐色土混じる
- 5 暗褐色土

b — 2柱穴 — b' 21.30m



- 1 黒褐色土 ローム散在する
- 2 暗褐色土 ローム散少量混じる
- 3 黒色土
- 4 暗褐色土

c — 3柱穴 — c' 21.30m



- 1 暗褐色土 ローム散在する
- 2 黒色土 ローム散少量混じる
- 3 暗褐色土 ローム散在する
- 4 黒色土 ローム散少量混じる

d — 4柱穴 — d' 21.30m



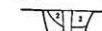
- 1 黄白色砂質土 砂と褐色土から成る
- 2 暗褐色土 ローム散少量混じる
- 3 黒褐色土 ローム散少量混じる
- 4 暗褐色土
- 5 黄褐色土 ローム
- 6 暗褐色砂質土 褐色土に黄白色砂少量混じる
- 7 黒褐色土
- 8 黄褐色土 ローム
- 9 黒色土
- 10 黄白色砂質土 砂と褐色土から成る
- 11 黄褐色土 ロームに暗褐色土少量混じる
- 12 暗褐色土 ローム散在する
- 13 暗褐色土 ローム散在する
- 14 黒色土
- 15 暗褐色土

e — 5柱穴 — e' 21.30m



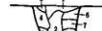
- 1 黄褐色土 ロームに黒褐色土少量混じる
- 2 暗褐色土 ローム散少量混じる
- 3 黒褐色土 ローム散少量混じる
- 4 黒色土

f — 6柱穴 — f' 21.30m



- 1 黒色土
- 2 暗褐色土 ローム散在する
- 3 褐色土 ローム散少量混じる

g — 7柱穴 — g' 21.30m

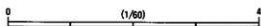


- 1 黒褐色土
- 2 暗褐色土
- 3 暗黄褐色土 ロームと黒色土から成る
- 4 黒色土
- 5 黄褐色土 ロームに褐色土少量混じる
- 6 黒色土 ローム散少量混じる
- 7 暗黄褐色土 ロームと黒色土から成る
- 8 黒褐色土 ローム散少量混じる
- 9 黄褐色土 ロームに黒色土少量混じる

h — 8柱穴 — h' 21.30m



- 1 暗褐色土 ローム散少量混じる
- 2 黒褐色土 ローム散少量混じる
- 3 黒色土
- 4 暗黄褐色土 ロームと黒色土から成る
- 5 暗黄褐色土 ロームに褐色土混じる
- 6 黒色土 ローム散在する
- 7 黒褐色土



第53図 歴史時代3号掘立柱建物跡遺構(1)

出土遺物

1は土師器の環で、胴部から底部にかけて3/4ほどの破片である。底部は完存する。底径6.8cmである。胴部の外面下縁は回転ヘラケズリする。外底は回転ヘラケズリする。胴部から底部にかけての内面は、細いヘラでミガク。3柱穴から出土した。

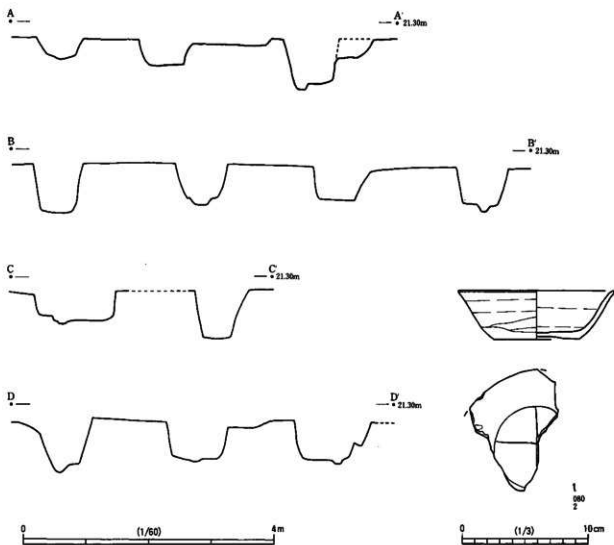
第3節 土坑

1号土坑 (旧002 第57図、図版14)

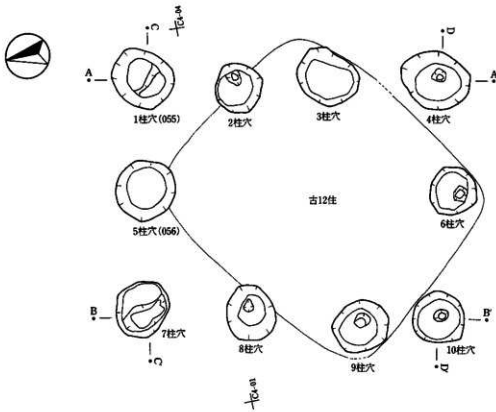
F2グリッドの南側の縁にあり、古墳時代1号住居跡の北西側の壁を壊している。平面は楕円形で、長軸1.7m、短軸1.1m、深さ80cmである。歴史時代の土師器片、須恵器片が出土したほか、縄文土器片も出土したが、図示できるものはない。

2号土坑 (旧030 第57図、図版14)

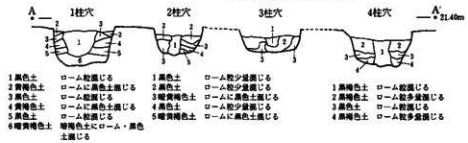
F2グリッドの南西側にある。平面は楕円形で、長軸1.8m、短軸0.9m、深さ50cmである。歴史時代の土



第54図 歴史時代3号掘立柱建物跡遺構(2)・遺物



- 1 暗褐色土 ロームに黒色土混じる
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混じる
- 3 暗褐色土 ロームに黒色土混じる



- 1 黒色土 ローム粒混じる
- 2 黄褐色土 ロームに黒色土混じる
- 3 黒色土 ローム粒混じる
- 4 黄褐色土 ロームに黒色土混じる
- 5 黒色土 ローム粒混じる
- 6 暗褐色土 暗褐色土にローム、黒色土混じる

- 1 黒色土 ローム粒少量混じる
- 2 黒色土 ローム粒少量混じる
- 3 暗褐色土 ロームに黒色土混じる
- 4 黒色土 ローム粒少量混じる
- 5 暗褐色土 ロームに黒色土混じる

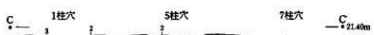
- 1 黒褐色土 ローム粒混じる
- 2 黒褐色土 ローム粒少量混じる
- 3 黒色土 ローム粒混じる
- 4 暗褐色土 ローム粒少量混じる



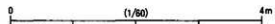
- 1 黒褐色土 ローム粒少量混じる
- 2 黄褐色土 ロームに黒褐色土混じる
- 3 黄褐色土 ローム粒少量混じる
- 4 黄褐色土 ロームに黒褐色土混じる
- 5 黒色土

- 1 暗褐色土 ローム粒少量混じる
- 2 黒色土
- 3 暗褐色土 ロームに黒褐色土少量混じる
- 4 暗褐色土
- 5 黒色土

- 1 黒褐色土 ローム粒少量混じる
- 2 暗褐色土 ローム粒少量混じる
- 3 黒色土 ローム
- 4 黒色土



- 1 黒色土 ローム粒混じる
- 2 黄褐色土 ロームに黒色土混じる
- 3 黒色土 ローム粒混じる
- 4 暗褐色土 ロームに黒色土混じる
- 5 黒色土 ローム粒混じる



第55図 歴史時代4号掘立柱建物跡遺構(1)

師器片が出土したほか、古墳時代の土師器片も出土したが、図示できるものはない。

3号土坑 (旧032 第57図、図版14)

E 2グリッドの東側にある。土坑の北側の部分は調査範囲外にあり、調査できてなかった。古墳時代2号住居跡の北西側の壁を壊している。平面は、北側が不明であるが、楕円形と思われる。長軸2.3m以上、短軸2.3m、深さ20cmである。歴史時代の土師器片が出土したほか、古墳時代の土師器片も出土したが、図示できるものはない。

4号土坑 (旧034 第57図、図版14)

E 3グリッドの中央からやや北側にある。平面は円形で、直径1.0m、深さ30cmである。出土遺物はない。

5号土坑 (旧035 第57図、図版14)

E 3グリッドの北西側にある。平面はほぼ円形で、直径1.2m、深さ30cmである。出土遺物はない。

6号土坑 (旧036 第57図、図版14)

E 2グリッドの南西側の隅近くからE 3グリッドの北西隅にかかる。古墳時代3号住居跡の北側の隅を壊している。平面は楕円形で、長軸1.4m、短軸1.1m、深さ50cmである。出土遺物はない。

7号土坑 (旧037 第57図)

E 3グリッドの南西側にある。平面は円形で、直径0.7m、深さ40cmである。土層断面は、柱や杭のようなものが、立てられていたことを示すが、周囲にはほかに同様の土坑はない。歴史時代の土師器片が出土したほか、古墳時代の土師器片も出土したが、図示できるものはない。

8号土坑 (旧044 第57図)

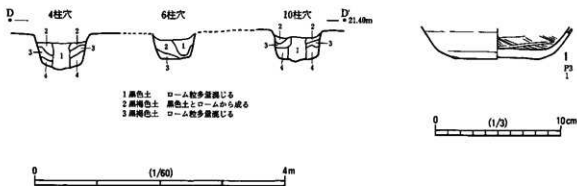
D 3グリッドの北側の縁にある。調査範囲の縁にも近い。平面は円形で、直径0.9m、深さ50cmである。歴史時代の土師器片・須恵器片が出土したほか、古墳時代の土師器片、縄文土器片も出土したが、図示できるものはない。

9号土坑 (旧045 第58図、図版14)

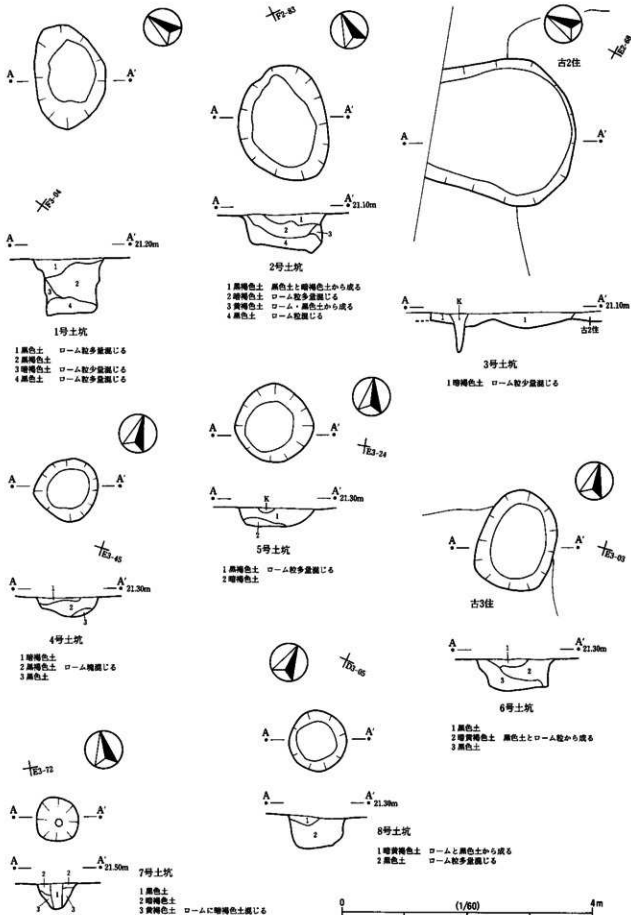
D 3グリッドの中央からやや西側にある。平面は円形で、直径1.0m、深さ20cmである。出土遺物はない。

10号土坑 (旧047 第58図、図版14)

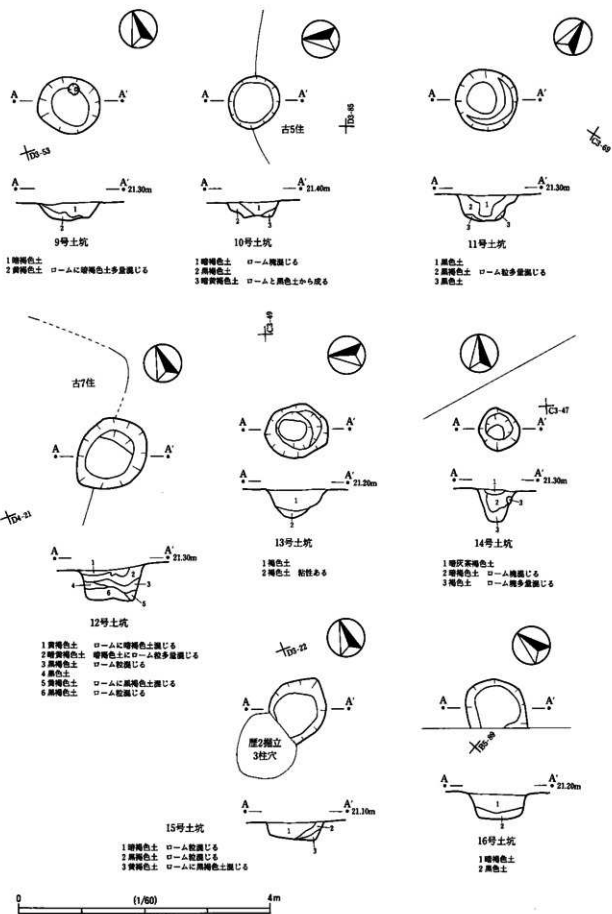
D 3グリッドの南側にある。古墳時代5号住居跡の北側の壁を壊している。平面はほぼ円形で、直径0.8m、深さ20cmである。歴史時代の土師器片が出土したが、図示できるものはない。



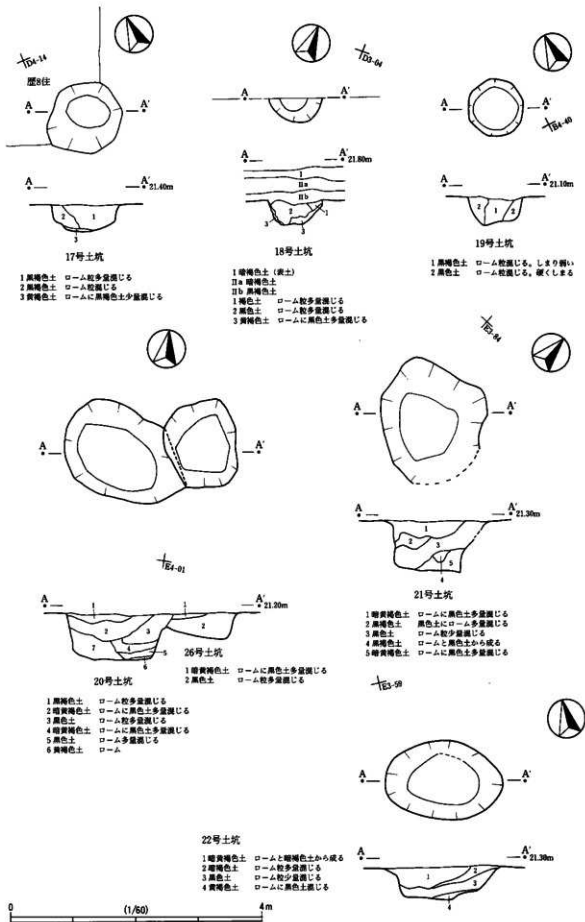
第56図 歴史時代4号掘立柱建物跡遺構(2)・遺物



第57図 歴史時代土坑 (1)



第58図 歴史時代土坑 (2)



第59図 歴史時代土坑 (3)

11号土坑 (旧051 第58図、図版15)

C 3グリッドの東側にある。平面は円形で、直径1.0m、深さ40cmである。土層断面は、柱や杭のようなものが、立てられていたことを示す。出土遺物はない。

12号土坑 (旧053 第58図、図版15)

D 4グリッドの北西側にあり、古墳時代7号住居跡の南東側の壁を壊している。平面はほぼ円形で、直径1.1m、深さ50cmである。歴史時代の土師器片が出土したほか、古墳時代の土師器片、縄文土器片も出土したが、図示できるものはない。

13号土坑 (旧079 第58図、図版13)

C 3グリッドの東側にある。歴史時代3号掘立柱建物跡の西側の柱穴の列の間にあるが、柱穴とは、形状、覆土がちがう。平面は楕円形で、長軸1.1m、短軸0.8m、深さ40cmである。出土遺物はない。

14号土坑 (旧081 第58図)

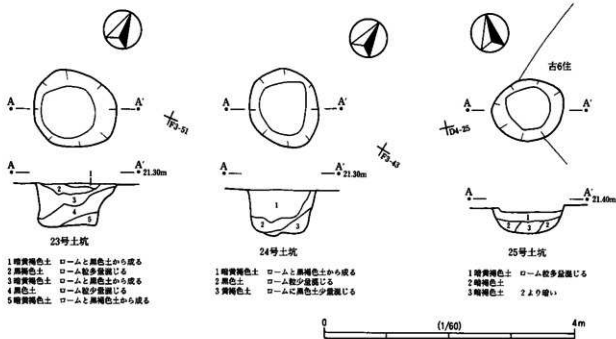
C 3グリッドの東側にある。調査範囲の北側の縁にある。平面は円形で、直径0.6m、深さ50cmである。出土遺物はない。

15号土坑 (旧096 第58図、図版13)

D 3グリッドの北西側の隅にあり、歴史時代3号掘立柱建物跡の3柱穴と切り合う。新旧関係は不明である。平面は、3柱穴との切り合いで不明な部分があるが、ほぼ円形と思われる。直径0.9m、深さ30cmである。出土遺物はない。

16号土坑 (旧100 第58図、図版15)

B 5グリッドの南東側の隅にあり、古墳時代10号住居跡と重複している。土坑の南西側の部分が、調査



第60図 歴史時代土坑 (4)

範囲外にあり、調査できなかった。平面は、調査範囲外の部分が不明であるが、円形と思われる。直径0.9mほど、深さ40cmであろう。出土遺物はない。

17号土坑 (旧103 第59図、図版11)

D 4グリッドの北西側にあり、歴史時代8号住居跡の南側の隅を壊している。平面はほぼ円形で、直径1.1m、深さ40cmである。出土遺物はない。

18号土坑 (旧108 第59図)

D 3グリッドの北側の縁にある。土坑の北側の部分は調査範囲外にあり、調査できなかった。平面は円形と思われる。直径0.9m、深さ30cmになろう。出土遺物はない。

19号土坑 (旧109 第59図、図版15)

A 4グリッドの東側の縁にある。平面は円形で、直径0.9m、深さ40cmである。土層断面は、柱や杭のようなものが、立てられていたことを示す。出土遺物はない。

20号土坑 (旧110 第59図、図版15)

E 3グリッドの南西側の隅にある。歴史時代26号土坑を壊している。平面は楕円形で、長軸2.1m、短軸1.4m、深さ70cmである。歴史時代の土師器片が出土したほか、古墳時代の土師器片、縄文時代の焼礫片が出土したが、図示できるものはない。

21号土坑 (旧111 第59図、図版15)

E 3グリッドの南側にある。平面は楕円形で、長軸2.2m、短軸1.5m、深さ80cmである。歴史時代の土師器片が出土したほか、古墳時代の土師器片、縄文時代の礫片が出土したが、図示できるものはない。

22号土坑 (旧112 第59図、図版15)

E 3グリッドの東側にある。平面は楕円形で、長軸1.8m、短軸1.3m、深さ50cmである。縄文土器片が出土した。

23号土坑 (旧113 第60図、図版16)

F 3グリッドの西側にある。平面は楕円形で、長軸1.4m、短軸1.2m、深さ60cmである。歴史時代の土師器片が出土したほか、古墳時代の土師器片が出土したが、図示できるものはない。

24号土坑 (旧114 第60図、図版16)

F 3グリッドの西側にある。平面は楕円形で、長軸1.3m、短軸1.1m、深さ70cmである。歴史時代の土師器片が出土したが、図示できるものはない。

25号土坑 (旧116 第60図、図版16)

D 4グリッドの北東側にある。古墳時代6号住居跡の西側の隅を壊している。平面は楕円形で、長軸1.2m、短軸1.0m、深さ40cmである。歴史時代の土師器片が出土したが、図示できるものはない。

26号土坑 (旧118 第59図、図版15)

E 3グリッドの南西側にある。歴史時代20号土坑に西側を壊されている。平面は楕円形で、長軸1.4m、短軸1.2m以上である。出土遺物はない。

第4節 遺構外出土の遺物 (第61図、図版31~33)

土師器の甕・坏、磁石、鉄製品が出土した。

1は土師器の大型甕の口縁部から頸部にかけての1/10ほどの破片である。口径推定22.8cmである。外面・

内面ともヨコナデする。内面のくびれのところに接合痕が残る。2は土師器の小型甕の胴部から底部にかけて1/6ほどの破片で、底径推定7.5cmである。胴部から底部にかけて、外面はヘラケズリし、内面はヘラナデする。

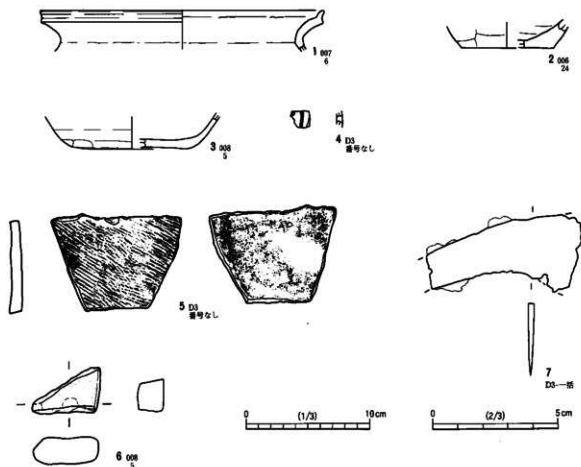
3は土師器の坏の胴部から底部にかけて1/3ほどの破片である。底径推定9.2cmである。胴部の外面下縁は手持ちヘラケズりする。外底は、回転糸切りの後、外周を手持ちヘラケズりする。胴部から底部にかけての内面は剝落が目立つが、ナデと思われる。4は坏の胴部の破片と思われる。外面に墨書がある。「蘭」の右側の一部かと思われる。

5は須恵器の甕のものと思われる破片を転用した砥石である。左側の外面を上にした平面図の左側にあたる割れ口が、図で示すように磨耗する。長さ7.0cm、幅10.2cm、厚さ0.8cm、重さ85.7gである。外面は淡灰色、内面は明褐色で、雲母の混入が目立つ。軟らかい焼き上がりである。

6は灰褐色の砂岩の砥石片である。幅5.0cm、厚さ2.0cm、重さ51.6gである。図の上面・下面・右側面が磨耗する。

7は鉄製の鎌である。柄に付ける基部のあたりの破片で、現存長さ6.2cmである。

このほか図版33に示すように、鉄滓が2点出土する。C4区出土のものは、長さ4.5cm、幅4.0cm、厚さ2.9cm、重さ39.9gである。D3区出土のものは、長さ9.0cm、幅9.0cm、厚さ3.0cm、重さ291.0gである。



第61図 遺構外出土歴史時代遺物

第5章 まとめ

第1節 遺跡の変遷

ここまで述べてきたように、島田込ノ内遺跡は、旧石器時代、縄文時代、古墳時代、歴史時代の各時代の遺跡である。それぞれの時代の遺構の概要については、それぞれの時代についての章ごとの冒頭で述べてある。ここでは、前述の各時代ごとに、その遺構と遺物についてまとめる。

旧石器時代は、石器集中や礫群のような遺構はなかった。F2-72グリッドでIII層から黒曜石の剥片が1点出土した。

縄文時代も、住居跡、土坑そのほかの遺構はなかった。遺物は、早期から後期までの土器が出土し、早期の条痕文系と前期の繊維系が目立つほか、石器は、石斧・石鏃・敲石ほかが出土した。このほか焼礫が、古墳時代、歴史時代の住居跡の覆土などから出土した。

弥生時代末の時期から古墳時代前期にかけては、合せて12軒の住居跡が発見された。5号住居跡で出土した一群の土器は、内容が豊富で良好な資料である。

各住居跡の時期を出土した土器から推定すると、1号住居跡・2号住居跡は4世紀、3号住居跡は3世紀後半～4世紀前半、4号住居跡は4世紀、5号住居跡は3世紀、6号住居跡・7号住居跡は3世紀後半～4世紀前半、8号住居跡は4世紀、9号住居跡は4世紀前半、10号住居跡は3世紀後半～4世紀前半、11号住居跡は4世紀前半、12号住居跡は4世紀であると思われる。資料の多少もあって、細かくは推定できない住居跡がある。

奈良時代から平安時代にかけては、合せて9軒の住居跡と4棟の掘立柱建物跡が発見された。また、前述のように6号住居跡・7号住居跡を中心に、墨書土器50点、刻書土器12点が出土した。

各住居跡と掘立柱建物跡の時期を出土する土器から推定すると、1号住居跡は8世紀後半～9世紀前半、2号住居跡は9世紀、3号住居跡は8世紀後半～9世紀前半、4号住居跡は8世紀後半、5号住居跡は9世紀前半、6号住居跡・7号住居跡は9世紀後半、8号住居跡は9世紀後半～10世紀前半、9号住居跡は8世紀後半～9世紀前半であると思われる。1号掘立柱建物跡～4号掘立柱建物跡は、いずれも9世紀後半であると思われる。

第2節 文字資料と紡錘車

1 文字資料

遺跡から出土する文字資料を、墨書と刻書に分けて遺構ごとにまとめて表にすると、次頁ようになる。墨書は総数49点、刻書は総数12点である。歴史時代の住居跡は9軒あるが、そのうちの6号住居跡と7号住居跡の2軒から大多数が出土した。6号住居跡からは墨書23点、刻書4点が出土し、7号住居跡からは墨書18点、刻書3点が出土した。7号住居跡については、さらに、7号住居跡がその一部を壊してつくられている古墳時代6号住居跡から出土する3点の墨書も、含めるべきと思われる。6号住居跡と7号住居跡以外の遺構からは、ごくわずかしか出土していない。

出土する墨書、刻書は周囲が欠けている例が少なくないので断定はできないが、字を記す墨書、刻書の

第1表 墨書資料一覧

番号	积	文	器種	部位・方向	遺構	出土状況	挿図番号	図版番号	備考
1	田カ		坏	外壁・横カ	歴6住	覆土	第41図7	図版24	
2	万		坏	外壁・正	歴6住	床面	8	図版25	
3	不明		坏	外壁・正カ	歴6住	覆土	9		
4	蓋		坏	外壁・正	歴6住	覆土	12		
5	万ト土万カ寺カ		坏	外壁・正	歴6住	覆土	18		
6	佐人カ		坏	外壁・斜	歴6住	床面	20	図版26	
7	万カ		坏	外壁・正カ	歴6住	一括	23		
8	万		坏	外壁・正	歴6住	覆土	24		
9	不明		坏	外壁・不明	歴6住	覆土	25		
10	万カ		坏	内底・一	歴6住	一括	26		
11	什カ		坏	内底・一	歴6住	床面	27		
12	蓋		坏	外壁・正	歴6住	一括	28		
13	蓋カ		坏	外壁・正カ	歴6住	一括	29		
14	蓋カ		坏	外壁・斜カ	歴6住	一括	30		
15	因カ		坏	外壁・正	歴6住	一括	第42図31		
16	入カ		坏	外壁・正カ	歴6住	一括	32		
17	田カ		坏	外壁・正カ	歴6住	一括	33		
18	不明		坏	外壁・不明	歴6住	一括	34		
19	不明		坏	外底・不明	歴6住	一括	37	図版27	
20	蓋		皿	内底・一	歴6住	覆土	38		
21	佐		皿	内底・一	歴6住	覆土	39		
22	不明		皿	外壁・不明	歴6住	一括	41		
23	不明		皿	外壁・不明	歴6住	一括	42		
24	不明		壺カ	外壁・不明	古6住	覆土	第17図3		歴7住か
25	不明		壺	外壁・斜カ	古6住	覆土	4		歴7住か
26	蓋カ		坏	外壁・正カ	古6住	一括	5		歴7住か
27	仁		坏	外壁・正	歴7住	覆土	第44図9	図版28	
28	蓋		坏	外壁・正	歴7住	覆土	12		
29	蓋		坏	外壁・正	歴7住	覆土	13	図版29	
30	蓋		坏	外壁・正	歴7住	覆土	14		
31	蓋カ		坏	外壁・不明	歴7住	一括	15		
32	蓋カ		坏	外壁・正	歴7住	覆土	第45図16		
33	仁		坏	外壁・正	歴7住	一括	17		
34	蓋カ		坏	外壁・不明	歴7住	一括	18		
35	蓋		坏	外壁・正	歴7住	一括	19		
36	不明		坏	外壁・不明	歴7住	カマド	20		
37	不明		坏	外壁・不明	歴7住	一括	21		
38	不明		坏	外壁・不明	歴7住	一括	22		
39	蓋		坏	外壁・不明	歴7住	一括	23		
40	有		坏	外壁・斜	歴7住	覆土	24		
41	不明		坏	外壁・不明	歴7住	一括	25		
42	不明		坏	内底・一	歴7住	一括	26		
43	蓋		坏	外底・一	歴7住	一括	27		
44	蓋		皿	外壁・正	歴7住	覆土	31	図版30	
45	不明		坏	外底・一	歴8住	一括	第47図7		
46	蓋カ		坏	外壁・正	古12住	一括	第29図2		漏入
47	蓋カ		坏	外壁・正	歴1掘	柱穴	第50図2	図版31	
48	不明		坏	外壁・不明	歴1掘	柱穴	3		
49	王カ		皿	外底・一	歴2掘	柱穴	第52図3		

〈凡例〉

器種は、土師器だけで須恵器はないので、器形だけ記す。

部位は、文字、記号のある位置を記す。方向は、外壁にある場合について、口縁を上と見た場合を記す。方向の正位は正、横位は横、斜位は斜、逆位は逆と表す。

第2表 刻書資料一覧

番号	積	文	器種	部位・方向	遺構	出土状況	押図番号	図版番号	備考
1	不明		坏	外底・一	歴1住	覆土	第33図7	図版23	ヘラ
2	不明		坏カ	外壁・不明	歴3住	一括	第35図9		ヘラ
3	不明		坏	外底・一	歴5住	一括	第37図3		ヘラ
4	本		甕	外底・一	歴6住	覆土	第40図5	図版24	ヘラ
5	本		甕	外底・一	歴6住	床面	6		ヘラ
6	王カ		坏	内底・一	歴6住	一括	第42図35	図版26	線刻
7	不明		坏	内底・一	歴6住	一括	36		ヘラ
8	本		甕	外底・一	歴7住	覆土	第44図5	図版28	ヘラ
9	不明		坏	外壁・斜	歴7住	覆土	第45図28	図版29	線刻
10	本		皿	外壁・逆	歴7住	覆土	32	図版30	線刻
11	不明		皿	内底・一	古11住	一括	第28図9		線刻、墨入
12	不明		坏	外底・一	歴3掘	柱穴	第54図1	図版31	ヘラ

〈凡例〉

下記の点を除いて墨書資料一覧と同じである。

刻書のうち土器の焼成前に刻まれたものはヘラ、焼成後に刻まれたものは線刻とし、備考に記す。

ほとんどは、1字だけ記すと思われる。多くみえる字は、墨書では、「菌」、「万」、刻書では、「本」である。「菌」は、確実なもの10点、そうと思われるもの9点を合すると19点になる。「万」は、確実なもの3点、そうと思われるもの2点である。「本」は、ヘラ書きで3点、線刻で1点である。このほかに出土している文字は、墨書では、確実なものが「佐人」、「佐」、「仁」、「有」、「王」の5種類あり、このうち「有」は、数文字からなる文の一部の可能性があるとと思われる。また、おそらくそうと思われるものが「田」、「什」、「因」、「入」の4種類ある。さらに、これらのほかに、同定はできないが文字と思われるものがいくつかある。刻書では、「本」のほかに、「王」かと思われるものがある。そのほかは記号と思われる。

これらの墨書、刻書と同じものは、県内のほかの遺跡でも出土している。

墨書では、まず「菌」は、市原市の上総国分寺関連遺跡でのみ1点出土している。

「万」は、千葉市のムコアラク遺跡、船橋市の印内台遺跡、市川市の下総国分寺跡、八千代市の白幡前遺跡、佐倉市の江原台遺跡・寺崎遺跡群向原遺跡・寺崎遺跡群一本松遺跡・大崎台遺跡・宮本宮後遺跡、成田市の円妙寺遺跡・取香和田戸（空港№60）遺跡・宗吾西鷲山遺跡・大袋小谷津遺跡、栄町の龍角寺古墳群、印旛村の油作第2遺跡、印西市の鳴神山遺跡、下総町の名木庵寺跡、八日市場市の平木遺跡、大網白里町の大網山台遺跡群№3遺跡・大網山台遺跡群№4遺跡・大網山台遺跡群№6遺跡、袖ヶ浦市の永吉台遺跡群西寺原遺跡・境遺跡と広い範囲で出土している。

「佐人」、「佐」は、「佐」が成田市の外小代（LOC.40）遺跡、東金市の山田水呑遺跡で出土しているだけである。

「仁」は、千葉市の立木南遺跡・有吉遺跡、市川市の下総国文寺跡・和洋学園国分枝地遺跡・下総国分遺跡、八千代市の北海道遺跡、佐倉市の江原台遺跡、富里町の向台遺跡、佐原市の伊地山藤之台遺跡、袖ヶ浦市の永吉台遺跡群西寺原遺跡で出土している。

「王」は、墨書で我孫子市の羽黒前遺跡、印旛村の油作第2遺跡で出土している。刻書はないようである。なお、「王」の字には、よく似た字に「主」・「生」があり、この2字は県内の広い範囲で数多く出土するが、これら3字のどれに同定するか迷うものが少なくないように思われる。

「本」は、刻書で八千代市の村上込の内遺跡、佐倉市の寺崎遺跡群向原遺跡、成田市の新山I（LOC.1）

遺跡で出土し、墨書で鎌ヶ谷市の双賀辺田No1遺跡、佐倉市の寺崎遺跡群向原遺跡・寺崎遺跡群一本松遺跡・大崎台遺跡・臼井南遺跡渡戸A地点、成田市の外小代（LOC.40）遺跡、印旛村の油作第2遺跡、佐原市の磯花遺跡、八日市場市の平木遺跡、芝山町の庄作遺跡で出土している。刻書の場合は、3つの遺跡とも坏であり、島田込ノ内遺跡の甕の底部と同じ例はないようである。

なお、墨書の表の5にあげた左右2字からなる墨書のうち右側の判読できない字は「土万」とも読めそうであるが、似た墨書が成田市大袋小谷津遺跡で出土している。

さて、6号住居跡と7号住居跡は、出土する土器から時期が近いと思われるが、出土する墨書土器・刻書土器にも共通性が見られる。墨書土器では、「匱」の字が6号住居跡で5点、7号住居跡で10点（古墳時代6号住居跡出土のものを加えると11点になる）出土している。刻書土器では、「本」が、土師器の甕の底部にヘラ書きするもので、6号住居跡で2点、7号住居跡で1点出土している。

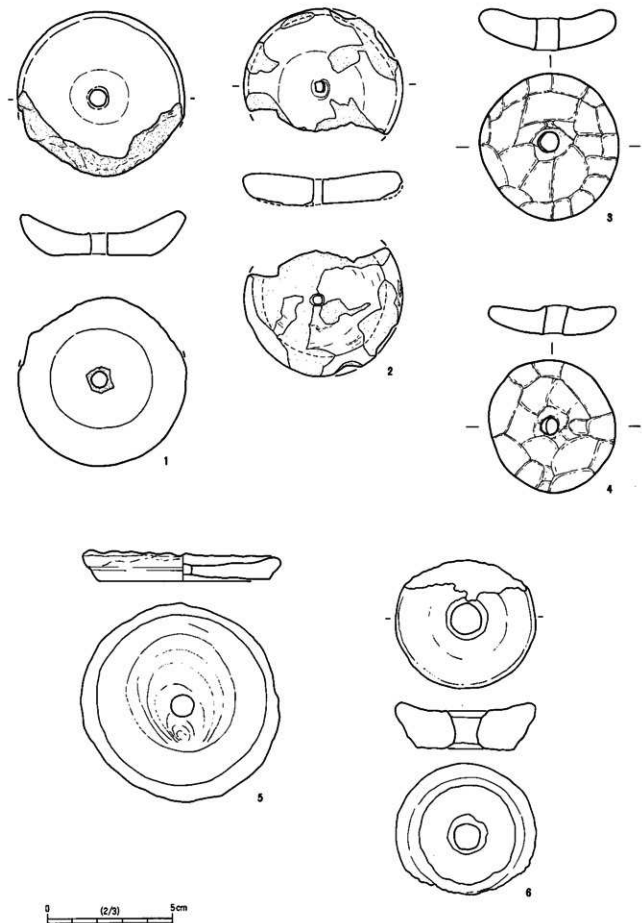
ただ、このような共通性は、2つの住居跡の住人が生活を共にしていたことまでは示さないとと思われる。2つの住居跡から出土する墨書土器の多くと刻書土器の全てが、破片であることから、ほかの住居跡などで使われていたものの破片が、隣接している6号住居跡と7号住居跡の双方に棄てられたことによるものと思われる。

2 紡錘車

前述のように、島田込ノ内遺跡では、奈良・平安時代の紡錘車が、石製1点と土製1点出土した。このうち石製である歴史時代9号住居跡から出土したものは、縦断面が逆台形の類である。ところが、土製である歴史時代2号掘立柱建物跡の柱穴の1基から出土したものは、きわめて珍しい形態を持つ。全体に扁平で、縦断面が逆ハの字形に近い。まるで底に孔のあいた浅い鉢のような形態である。実測図では下側に書かれる場合が多いが、紡錘車の上面は、糸を紡ぎ出す繊維の束を受ける必要から、径に大小があるときは、径の大きい方である。したがって、ここで注目する紡錘車は、繊維のかたまりを受ける上面が凹むのである。

同形の紡錘車が、島田込ノ内遺跡の周辺で出土していないか、発掘調査報告書によって探した。調査したのは、八千代市のほか、東葛飾地区のうち流山市・柏市・我孫子市・沼南町・松戸市・鎌ヶ谷市・市川市・船橋市、印旛地区の全市町村、千葉市、市原市、東金市、大網白里町である。古代の下総国のほぼ西半分と上総国の北部に当たる地域である。

結果は、つぎのようである。取り上げた紡錘車とまったく同じ形をしたものは、前述の地域では出土していない。そこで、全体に扁平で、上面が凹むという点で似た形をしたものを探してみると、いくつか挙げる事ができた。本遺跡の紡錘車も合わせて第62図に示す。なお、3～6は、報告書の挿図を改変してトレースし直したものである。1は島田込ノ内遺跡出土のものである。2は印旛郡印旛村の井戸向遺跡出土のものである。遺構からではなく、グリッド一括で時期が不明であるが、近くで瓦塔片や平安時代の土師器が出土するので、奈良・平安時代のものでよいと思われる。1にくらべると浅いが、上面が凹んでいる。かなり傷んでいるが、上面径6.4cm、下面径推定5.0cm、厚さ1.3cmである。上面は円形に側面は横方向に指でナデて、下面は回転ヘラケズりする。孔は円ではなくて方形で一辺0.4cmである。図は報告書からでなく、新たに実測したものである²⁾。3・4は、成田市の野毛平向山遺跡出土のものである。ともに002号住居址出土で、下面と側面の境がはっきりしていない。指で整形した後にヘラでナデるとのことである。3は最大径5.5cm、最大厚1.4cm、孔径0.9cm、4は最大径5.1cm、最大厚1.2cm、孔径0.8cmとのことである³⁾。



第62図 土製紡錘車集成図

さて、このような結果をもとにしたとき、島田込ノ内遺跡の紡錘車の位置をどう考えればよいのであろうか。島田込ノ内遺跡の紡錘車の上面の凹み方をどう評価するかがポイントになると思われる。紡錘車の上面が凹むことは、紡錘車にとって機能の上からは必ずしも必要ではないと思われる。凹んでいない例が、出現期に当たる弥生時代から古墳時代、奈良・平安時代まで圧倒的多数を占める。では、上面が凹む例が出てきた理由は、どう考えられるであろうか。その背景となるのは、土器片を転用した紡錘車がつくられるようになったことではないかと思われる。

紡錘車の材質は、時代とともに変化している。千葉県内での細かい様子は不明であるが、およその傾向として、弥生時代は、土製がほとんどで、古墳時代は、土製と石製が多く、奈良・平安時代になると土製・石製が多いが、鉄製が増え、土器片の転用品が目立ってくると考えてよいと思われる。

土器片を転用した紡錘車について、土器のどの部位の破片を使っているかを見てみると、坏の底部の破片を利用するものがある。第62図の5にそうした例を示す。八千代市村上込の内遺跡の051遺構からの出土である⁴⁾。坏の底部破片を利用する結果、紡錘車の上面が、坏の内底であった凹んだ面になる。土器片をこのように転用した紡錘車を真似て、上面が凹んだ土製の紡錘車が作られたと思われるのである。真似は各地でバラバラに行われたと思われる。第62図の1と2と3・4の形がちがうのはそのためと思われる。そして、真似てはみたものの機能に大きなちがいがないので、あまり作られなかったであろう。出土例が少ないのはそのためと思われる。

ひとまずこのように結論づけたのであるが、上面が凹む例は、取り上げた紡錘車のように扁平でない、土器の底部を真似たとするには分厚い類にもある。第62図の6に例を示す。東金市妙経遺跡のSK040の土坑から平安時代の土器と共に出土したものである⁵⁾。形の似たものは、確認トレンチからであるが柏市松ヶ崎泉遺跡からも出土している⁶⁾。これらについては、数がわずかなこと、扁平な類と時期が重なると思われることから、扁平な類の上面が凹んだものを真似たか、土器の底部破片を転用した紡錘車の内底の凹みを真似たと考えるとよいと思われる。

ここに取り上げた紡錘車が特異で例を見ないものであるということは、土製紡錘車の製作が、奈良・平安時代には、1つの村といった単位かそれよりも小さい単位で行われたことを示唆すると思われる。

注1 財団法人千葉県史料研究財団 1996『出土文字資料集成』（「千葉県の歴史 資料編 古代」別冊）

2 財団法人千葉県文化財センター 1995『一般国道464号県単道路改良事業埋蔵文化財調査報告書』

3 財団法人印旛郡市文化財センター 1990『ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書』

4 財団法人千葉県都市公社 1974『八千代市村上遺跡群』

5 財団法人千葉県文化財センター 1994『妙経遺跡・井戸谷9号墳』

6 柏市教育委員会 1992『柏市埋蔵文化財調査報告書20』

写 真 图 版



遠景 (南から)



近景 (南西から)



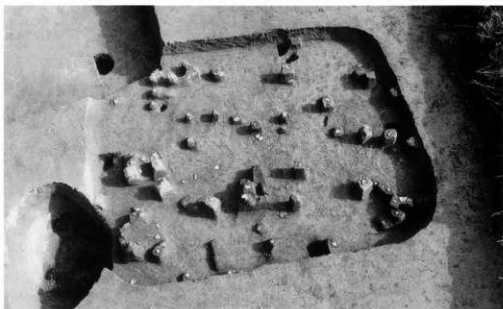
近景（北東から）



旧石器時代石器出土地点土層断面



古1住全景
(南東から)



古1住遺物
出土 (南西から)



古2住全景
(南西から)



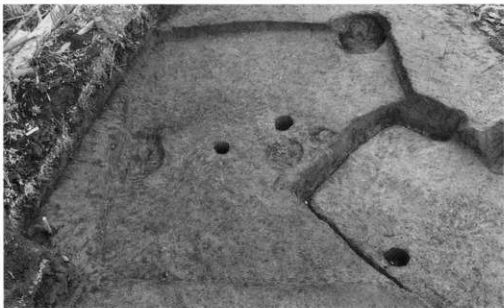
古3住全景
(南東から)



古4住全景
(南から)



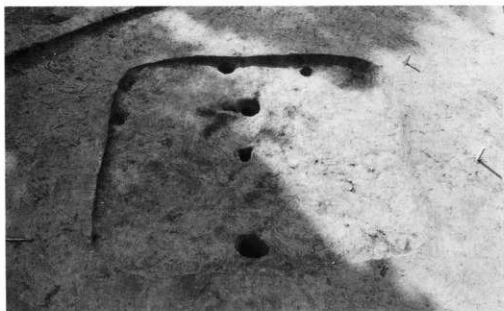
古5住全景
(西から)



古6住全景
(北東から)



古7住全景
(北東から)



古8住全景
(北東から)



古9住全景
(南西から)



古9住遺物出土
(南西から)



古10住全景
(北西から)

古10住遺物
出土（北西から）



古10住ハシゴ穴
竪出土
（南東から）



古11住全景
（北東から）





古12住全景
(南東から)



古1坑全景 (南から)



歴1住全景
(南西から)



歴 2 住全景
(南西から)



歴 3 住全景
(南東から)



歴 5 住全景
(東から)



歴6住全景
(西から)



歴6住カマド遺物
出土(上部)



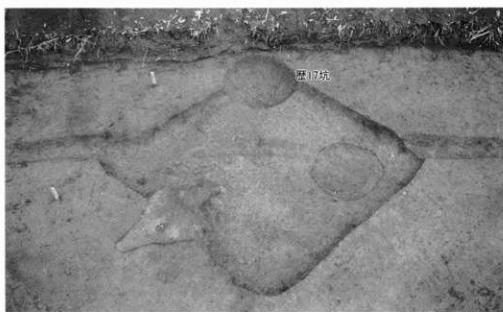
歴6住カマド遺物
出土(下部)



歴7住全景
(東から)



歴7住遺物
出土 (南から)



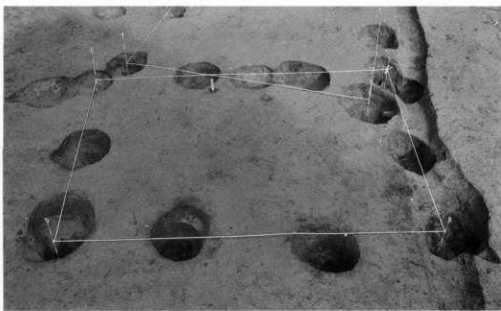
歴8住全景
(北から)



歴 8 住カマド
遺物出土



歴 9 住全景
(北西から)



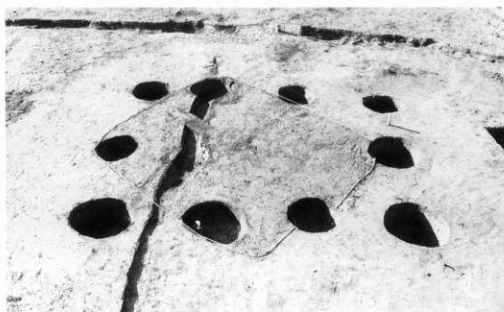
歴 1 掘立全景
(南から)



歴 2 掘立全景
(南西から)



歴 3 掘立全景
(東から)



歴 4 掘立全景
(東から)



歷1坑



歷2坑



歷3坑



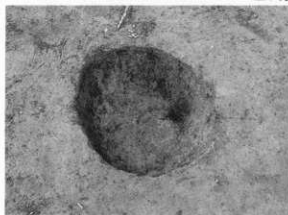
歷4坑



歷5坑



歷6坑



歷9坑



歷10坑



歷11坑



歷12坑



歷16坑



歷19坑



歷20坑・26坑



歷21坑



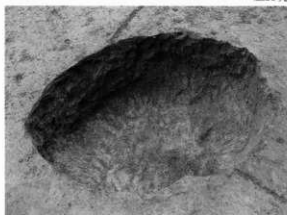
歷22坑



歴23坑



歴24坑

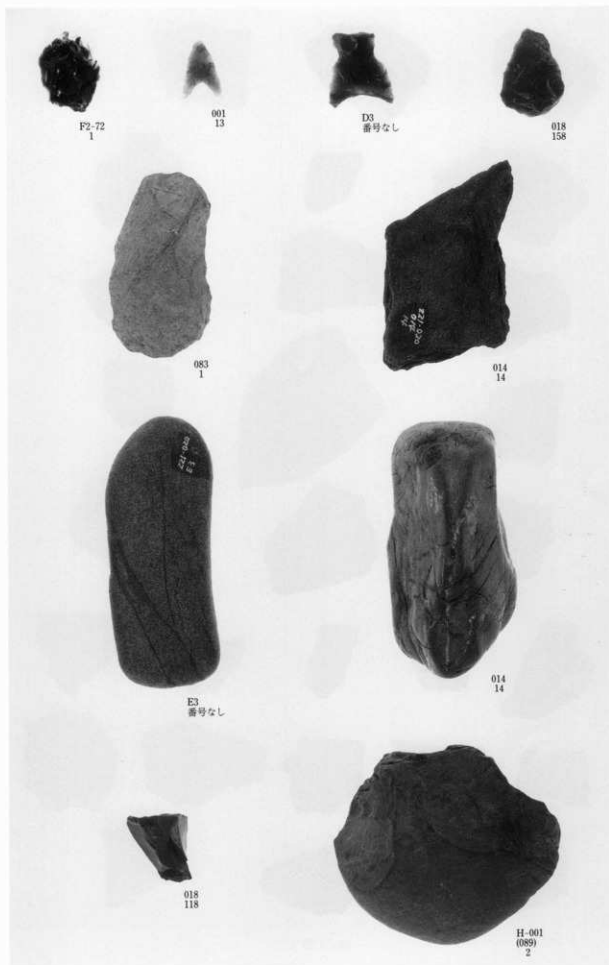


歴25坑

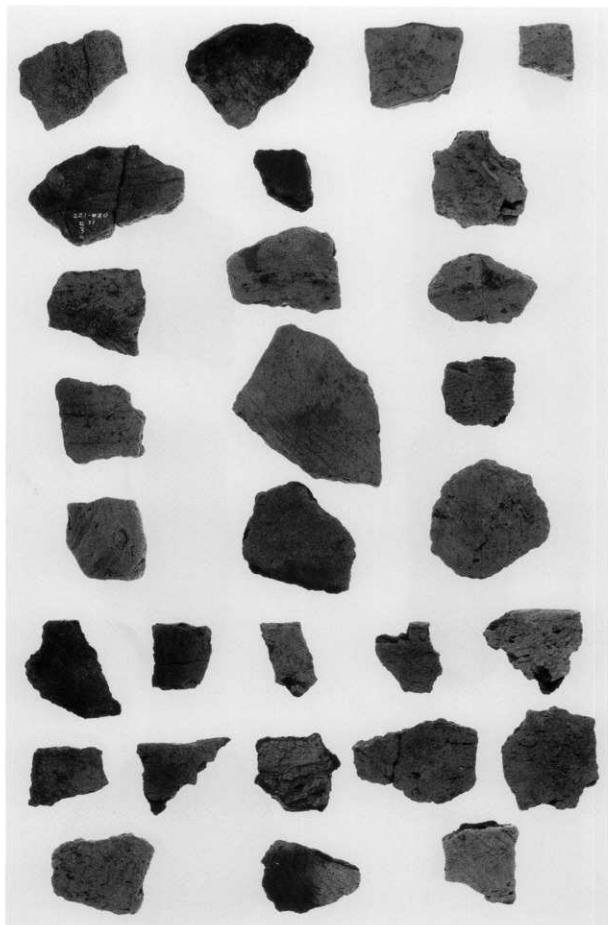
歴史時代土坑 (3)



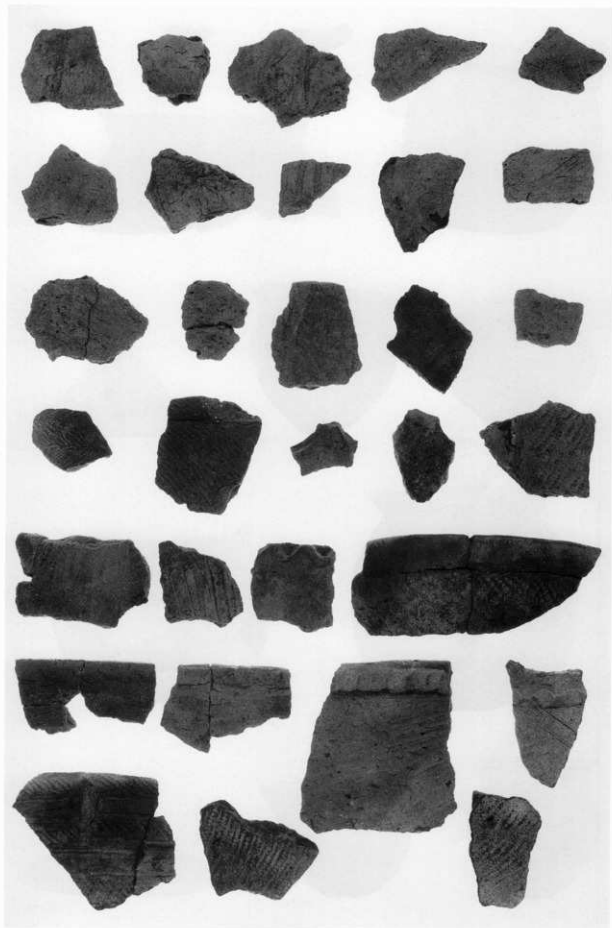
調査風景



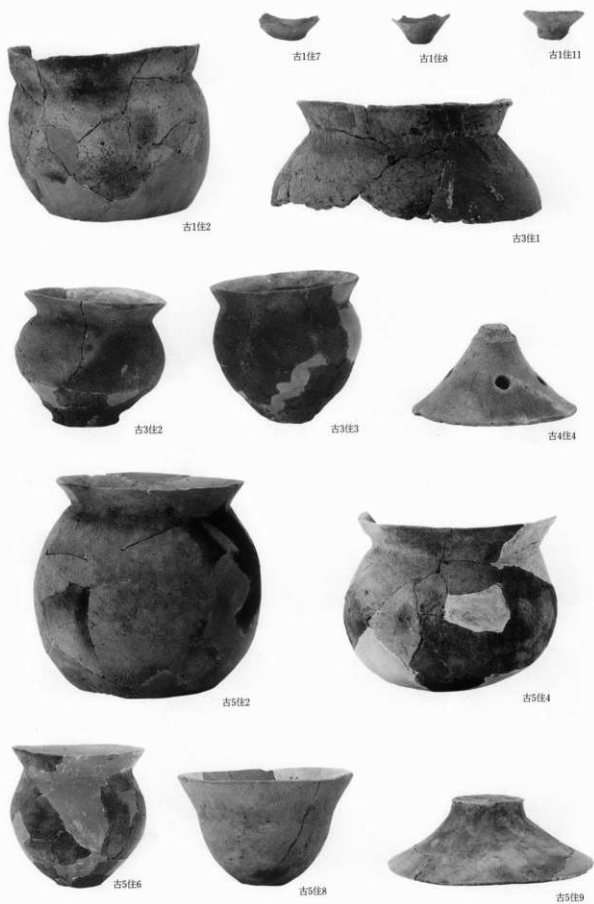
旧石器時代・縄文時代石器



縄文土器 (1)



縄文土器 (2)



古墳時代土器(1)



古5住12



古5住13



古5住14



古5住15



古5住16



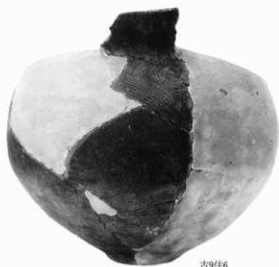
古6住1



古9住4



古9住5



古9住6



古9住9



古10住1



古10住2



古10住3



古10住4



古10住5



古10住6



古11住3



古11住7

古墳時代土器 (3)



歷1住5



歷3住6



歷1住7



歷3住9



歷5住3



歷5住5



歷6住1

歷史時代土器 (1)



歴6住2



歴6住3



歴6住4



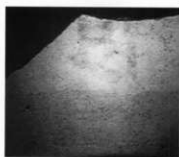
歴6住5



歴6住7



歴6住6



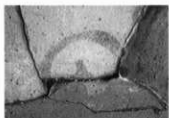
赤外線



歴6住8



歴6住9



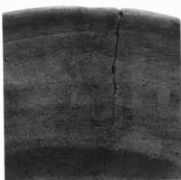
赤外線



赤外線



歴6住11



赤外線



歴6住12



歴6住13



歴6住14



歴6住18



赤外線



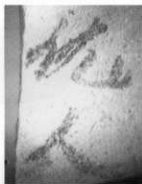
歴6住19



歴6住21



歴6住20



赤外線



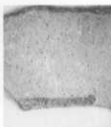
歴6住23 赤外線



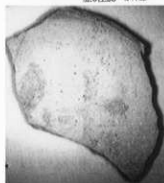
歴6住24 赤外線



歴6住25 赤外線



歴6住26 赤外線



歴6住27 赤外線



歴6住28 赤外線



歴6住29 赤外線



歴6住30 赤外線



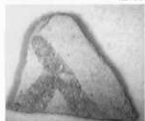
歴6住31 赤外線



歴6住33 赤外線



歴6住34 赤外線



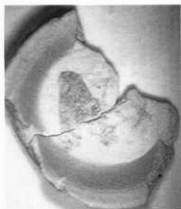
歴6住32 赤外線



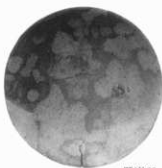
歴6住35



歴6住36



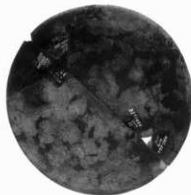
歴6住37 赤外線



歴6住38



歴6住38 赤外線



歴6住39



赤外線



歴6住40



歴6住44



歴6住41 赤外線



歴6住42 赤外線



古6住4



古6住3



赤外線



古6住5 赤外線



歴7住1



歴7住3



歴7住7



歴7住8



歴7住5



歴7住9



歴7住9



歴7住10



歴7住11



歴7住12



歴7住12

歴史時代土器 (6)



歷7住13



赤外線



歷7住14



赤外線



歷7住15 赤外線



歷7住16 赤外線



歷7住17



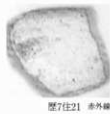
歷7住18 赤外線



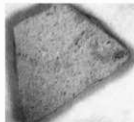
歷7住19 赤外線



歷7住20 赤外線



歷7住21 赤外線



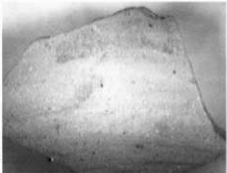
歷7住22 赤外線



歷7住23 赤外線



歷7住24 赤外線



歷7住25 赤外線



歷7住26 赤外線



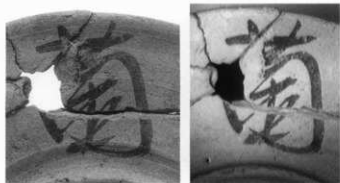
歷7住27 赤外線



歷7住28

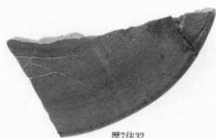


歷7住29



歷7住31

赤外線



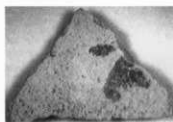
歷7住32



歷8住2



歷8住4



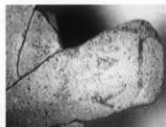
歷8住7 赤外線



古11住8



古11住9



古12住2 赤外線



歷9住1



歴9位3



歴1掘立2 赤外線



歴1掘立3 赤外線



歴2掘立3



赤外線



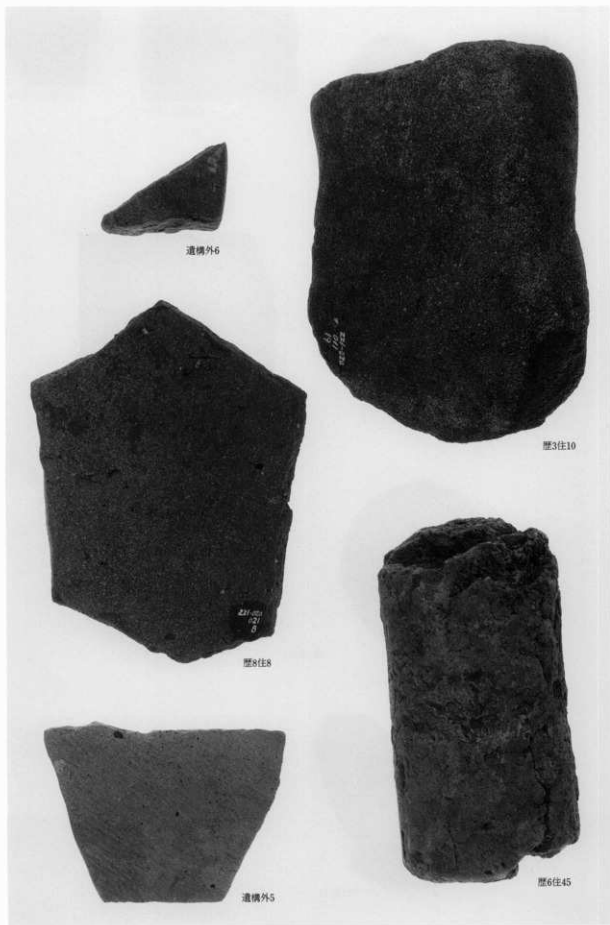
歴2掘立5



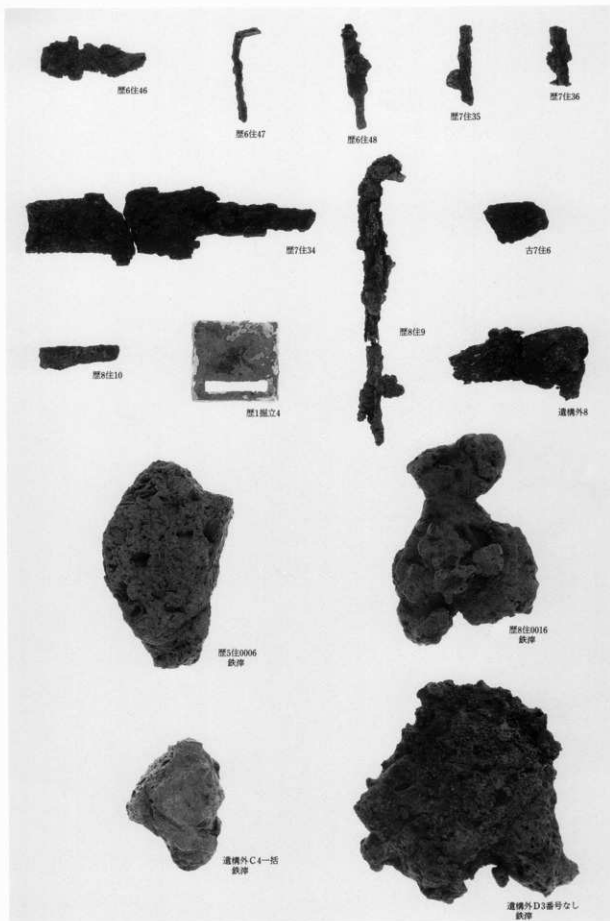
歴3掘立1



遺構外4 赤外線



歴史時代磁石・土製支脚



歴史時代鉄製品・銅製品・鉄滓

報告書抄録

ふりがな	ふなばしいんざいせんまいぞうふんかざいちようきほうこくしょ1							
書名	船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1							
副書名	八千代市島田込ノ内遺跡							
シリーズ名	千葉県文化財センター調査報告							
シリーズ番号	第328集							
編著者名	部淳一							
編集機関	財団法人 千葉県文化財センター							
所在地	〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡809番地2							
発行年月日	西暦1998年3月31日							
よりがな 所収遺跡名	よりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しまだこのうち 島田込ノ内	ちびげんやりよし 千葉県八千代市 しまだこのうち 島田字込ノ内 996ほか	12221	020	35度 45分 43秒	140度 6分 40秒	19931001~19940120	4,000	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
島田込ノ内	集落跡	古墳時代前期 奈良・平安時代	竪穴住居跡 土坑	12軒 1基	土師器	土師器・須恵器・ 墨書土器・刻書土器・ 紡錘車・鉄鎌・ 鉄刀子・銅巡方	住居跡の方向が 揃う 墨書土器が多数 出土する	
			竪穴住居跡	9軒	土師器・須恵器・			
			掘立柱建物跡	4棟	墨書土器・刻書土器・			
			土坑	26基	紡錘車・鉄鎌・			

千葉県文化財センター調査報告第328集

船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 1

八千代市島田込ノ内遺跡

平成10年3月31日発行

編 集	財団法人	千葉県文化財センター
発 行	千 葉 県	土 木 部
		千葉県中央区市場町1-1
	財団法人	千葉県文化財センター
		四街道市鹿渡809-2
印 刷	株式会社	正 文 社
		千葉県中央区都町2-5-5
